
朝の世界

Chechilia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝の世界

【Zコード】

N66860

【作者名】

Chuchillia

【あらすじ】

温暖化が進んだ地球、さらに核汚染に侵されたかつての大陸の調査に行つた女博士を救出する任務を負つた男。死んだ世界だと考えられてきたはずだった大地を支配していたのは　だつた。人類にとって瀕死の地球で起こるのは人間の想像を遥かに超えた現象ばかり。

気象学者やら、地球学者やら、地質学者やら、科学者やら。とにかく、そういう類の人達の大昔の予想はことごとく外れた。ほんとうに大昔の話で、どれくらい前の話だったか、僕にはよくわからぬ。僕だけじゃない、地球で生きのびた人々の多くは、そんなことを気にもしていないだろう。というより、生きるのに必死で、興味を持てないんだろう。まあ、全員というわけではないかも知れない。偉い学者やら、歴史やらに知識のある人もいるだろう。とにかくそれほど古代の話なんだ。

大昔の研究者たちは口を揃えて言つた。例外もいたが、基本的にそうだった。地球温暖化やらなんやらで地球の気温が上がる。近い未来、地上は灼熱の地獄と化し、飲水はなくなる、海拔が上がり多くの島が沈む。それに加えて、資源の枯渇。これは相当に深刻だつたらしく。石油だつたか、そんな名前の種類、そうだ、化石燃料とかいうかつての人類に必要不可欠だった資源が尽きた。

そこで人々は今は誰も立ち入らない、死んだ大地。かつてのアジア大陸だつたか、ヨーロッパ大陸だつたか。とにかくロシアという名前だつた広大な土地をもつ国に原子炉やら原子発電所を大量に作つた。原子炉つていうのは、簡単に説明するとエネルギーを作り出す場所だ。じゃあ大丈夫じゃないかと思ったが、話によると原子炉つてのは莫大なエネルギーを作り出すが、リスクもあつた。簡単にいうとものすごく危険ということだ。事故が起きるとアルマゲドンのような爆発を起こし、毒ガスを撒き散らし、想像を絶する広範囲を死の土地にしてしまう。これが炉心融解だつたかな。

まとめよう、つまりそれは悪魔との契約だ。契約すると絶大な力を手にできるが、ひとつ間違えば悪魔がやってきて、そこいらで暴れまわる。

笑える話をしよう。さつき人類が悪魔と契約したことは話したが。

これはまだ言つてなかつた。67の悪魔が同時に地球上にやってきたこと。

「視界ゼロ、エトセトラオールクリア。気圧、異常なし。オキシジエン良好。これよりマスタートラック降下を行う。幸運を祈る。」

幸運を祈る。ね。全く味気ない言葉だ。と思つた。機械に応援されたところで、嬉しくともなんともない。この低空飛翔船に乗つているのは僕だけだ。

「スリー・ツー・ワン・テイクオフ」

プログラミングされた音声が響いた。ドローンの腹が開き、魚雷のように発射されたカプセルの中に僕はいた。直後、推進力を持つドローンはカプセルの上空を通過した。舵を失つたドローンはそのままはるか前方で墜落すると予測していたが、はるか前方の上空で爆発した。たいした爆発ではなかつた。僕の乗つたカプセルはとうと、先端からトーマスエンジンが逆噴射し、後方から超高度のハード・ファイバーでできたパラシューートを広げていた。徐々に速度と高度を落とし、凄まじい音を立てて地面に滑り込んだ。着地してからもカプセルは1マイルほど進み続けた。その間15秒ほど、僕の鼓膜は地獄の騒音に苛まれていた。ようやくカプセルが止まつた頃、僕はほとんど気絶寸前だつた。

何世紀も前、地球は回転することをやめた。多くの学者は地球の回転が止まるところなるだらう、あなるだらうという仮説を打ち出していたが。実際に起こつたことはこうだ。なぜか朝と昼がこなくなつた。ずっと夜なのだ。地球全体がどうなのかはわからないが、とにかく今人類が住める場所に太陽の光が差し込むことはない。

僕たち人類が住んでいるのは、昔、太平洋と言う海があつた場所のほぼ中央だ。そこ以外の土地は猛烈な寒さで、住むどころか呼吸することもままならない。地球の裏側に行こうとした勇敢なものもいたが、1人として帰つてくることはなかつた。10マイルも進めば吸つた空気で肺が凍りつき、たちまち絶命してしまつような地獄だ。

それから海がなくなつた。温暖化によつてなのか、地球の回転が止まつたことによつてなのかはわからない。とにかく海は干上がつた。そして毎日が夜になつた世界は極寒で、人類は到底生き延びてはいけないだらうと予想されていたが、これも外れた。確かに極寒だが、人類は滅びていない、確かに数は大幅に減つたが、地球の隅っこで集まつて生き延びている。科学力も昔のそれとは比べ物にならないほど進歩した。最も生活に適した土地に人類は巨大なシェルターを作つた。それでもあの圧倒的な寒さには敵わないのでから、やはり寒いのだらう。ただ不思議なことにシェルターから北西、つまり悪魔の襲来によつて滅びた地獄の大陸。不毛地帯。今ではヘルと呼ばれる土地。そこに近づけば近づくほど、気温は高くなるのだった。まあ、それでも寒いらしいが。

頭が痛かった。さっきの騒音のせいだらう。耳の奥に高い周波数の嫌な音がまだ残っている。カプセルから出ようと右側にある扉のスイッチを押したのだが、扉は開かなかつた。僕は左腰のガンホールからプラズマ銃を取り出した。精一杯右側の扉に身体を押し付けた僕はプラズマ銃の引き金をひいた。銃口からわずかに目に見える青い光が出ている。光の先では高温のレーザーが硬いカプセル内の装甲を溶かしている。そこから発せられる熱のせいでカプセル内は猛烈な暑さになつたが、身につけている強化外骨格と体温維持を兼ねる特殊スーツ（ポリノースーツ）のおかげで、出られるだけの熱の切り目がつくまで、熱中症で倒れずに済んだ。僕は円を描いた切り目の真ん中を足の裏で蹴り飛ばした。一気に外から冷たい空気が入り込んできた。だけどそれほど寒くはなかつた、生身でも死ぬほど寒いほどじゃないだろうな。ポリノースーツ越しに僕はそう思った。地獄に送り込まれた哀れな生贋。

ジョン・ビジネス。僕の名前。シンプルでいいだらう？

「到着した。只今よりミッションを開始する。」

「了解。元大陸まで約3マイル。着陸地点が思つたより近くてよかつたな。ジョン。」

ポリノースーツの襟首の無線から声がした。

「そこから先2マイルあたりから無線が通じにくくなると思つ。どうしてかは未だ不明だよ。こちらのレーダーにはなぜかそこから先の状態が映らない。おそらく磁場の関係だ。その影響を受けるところの無線も役に立たなくなるだらう。気をつけてくれ。」

この声はポリノだ。このスーツを作つた男だ。僕はポリノと呼んでいるが、多くの人は名前に博士をつける。

「ポリノースーツの調子はどうだい？」

「悪くない。寒いカプセルの中でも大丈夫だった。プラズマ銃を使つた時は相当熱くなるだろうと身構えたんだが・・・」

「プラズマ銃？」

ポリノが驚いたような声を上げた。

「君、どうしてそんなものを？戦いに行くわけじゃないんだし、その周辺には危険な動物もいないとデータにでてる。今回の君の任務は調査だ。博士と博士の部隊にあってコンタクトをとること、何しろもう1ヶ月も音沙汰なしだ。」

「わかつてゐる。だが何があるかわからんだろ？今まで科学者の予想がばっちりあたつたことはあるか？」

「あるに決まつているだろ？全てじやないけどね。」

「落ち着くんだよ。装備があると。」

「装備つて君まさか・・・」

そのとおりや。僕は小さい頃から軍隊で訓練を受けていた。この小さくなつてしまつた人間の世界で戦争など起きる気配はなかつたが、いや、起きようがなかつたな。国と呼べるような国はない。あるのはシェルター内の大きなコミュニティだけだ。とにかく、それでも、軍隊と言つものはなくならなかつた。不思議なものだ。

「一通りの装備は持つてきたよ。ヘイヴンアーミー式のやつだ。」
予想したとおりだ、無線からため息が漏れた。

「はあ、余計な物を。ポリノースーツだけで十分なのに。そつちに行つてもあるのは荒れ果てた荒野だけだよ。大昔の核被害で荒れ果てた場所。なにもない場所。」

そんなところで女博士は迷つてゐるかどうかしてゐるんだから、やはり女の地理感には呆れたものだ。あの博士も女は女だな。

「それよりポリノ、ポリノースーツの放射能遮断は大丈夫か？」

「もちろんさ。そのスーツはハード・ファイバーを圧縮、さらに内部には薄い新鮮な空気の壁を作つてある。その点は絶対に大丈夫だ、君がマスクを脱いだりしなければね。それと」

「なんだ？」

「君は勘違いしているようだけど、そのスーツの機能は防寒じゃない。体温維持だ。暑からうが寒からうが君の体温を一定に保ってくれる。」

「それは頼もしいな。」

「いいかいジョン。その先は未知だ。未だに放射能が残っている可能性も十分ある。むしろその可能性が高い。君が吸う空気、酸素そのものが猛毒なんだ。気をつけてね。」

「まかせておけ。」

無線のスイッチを切った僕は力プセルに開けた穴から外に身を乗り出した。外は暗闇だった。遠くの方に燃えているドローンの残骸が見えた。それ以外は何も見えない。頭までつっぽり覆ったスーツにつながるゴーグルを暗視モードにしてみると、雪が降っていることがわかった。左足から地面に脚をおろした。ざくつという音がした。踵ぐらいまで雪が積もっている。そんな感じがした。

さて、ここからの3マイルなんだが。生身では相当の重労働になつただろう。なにしろここから元大陸だつた場所へ続くのは長く急な坂道だ。それはかつてここが海辺だつたことを想像させた。こんな世界になつても、大いなる大地は簡単に姿を変えたりしない。のんびりと坂を登つて元大陸に近づいた。元大陸と呼ぶのは、海がないからだ。元々は大陸だつた場所も、海がなければバカでかい台地か、山にしか見えない。200mほど歩いたころ、暗視ゴーグルが意味をなさなくなつた。この暗視ゴーグルは僅かな光を集め、拡大して視界を少しでも広げようとしてくれていたが、ここにきて光源が全くなくなつた、カプセルの僅かな機械的な光の点滅、内部ランプの光からはかなり離れたからだろう。はるか前方ドローンの火が消えたのもある。

「まあいい。」

僕はひとりごとを言つた。僕はバックパックから昔ながらの懐中電灯を取り出した。これが生まれたのは何十世紀も前だ。頭につけたり、ペンの反対側につけたり、使い方やサイズはいろいろだが、その役目は何世紀たつても変わらない。懐中電灯の明かりを点けると、人工的な光が80mほど先まで道を作つた。相変わらず辺りは静寂に包まれていた。

ポリノ・スーシは僕の運動能力を最大限、いやそれ以上に引き出してくれていた。もう2マイルほど急傾斜の坂道を登り続けたにもかかわらず、僕は全く疲れを感じ無かつた。強化外骨格とは便利なもので、しようと思えば、5mほどの跳躍が可能になるらしい。しかも、それはもともとの人間の身体能力をサポートするので、身体能力の高い人間がこれを身につければ、さらに強力な身体能力を手

にすることができる。

ここまで来ると、雪は止んでいた。雪ももつ積もっていない。実を言つと、数分前から僕はめまいを覚えている。懐中電灯が照らし出す先の地面が、緑色だつた。基本的にコンクリートの地面で覆われているシールターで産まれてシールターで育つた僕だつて、地面の色ぐらいは知つてゐる。シールターから少し離れればそこはむき出しの大地だ、シールターに住んでいるからといって、一步もそこからでないなんて人はあまりいない。これは本当に地面なんだろうかと僕は疑つた。ポリノ・スーツの上に履いたアーミーブーツが踏みしめる感触も、土や岩の感触ではない。柔らかく、つるつるとしている気がする。ずっと気持ち悪い地面を見ていて気づかなかつたんだろう。ふと顔をあげると、そこには木があつた。巨大な木。1本ではない。僕は並ぶ木々を目で追つた。驚愕だつた。東西か、南北かは今はよくわからない、とにかく、左右に、続く巨大な木々が壁を作つていた。見たこともない巨木、巨木の森、80m、いや100m以上の高さがあるのは間違いない。それ以上の上空は、この懐中電灯の光では照らせない。

「なんだ・・・これは・・・。」

ずっと目を見開いていたのだろう。ずっと口を開いていたのだろう。眼球が乾き、舌が乾いても、それでもまだ僕は動けなかつた。

ふと我に返つた。瞬きをすると眼球に水分が染みいつた。

「ポリノ！まだ繫がつてゐるだろうな！？おいっ！」

僕は無線のスイッチを入れ、襟元のマイクに向かつて叫んだ。しかし、反応はなかつた。予想通りの音信不通。

「なんてこつた・・・」

博士のことは後回しにして、一度引き返したほうがよさそうだと思つた。フィルターまで引き返すことはない。無線が繫がるとこままで引き返すだけでいい。そもそも無線が繫がらないことには回収船はやつてこない。

これは明らかに異常事態だ。フィルターの外に木があるなんて、誰が想像できただろう。そう判断し踵を返そうとした時だつた。何者かに左手の手首を掴まれた。いや、何かに巻き付かれた。（・・・・）と気づいた瞬間。ものすごい力でその何かに引っ張られた。本当にものすごい力だつた。ポリノースーツの上からにも関わらず、僕の左の手首はギシギシと悲鳴を上げている。動物的なスピードで僕を引きずるそれは木々の方から伸びている。方向的にはそうだ。鈍い痛みに悲鳴を上げそうになつたが、悲鳴を上げる前に僕は行動を起こした。今にも浮き上がりそうな両足をしつかりと地面に押し付けた。それから右手で何かを掴みにかかつた。懐中電灯と一緒に握りしめたそれは、ロープか何かのようだつた。太さは人間の腕とかわらない。スーツの力を借りて何かを引きちぎるつもりだつたが。その力は想像以上だつた。生身だつたらどうなつていたものか。

動物的本能だらう、あそこに引きずり込まれて、いい予感はしない。ブーツが騒音をあげながら地面を削り込んでいく。巨木の壁にどんどん近づいていく、必死に抵抗したのだが、僕は為す術も無く大木の森の中に引きこまれていく。森の入口、とでも言つんだらう

か、巨木が壁を作っている間に吸い込まれる瞬間。ブーツの足首から刀身が20cmを超える大きな圧縮アーミーナイフを取り出し、思い切り大木に突き刺した、つもりだった。切れ味抜群のナイフに加えてポリノースーツの加護を受けた馬鹿力で突き刺したつもりだったが、この巨木にそんなものは役に立たなかつた。小さな傷を付けただけで、ナイフと右手は弾き飛ばされた。金属バットで地面にフルスイングした時のような痺れが腕に伝わってきた。

気付くと2つめの木が目の前に迫つていた。思い切り木を蹴りつけて身をよじる。激突は免れたが、バランスを失つた僕はその裏にあつた巨木に身体を叩きつけられた。右肩に衝撃を受けどつしりとした痛みを受けた僕はおもわず目を強く閉じて唸つた。痛みで眼を開けられない。そのぐらいの激痛だつた。その時、もう一つの何か、が僕の右の太ももに巻きついたのが感覚でわかつた。眼を開けた僕は、一瞬、今の状況を忘れかけた。

さらなる勢いで森の奥に背中から吸い込まれる。その時左右から色々な植物が猛烈な速度で通り過ぎていた。それはさつきからそうだ。

だが、僕が見た光景は、本当にそのことを忘れるぐらい衝撃的なものだつた。とにかくこれだけはわかつた。朝がきた。

そのとき、僕は生まれて初めて、朝の世界にいた。今のシェルターに住んでいる人間たちは皆、本当の意味で朝を知らない。止まってしまった地球のせいで、太陽の位置が地球の反対側になってしまったのか、はたまた、遙か上空、宇宙と空の境目に何か特殊な、太陽光線を遮つてしまふ何かが発生しているのか。そうだ、昔はそんなことを科学者が言つていたつけ、ああ、あれは高密度の厚い雲が地球の表面を覆つてしまふんだったか。名前は忘れてしまつたが、あの科学者は「だから気温がこうも低いんだ。」とか言つてたな。とにかく、そういう理由で僕たちは朝というものを、太陽の光というものを知らなかつた。

このまま引き摺られ続けていくと、何か絶望的なことが起こつてしまふ。僕はそう予想していた。それなのに、その景色に圧倒された僕は、壊れたデジタル時計みたいに止まつていた。

一瞬、目を開いた僕は素早くもう一度目をとじそうになつた。眩しかつたからだ。

再度とじかけた目をこじ開けたのは、想像を絶する景色だつた。目の前に広がつたのは遙か天空から伸びる逆さまの木々だつた。何百メートル、いや、何キロあるか想像もつかない巨大な木が天空からぶら下がつていた。どこから宙吊りになつてているのか、僕の視力ではとらえ切れなかつた。宇宙から生えているとも思えなくもない、それぐらい遙か遠くの空。

僕は瞬時に、ピントをさらに奥へ変えた。僕が引きずり込まれた巨木の間から外を確認しようと思つたからだ。咄嗟ながらも僕の頭は割と賢く考えたらしい。「どうして外に光が漏れていなかつたんだ?」理由がわかつた。たぶん、逆さまの木々のように、上空から垂れ下がつているのだろう。それは、それらは、黒い色の葉っぱだった。形状は見たところ変わつたところはなかつた。大きさも、シ

エルターで見かける木の葉っぱと大差はないだろう。問題はその量だ。まさに木の葉のカーテンだった。壁と言つてもいい。天空から垂れ下がる漆黒の木の葉が、少なくとも、僕の視力が見渡せる限りの上空から、僕が見渡せる限りの範囲まで、巨大なカーテンのように、僕の後方からの太陽の光を遮断していた。

つまり、僕からは外の景色どころか、外から見えた巨木すら見えなかつた。カーテンには無数の黒点があつた。奇妙な木々に陽光が遮られている箇所だろう。

だしぬけに、僕の背中を重い衝撃が襲つた。ドン！という鈍い音がなつた。後方への進行が停止した。だが、じわりじわりともう一度、僕に巻きつく何かが僕を引きずろうとする。おかげで右の太ももと左腕に強烈な負荷がかかつた。ずるずる、ブーツが地面を削るときの音がする。突然あたりが静寂に包まれた気がした。

「刃物か爆弾はないか！？あるなら急いでわたせ！！」

重低音の声、大男にありがちな声が静寂を切り裂いた。

僕ははつとした。そうだ、少し前まで命の危険さえも予感していたというのに。刻々と死に近づきながら呆然としていた頭を強引に現実に戻す。（これは夢じゃないのか？）夢であっても、ここは覚醒しなければならない。さもないと死ぬ。そう思った。そうだ、この低い声の主は誰だ？ どうでもいい。とにかく、迫る死を回避するには従うほかない。いや、僕にはそれ以外の選択肢はもうない。必死に覚醒させた頭が、猛烈な思考を開始する。刹那の判断だつた。

脳内の血液が火花を散らしそうな、それぐらいの瞬時の熟考が、バツクパツクのサイドポケットに手榴弾が入っていたことを思い出させた。あれもアンティーケだ。そう思った。

「バツクパツクの右にパインアップルがある！」

僕は大声で言った。最低限の単語だけだつたが声の主は理解したようだ。無言で素早くポケットに手を突っ込む。

「よし。」

荒い鼻息のなかに安全ピンを引き抜いた音が聞こえた。後ろの人物が手榴弾を投げた反動を背中で感じた。それほど遠くへ投げた感じではない。即座に男の声がした。ニヤリ。とするような声だつた。

「近いぞ、覚悟しろ。」

その言葉の直後、太陽の光とは一味違つた、火を伴つた光が僕の背中を襲つた。凄まじいのは音の方だつた。僕は両耳を塞いでいた。男の言葉は遅すぎたし、もつとも、僕に耳を塞げるだけの時間があつたとして、左手首は動かせない。爆発した場所は3mも離れていないに違いない。轟音が聞こえたのは一瞬で、そのあとはキーン、という高音が耳の中で轟いただけだ。耳の中で反響するその音は鼓膜を引っ掻き回すようだ。これが酷い。吐き気を引き起こすような音の拷問だ。それに比べれば、火薬臭い熱風の暑さなどどうでもよかつた。

僕は両耳を押さえて地面に転がった。顔を地面に押し付け、うずくまつた。僕が地面に転がり込めたということは、耳を抑えられたということは、僕を掘んでいた何かは僕を掘むのをやめたということだ。猛烈な吐き気が込み上げてくる。僕はそのまま気を失った。

「起きる。」

端的な言葉が低い声で聞こえた。あえぎながら僕は目を覚ました。夢だと思ったかつた夢のような光景はあいかわらず僕の眼前にある。仰向きに倒れている僕を覗き込んだのは黒い肌の大男だつた。男の奥に見えるのは空ではなかつた。それはなんなのか、正確には僕にはわからない。暗いと言つていいのか、明るいと言つていいのか。どう表現していいのか、最上部は見えなかつた。暗くて見えないのか、いや、たぶん遠すぎて見えないのだ。長いトンネルの先が見えないのと同じようなものだ。先に光があるのかどうかわからない。だが、たしかに先があるということはわかるのだ。簡単に行つてしまえば、それは木もれ陽だ。何百、何千もの太陽の光が斜から地面に突き刺さつている。その中には木々に遮られるものもあつた。遙か上空から降り注ぎ、僕が引きずり込まれた黒い葉のカーテンに突き刺さつていてるものもあつた。僕が見えない遙か上空にも木もれ陽はあるのだろう。籠るような低い声で男は言つた。

「ポリノースーツか。ということはハリー・エルнст博士のところだな。」

ああ、本名はそんな名前だつたか。と僕は思つた。僕は何か違和感を覚えた。わかつた、頭を覆うマスクが外されている。僕は焦つた。猛毒の空気を吸つてしまわないように両手で口と耳をふさいだ。もつともそんなことをしても無駄なのだが。そんな僕の様子を見て男は言つた。

「大丈夫だ、空気は新鮮だ。シェルターの空気より何倍も綺麗だ。馬鹿でかい空調設備があるわけじゃないが、ここの大空気は最高さ。僕には意味がわからなかつたが。男の口調は皮肉を帶びていた。

「どういうことだ? これは・・・」

弱々しい口調だつたと自分でも思つ。まるで他人の声のよつた気

がした。耳の不快感がまだ消えていない。そのせいだらう。

「詳しいことは博士に聞いてくれ。助けに来てくれたのだろう? 報告すること多多そうだな。」

「そういうことだ。博士は無事なのか?」

「もちろんだ。こんなところだったとは予想外だつたが、我々がいるんだ。何とかなつてよかつた。」

「よし、とにかく回収船を呼ぼう。」

「どうすればいい?」

「一度外に出なければならない。理由は正確にはわからないが、とにかく戻らないとコイツが通じない。」

そういうつて僕は親指をかえして襟元を指した。大男がしかめつ面になつた。

「修理する必要があるな・・・」

大男がため息混じりに言つた。落胆の表情だつた

ブルーノ・ガンド

僕は慌てて無線機を見た。男は修理する必要があるといったが、直せるだらうか。物理的なダメージだ。外部からの直接の衝撃によるダメージ。小型で頑丈な無線機はひしゃげていた。

「とにかく、博士にそれを見てもうしきないな。大丈夫、彼女なら直せると思う。」

「すぐに回収船を呼べそつにはないな。なんてことだ。」

「気にするな。」

男は大きな手で僕の方を叩いた。ずつしりとした重みだった。
「お前のせいじゃないさ。とにかく、博士のところに行こう。だが覺悟しておいたほうがいい。」

「そうだろうな。」

男と僕の目線が合つた。

「まだ名前を聞いてなかつたな。おれはガンド。ブルーノ・ガンドだ。」

そう言つてガンドは右手を差し出した。グローブを付けていない手は大きく頼もしかつた。

「ジョン・ビジネスだ。よろしく頼む、ガンド。さつきはありがとう。あんたは命の恩人だ。」

僕は手を握り返した。力強い握力を感じた。

「たしかに、あれは運が良かつた。博士がそろそろ助けが来る頃だろうと予測していたからおれが偵察に来ていたんだ。ここを見たらみんなブツたまげるだらうからな。来てみたらあそこに鉄の塊が突っ込んできた。」

ガンドは太い指で例の黒い葉の壁を指した。なるほど、一部分が焼けている。

「どうして偵察にたつた一人で？」

ガンドの黒い顔がさらに暗くなつた気がした。ガンドは握つてい

た手を離して腰に当てた。僕も手を下ろした。

「・・・人材難だよ。ここに乗り込んだのは15人。博士も合わせてな。来た途端に7人の兵士が死んだ。化物草にやられたよ。お前が捕まつたあれだ。ありやあ肉食性の馬鹿でかい植物だ。」

「そうか・・・。」

悪かつた。と続けようとしてやめた。どうしてかはわからない。だけどそれがいいと思つた。僕は必要な話をした。

「どうして博士と一緒にいない?君や兵士と行動を共にしたほうが安全だろ?」

「もちろんだ。だが安全な場所を見つけたんだよ。比較的ね。」

僕は驚いた。

「比較的?あの化物草はつようよいるつてのか?」

Gandは皮肉的な笑い方をした。

「ハハ、あれなんかまだまだました。あれはこの森の外にいる生物を引きづり込んで食うだけのようだ。詳しくはわからんがどうもそのようだ。不可解だがな。」

「森の外には生物はいなかつたからな。それで」

僕は一拍あいた。

「博士はどこにいるんだい?安全とはどういつ事だ?」

Gandはニヤリ。とした。驚くなよ?といつニコア NSが伝わつた。

「遺跡があつた。古代のな。いつの時代かはわからん。あいにく、メンバーに歴史学者はいないのでな。」

僕は唖然とした。「信じられない。」とやつと声に出した。

「そろそろ出発しよう。ジョン。」

僕は声に出さなかつたが、大きく頷いた。

「遠いのか？僕は訊ねた。」

「そこそこだな。」

ガンドは答えた。

「おれがポイントマンになる。武器は持つていいようだな。軍人か？」

ポイントマン？と僕は思った。そしてその意味がわかつた。警戒しながら進む必要があるということだらう。さつきの化物草みたいなやつがまだいるのか・・・

「ヘイヴンアーミーの訓練生だった。」

僕は控えめに答えた。成績は優秀だったが。

「訓練生？」

ガンドは首を傾げた。そして田尻にしわを寄せた。

「そりやあ頼もしいな。若いと思つたよ。」

笑顔で言つているが、皮肉かどうかはわからなかつた。

「念のためにひと通りの武器は持つてきたんだが、まさかこれほど役に立ちそうだとは思わなかつたよ。」

今度は僕が皮肉つてやる番だつた。

「俺もさ。幸運だつたよ。武器がなかつたら入り口で全員死んでいたよ。あの化物草の餌になつてただろうな。」

「すまない。」

今度はそう言つた。

「気にするな。」

男は背中に背負つていた巨大な銃を手に持つた。この大男の巨体をもつてしてもなんだかアンバランスな、それほどの大さだつた。それに応えて、僕も腰のホルスターから小型のコイルガンを取り出した。小型のと言つても通常の銃の1・5倍サイズはある。持てるなら可能なかぎり強力なものがいいと踏んだのは正解だつた。強化

外骨格がなければこんな重いものはサバイバルには適さない。そうだ、これはサバイバルだ。

「行こう。」

ガンドは心なしか小さな声でそう言って歩みだした。ギシリ、と地面を踏む音がした。

僕はガンドのあとに続いた。地面には大量の葉っぱが落ちていた。歩くたびにギシギシと音を鳴らす葉は湿っているのだろう。それにしても不思議な色をしている。ぱつと見て2種類の葉があることに僕は気がついた。まず1つ目の葉っぱは完全に円形をしている。そしてその色は輝くオレンジ色だつた。黄金が蠟燭の光を帯びたときの色に似ていた。サイズは僕の手のひらの半分ぐらいしかなかつた。湿つた紙幣のような柔らかみがあつた。もう1つは針葉樹のものと思われる葉っぱだ。こつちは赤に近い色だつた、そうだな、濃赤、臙脂色というべきかもしれない。ワイン色とも言える。難しい色だ。大きさはオレンジの葉と大差はない。周りの木々は相変わらずはるか天空まで伸びているし、どれもこれも巨大だつた。形状は明らかに木だがその直径は大小様々だつた。直径300mはゆうに超えるだろうというバカみたいにでかいものがあつた。だが地面から生える木々たちの直径は最低でも50mはあつただろう。地面から生える。とわざわざ言ったのはそうでないものがあるからだ。僕が見たことのあるサイズの木がそれに値する。それらは木から生えていた、横に。巨大な樹の枝だつたのかもしれないが。僕の目には木そのものに見えた。枝の生え方や木と木のつなぎ目を見ても、やはりそれは木から生えた木に見えた。たまに僕達が踏んでしまいパキッと音を立てて折れる落ちている木の枝はこの小さな木から落ちたものだろう。それから、あととあらゆる場所、地面、木、樹の枝からはチヨーリップやバラ、コスモス、僕が見たことのある普通の花が生えていた。異様な光景だつた、どれもこれも単独で咲いていたし、どうしてそんな所からと思わずにはいられないところから生えていた。30分ほど歩いているとき僕は完全に無防備だつた。おかしな風景

に口を開けた大間抜け、ジョン・ビジネス。アリスの森に迷い込み、呆気にとられる生贋うさぎ。

「どうして軍隊に？」この世界に戦争はない。もつとも、戦争するほど人間はいない。だからと言つてまるつきり平和つてわけでもないけどな。」

Gandが言つた。なんというか、この男は割と弄れたタイプの男だな、と思った。皮肉屋だ。それに皮肉が好きなんだ。

「どうしてだらう。血じゃないかな。先祖には軍人が多いらしい。「面白いもんだ。戦争のない時期もあつたが、何故か軍隊つてのは常に存在してた。」

僕はコクリと頷いた。風はない。あたりの木々が、花々が、草々が、じつとこちらを見ているような気がした。沈黙の中、植物の監視の中を僕らは延々と歩いた。僕はふと弾かれたアーミーナイフを思い出した。あれは大昔の僕の祖先が使つていたナイフだった。もともとはただのナイフだったが、ポリノがぼくの家の倉庫からホコリまみれのそれを改造して圧縮アーミーナイフにした。まあ、僕はそういうノスタルジックなことにあまり興味はない。行方不明になつたまま消息不明になつた先祖の名前が今でもスペインに彫られている。ポール。そんな名前だった。わりと便利だったのに、無くしてしまつた。そう思った。伝統のものを失つたとか、そんな感覚はなかつた。

出し抜けに、Gandが立ち止まり、手で僕を静止した。『つい手のひらがこちらを向いている。じつと遠くのほうを見つめていたGandは手を払い、こっちへ着いてこい。の動作をした。潜むようなGandの動きにつられて、ぼくもそれを真似た。妙な緊張感が湧いてくる。僕らは地面すれすれに生えている、横向きの木に見を潜めた。

「どうしたんだ？」

僕は訊ねた。ガンドはスナイパーのように木から向こうを伺っている。

「蜂だ。」

「蜂？」

僕は不思議に思った。今度は別に驚きはしなかつた。生物が、虫の1匹や2匹いたところで、驚かない。それぐらいでは驚かなくなつてしまつたのだろうか。僕が不思議に思ったのは、ガンドが身を潜めるように促したことだ。

「蜂か・・・。」

はちみつでも食えたらうまいだらうな。そんな風に思いながら、僕も木から顔を出した。アホのように見えたに違いない。

「蜂だ・・・・。」

そう言つたきり僕は固まつた。撤回しよう。簡単に言おう、驚いた。そこには1匹の蜂がいた。蜂の姿をしていた。実際には、身体が、胴体と腹が少し膨らんでいる蜂。普通、蜂つてのは集団でいるものだ。だがこの蜂はたつた1匹。木にとまつていた。茶色い木の側面にとまつていたので、見えてしまえば明らかだ。蜂がいる。

蜂独特の縞模様が、緑と黒で構成されていた。

「スイカ蜂。そう呼んでる。」

となりの大男が言つた。僕の質問には抑揚がなかつた。平行なトーンだつた。

「色のことか？サイズのことか？」

「・・・両方。」

エメラルド

僕は阿呆のように繰り返した。深く納得した。2本の腕が生える上半身、とでも言つのか、とにかく頭、上半身、下半身と分けるならば、上半身と下半身はまさにスイカのそれだ。大きさ、色、まさにスイカ。細かい毛の生えたスイカだ。大きなエメラルドグリーンの瞳がひときわ不気味で、まさにエメラルドのそれだつた。正六角柱のエメラルド宝石を敷き詰めた巨大なハニカム構造の巨大な目。「見つからぬようないぐで。静かに。」

小声でガンドが言った。

「凶暴なのか？毒は？」

僕は聞いてみた。いや、確認してみたといったほうがいい。どうみても凶暴そうだし、絶対に毒もあるな。ケツに毒針が仕込んでるに違いない。

「どうだらうな。今のところ、襲われた奴はない。毒はわからないうが。あるだらうな。毒がなくても噛まれりや大怪我だらう。下手すりや食われるな。単独行動らしいのだけが救いだぜ。」

「もつともだ。」

本気でそう思つた。あんなのの集団に襲われたら生き残る自信は微塵もない。僕たちはエメラルドグリーンの瞳から目を離さないようにながらジリジリとその場を屈んで進んだ。スーツがなければ腰を痛めていたかもしれない。わりと長い時間そうしていたに違ない。突然、スイカ蜂が翼を広げた。額に冷たい汗が滲んだ。緊張が走つた。僕は決死の思いでコイルガンを構えた。銃口は蜂の方を向いている。ガンドも巨大な銃のトリガーに指をかけた。じつと身構えた。身の毛もよだつ羽音が轟いた。気持ちの悪い音だつた。ハチやハエが飛び回るときの音を耳元で聞いたときのあれと同じだ。全身が鳥肌になつた。ところが、スイカ蜂は明後日の方向へ飛び去つた。蜂が見えなくなつてから僕たちは立ち上がつた。

「ふう・・・」

ふたりとも額の汗を拭つた。そしてまた歩き出した。

「もうすぐだ。」

「そりゃあ嬉しいね。」

僕は言った。

僕らは歩き続けた。感覚的には1時間ほどだったと思う。僕が初めて朝を見てからかなり時間が立っているのだが、太陽の光の眩しさはそれ以上強くも弱くもならなかつた。この世界は、不思議な巨木の森は、永遠の朝の世界なのだ。木漏れ日に向かっている間にも、僕は見たこともないような現象や草花、生物に驚かされた。何故か大きなリーチを描いてそびえ立つ巨大な桜の樹が本当に美しかつた。10m程上空へ伸びたかと思うと、そこから釣り針を描くようにして下向きにカーブを描き、その先端には花びらが咲いていた。気絶しそうなほど誘惑的な香りはあの桜の花びらから発せられているに違ひない。その時、僕は桜の花びらが蜜を出すということを初めて知つた。地面から3m程のところにある逆さの桜の花々は淡いピンク色の蜜を滴らせていた。みると、その下の地面にはピンク色の水溜りができていた。甘美で艶やかな液体はワインに染められた水銀を思い出させた。あまりの美しさに僕はかえつて毒々しさを感じた。永劫の眠りを与える。それほど美しさだった。魅惑的毒々しさだつた。僕はやつとの思いで、あの水溜りに近づこうとする自分を諫めたのを、よく覚えている。

「近づくなよ。」

ガンドにそう言われなければ、僕は永遠の眠りについていたに違いない。

「おれもあれを近くで見たくなつた。おれが近づこうとしたとき、鳥が飛んできた。明らかにあの蜜溜りに近づこうとしていた。ところがだ、急に鳥が落ちたんだよ。本当に眠るようだつた。蜜溜りの手前に墜落して動かなくなつた鳥を、おれは睡然として見ていた。何事かと思つたさ。そのまま鳥は動かなかつた。」

するとな、桜の花びらから何か黒くて小さな物が落ちてきた。生き物だつたに違ひない。大量の、極小の生物。蟻だつたのかもしけ

ない。見たこともない数の蟻が鳥の全身を覆い尽くしたかと思うと、あつといつまにその小さな生物は樹を登つて花びらの中に戻つた。鳥がいた場所には何も残つていなかつたよ。一羽も、血の一滴も。」

そういうのは共生というんだつたかな。と僕は思った。この話を聞いた時ぐらいから、僕はもうどんな事があつても驚かないだろうな。と思った。これだけ自分の想像の遙か上をいく事態を連續して経験させられると、そうなつても仕方がない。

「到着だ。」

出し抜けにガンドが言った。

「到着？ 何も無いじゃないか。」

「ここだよ。」

ガンドは足元の落ち葉を足で払つた。大量の落ち葉はそれなりの重みがあつたらしい。ズズズ、という音がなつた。見ると地面から大きな取手があつた。何で出来ているかはわからないが、頑丈そうなのは見てわかる。

「手伝つてくれ。」

僕はガンドと一緒に取手に手を掛けた。タイミングを合わせて同時に引き上げた。思ったよりも分厚く、大きな扉だつた。扉の上から落ち葉が流れ落ちていく。スーツの補助がなければ到底開けられなかつたに違ひない。

「なんだこれは・・・」

僕はひとりごとを言つたつもりだつた。完全に開いた扉の下に梯子があつた。地下はかなり深く、地表の様子は見えない。

「入るぞ。」

ガンドは端的に言つて、僕を促した。

「気をつける。」

僕は頑丈そうな素材の、あの取手と同じ素材だろう、梯子に足をかけ、慎重に体を沈める。それに続くようにしてガンドが上から梯子

に足を掛けた。

「よし、扉をとじるぞ。」

「わかった。」

ガンドは右手で内側の取手を握り、唸りながら扉を勢い良くしめた。轟くような爆音がなつた。同時に強烈な風が上から僕を襲つた。油断していたら吹き飛ばされていたかもしない。それぐらいの音だつた。音の方も、パイナップルの爆発音を間近で聞いたりしていなければ、かなりまいつていたとおもう。

扉が閉まるとき、そこは絶対の暗黒だつた。漆黒の宇宙だつた。周囲数メートルも、数センチもなかつた。一切の視野がなかつた。僕は僕の周りの空間に吸い込まれそうになつた。永遠につづくような闇に溶かされそうになつた。僕はその感覚に気を失いそうになつた。今僕は上を向いているのか、下を向いているのか。暗黒は、重力さえも飲み込んでしまつたのかと思えるほど、僕は平衡感覚を失つていた。

気が遠くなるのがわかつた。このままでは梯子から両手を離し、落ちてしまうだろう。いや、僕は本当に今、梯子につかまつているのだろうか、僕はもう落ちているのかもしれない。絶対の不可視が、僕からすべての感覚を奪つたように感じられた。

出し抜けに光が見えた。それは紛れもなくガンドの点けたライトの光だつた。頭上に光が見えたので、さつきまで失っていた上下の感覚が戻ってきた。重力が足元に向けて力を発揮していることも感じられた。平静を取り戻した僕は、自らのライトか何か、光を放つ何かを探そうとして、森の外で使つた懐中電灯を思い出した。だがそれはすでに僕の手元にはなかつた。バックパックのどこかにしまつてしまつた記憶はなかつたので、圧縮アーミーナイフと一緒にどこかに落としてしまつたのだろうと諦めた。そこで僕は、スーツの胸ポケットから頑丈なペンを取り出した、反対側を絞ると、それは螢のように人工的な光ではあるが、発光した。ペンライトとしては強力な光だつたが、ガンドが使うさつきよりも小型のアンチマテリアルライフルのサーチライトよりは微弱な光が僕のまわりを照らし出した。だが地下の空間はサーチライトや僕のペンライトが照らし出せる範囲よりはるかに広大で、やはり四方の空間の広さを把握することはできなかつた。足元を照らしても、やはり下の空間は光の照らし出す範囲より相當に深く続くよに感じられた。実際そうだろ？。

「この梯子はどれくらい続くんだ？」

「1時間ほど下れば足元がある。墜ちたらただでは済まないだろ？。スージがあれば死にはしないだろ？がな、頭さえ打たなければ。」
僕は気が遠くなりかけた、あと1時間、この梯子を下り続けなければならぬのだ。僕は深海を着実にもぐり続ける深海潜水艇を思い出した。何一つない圧倒的な暗闇のなかで、自らのために発光し続ける孤独な一人旅。実際のところ、僕は潜水艇はおろか船すら見たことはないのだが。そもそも海というものは存在しなかつた。しかし今では、広大な海だつて、どこにあるのではないかと、地球を疑えるまでになつていた。

Gandhは見た目より気さくな男で、長大な梯子を降りている間、いろいろな話を聞かせてくれた。その話によると、この先には研究所があるらしい。信じられない話だったが、死の大地から逃れようとした人々が作ったシェルターだろうと言われて、僕はなんとなく納得した。太平洋という海があつた場所に逃げ出した僕らの先祖とは別に、地下に避難所を求めた人々も存在していたのだ。ということは、他にもどこかにシェルターが存在している可能性は大いにある。ただし、そこに逃げ込んだ人々が行きている可能性は高くない。Gandhが言うには、ともかくこのシェルター内には一切の生命反応がなかつたらしい。人間どころか、虫や鼠のような小動物の一匹も存在しないということだ。それより小さな微生物や植物に関しては確認できなかつたらしい。生き物の死骸や残骸は全く見当たらなかつたという。これは少し妙だつた。逃げ込んだ人々がいたのならば、何らかの痕跡があつてもおかしくはないはずだからだ。何しろその地下施設には今でも飲み食いできる食料と水が、そのすべてが保存食ではあるがあるというのだから。僕は何世紀も前の保存食を想像してみた。うまく想像できず、それが形を成す前に僕は想像を諦めた。僕は森に落としてしまつたアンティーケの懐中電灯と先祖の思い出が詰まつていたであろうアーミーナイフの話をした。僕はそれほど気にしていたわけではないが、それを聞いたGandhは氣の毒そうな顔で「残念だつたな。」といつた。

「いいんだよ。そういうことには興味がないんだ。実際、僕は先祖の顔も知らないからね。」

「いや、惜しいことをしたぜ。そういうものはきっとお前を守ってくれるんだ。」

「そういうものかい？」

「そういうもんさ。」

地下の地表に足をつけたとき、僕は心底安心した。大地の温かみを地の底で感じた。比喩表現ではなかつた。

梯子から手を離したとき、しばらく拳を開くのに時間がかかった。僕は思ったよりも強い力でずっと梯子を握り締めていたらしい。グローブの中の指先まで血液が行き渡る音が聞こえた。それは実際に聞こえた。何しろここは静かなのだ。僕は両手の手のひらを見つめた。心臓の運動に合わせて、両手は鼓動しているように思えた。暗黒世界の囲繞の中で、僕の両手ははつきりと熱を帯びていた。

「よつ」

鈍い音がしたが、僕は特別に見向きもしなかった。ガンドが梯子から飛び降りた音だと僕は疑わなかつた。そして実際にそうだつた。彼の巨体が約2mの高さから飛び降りたというのに、頑丈な地面は僕にわずかの振動すら与えなかつた。

「行こう。あとは歩くだけだ。もちろん、わりと歩かんと行かんが大丈夫だな？」

大丈夫じゃない。と言いたかつたが、僕は頷いた。まったく、女博士はよくこんな道のりを乗り越えたもんだ。と僕は思った。スーツの力がなければ、女性が突破できる道のりではない。もつとも、スーツなしでは僕だって途中で力尽きていただろ。

この広大な地下のスペースに、まさか暖房設備があるとは思えなかつたが、どうしてか、こここの温度はかなり快適なものだつた。だがそれでも、永遠につづくかとも思える巨大な、触れるのできな暗黒の壁は何かしらの底知れぬ悪寒を僕に与え続けた。ここが人工的に作られたものなのか、自然に生まれた場所なのかという判断が僕にはつかなかつた。地面に入り口が、ご丁寧に扉があつたのだ、だからもちろん、ここが人によって作られたことは明らかなのだが、それでも何かしらの自然の空気がここには漂つっていた。おそらく、長い時間が立ち過ぎたのだろう。人工的に作られた地下シェルターは長い時間をしてその役割を果たし、恒久の時間によつても

う一度、自然に戻されたのだ。何しろ長い間、それこそ永久とも言える期間、この空間は止まっていたのだ。ただ時間だけを残し、忘れられていた。時間が全てを自然に返し、同化させた。

「着いたぜ。」

ガンドがあまりにも出し抜けにそう言ったので、僕は少し驚いた。ガンドのサーチライトが照らすその先に、拍子抜けするほど人工的で、何の変哲もない扉が現れた。どんな素材でできているかは僕には想像できなかつたが、それは鋼鉄のような物質だらうと僕は想像した。実際にそれは鋼鉄に近い何かに違ひない。鉄というのは独特の冷たさや重みがある。そういう雰囲氣があるのだ。匂いがするのだ。

扉の中に入った僕はもつと拍子抜けした。驚いたことは驚いたのだが、あまりにも準備ができていた。どんなところだらうと僕は想像していた。その想像はありえないことだつた。突拍子も無い想像だつたが、確かに想像していた。だから僕はガンドに、ここがどんなところか訊ねなかつた。簡単にいえば、僕はそこが何かの研究施設のようになつているのではないかと思つていた。あの変わり者の女博士が滞在することに決めたのだ、それぐらいのびつくり施設じゃないと、彼女はそこに留まろうとはしないだらう。部隊の、彼女を護衛する隊員が、露骨に嫌そうな表情をしたところで、彼女はそれをみんな無視して奥へと進む。そういう女性だ。なんとなく、それは間違いないと僕は信じていた。結果的に言えばそこはやはり研究施設と言つてよかつた。大昔のコンピュータや機器がそこにはあつた。超が頭につくほどの年代物のホロ・スクリーン・システムや、原始的な配線の伸びたビル式コンピュータなどがそこにはあつた。そしてその施設は、僕の想像よりも遙かに狭かつた、天井は3m半ほどしかなく、面積もテニスコートより少し広い程度だ。驚いたのは、そこにある施設のコンピュータなどのいろいろな機器が作動していたことだつた。ほんとうはそれにだつて驚いていいはずだつた。慣れというものは怖い。夢想だにしないハブニングやイレギ

ユラー、驚きに対しても人は慣れる事ができるのだと僕は悟った。
証拠は僕、精神がおかしくなっているのかも知れないけれど。

「やあ。」

眠そうな声がした。女の声だった。やつとお出ましだ。肘掛け付きの椅子を滑らせて女博士がホロスクリーーンの向こう側から現れた。スクリーンを突き破るようにして現れた彼女は白衣を着ていた。僕はそれに少し驚いた。女博士はそんな僕の心理を見透かしたように言った。

「着心地は悪くないんだがな。むしろよく出来ている。さすがに彼の作るものは良い。文句なく高性能だ。何と言つたか・・・。」「ポリノだ。」

眉間を右手の人差指と親指でつまんだ彼女に僕は言った。

「そうだ。ポリノ博士。しかしながら、あのスーツを着ていると・・・着るべきものを着ていると違う感じがしない。」

そうだろうな。と僕は思った。彼女は白衣の下に白いブラウスを着ていたが、そこから連想されるのはあまりにも女の体だった。あのスーツは、実際には問題はないのだが、この美しい体には似合わない。ブラウスのすべてのボタンを止めるのはかなり困難だろう。

「脱がせてもらつたよ。」

「そつちの方が似合つてる。問題ないだろ。」

「外に出るときは身につける必要があるんだがね。算出したところ、地上の放射線レベルは人体に悪影響を与えるレベルではなかった。しかし、あの自然だ。まいつたよ。専門外だ。私は動物や植物に関する研究をしたことは一度もない。それらの細胞や遺伝子や組織のことならそれなりの知識が通用するかもしれないが、はつきり言つて、ここにいるあれらは生物であるということころまでしかわからない。そもそも、存在したこと驚いた、生物類がね。存在しないものを研究するなど、馬鹿馬鹿しいことだ。」

僕との女博士は初対面だ。僕の方は彼女を知つてはいたが、

何しろ彼女は有名人だ。変わり者の天才科学者として、ポリノと双璧をなす変人。名前も知らない初対面の男に、これだけ捲し立てられるのは変人だけだ。度を超えて馴れ馴れしいと言つてもいい、とにかくこのフレンドリーな女博士にとつて僕の名前など興味の対象の枠を大きく外れているのだろう。

「ジョン・ビジネスだ。」

僕は彼女の話が文脈的に句切れがいいと思つたところで、人生で最もシンプルな自己紹介をした。

「ビジネス。忙しそうな名前だな。君は歴史に興味はあるか？あるいは君が歴史学者としてこのチームに参加してくれる人材ならば、大助かりなのだよ。」

「生憎だが、歴史の知識については一般的の範囲を出ないよ。どうして？」

「動植物がいるからさ、生物学者が研究しているのはあくまでシールター内の農作物だけだ。彼らに関して、私は農作物学者と呼ぶことが正しいと思うね。いや、別に彼らに対して不満があるわけではない。私はこう考えるのだよ。この遺跡と言つてもいい原始的な、まあうまく作られてはいるが、地下シェルターにしてもそうだが、ここに存在している生物も、あるいは古代に存在した種族のものかも知れないと思つてね。すでに絶滅したと思われていた種類のものだよ。例えば、サメとか、クジラとか、ゾウとか、カロールとか。私だって名前ぐらいは聞いたことがある生物か、それとも少なくとも我々には未知の既存生物か。何しろここは何世紀も未踏の極地だったんだ。もしそう仮定するなら」

僕はそろそろ、彼女の言葉が自分に向けられている言葉なのか、彼女のひとりごとに過ぎないのか、判断が付きづらくなつてきた。

「歴史学者に力を得たほうが効率が良さそうに思えるのだよ。」

彼女が続きの論理を発せようとした時、他の女の声が、博士の言葉を遮つた。

「彼女はファリス・ロマンコフ博士。知つてゐると思うけどね。それ

から私はミコキ・エレレンス。よろしくね。」

明らかにミコキ・エレレンスは女博士の代わりの自己紹介をした。

「ありがとう。」

僕は心の底からそういった。

ミコキ・エレレンスは博士とは対照的に背の低い女性だった。知的な雰囲気は博士とそれほど変わらないが、彼女の場合、それは怪しげな魅力になつた。

「ジョン。よく来たわね。よく来れたわね。と言つべきかしら?私たちを助けに来てくれたのね?」

博士とは違つてスーツを着たままのミコキ・エレレンスが透き通つた声で言つた。

「僕は助けに来たつもりだ。ポリノは興味本位かもしれない、つまり何か面白い発見か何かがあつたんじゃないかっていうやつさ。その博士が死ぬわけない。何かあつたんだろう。と言つてたな。」

僕は博士の方を見て言つた。

「何かあつたな、完全に何かあつたと言えるな。」

後ろからガンドが言つた。彼の巨体を見たあとミコキの姿は小動物のようだ。

「どんなことがあつたのかは後で詳しく訊かせてもらひつもりだ。だがその前に、ここは何なんだ?」

「わからんな、入り口があれなんだ、研究所兼ねたシェルターだと考えるのが妥当だろう。見ればわかると思うが、これらの、年代物のコンピュータがまだ作動するということには驚かされたな。」

「そういえば、入り口はあそこだけなのか?」

「おれは知らん。ここについてわりととすぐに戻つたからな。どうなんだ?探索チームにはお前も入つていたはずだ。」

「2人死んだわ。」

小柄な女は俯いて言つた。躊躇無く言つた言葉だつたが、やはりそれは僕達の心を暗くした。それでも女は、立ち向かうように続けた。「地上に繋がりそうな扉は3つあつたわ。1つは開かなかつたけど、たぶん、向こう側に何かがあつて開かないのよ。もうひとつはまだ

調べていなかった。とにかく、3つの扉があるところまで調べたのよ。

そこでミコキ・エレレンスは両手を頭の後ろで組んで俯いた。

「続けて。」

「2人の 僕には誰だかわからないが 死に悲しんでいないわけではなかつたが、博士は半ば機械のようにミコキに言つた。ミコキはそれに不満を感じているようには見えなかつた。むしろ、そうするのが正しい。という風に、一度ふつと口から空氣を吐き出してから続けた。

「とにかく私たちは扉から出てみることにしたわ。最初に行つたのがさつき言つた開かずの扉、次の扉を開けてみると、実際にそれはとの世界とつながつていた、私たちがここに来るまでに見た不思議の森の続きのような場所だつたわ。だけど

「僕は何人のうちの2人が死んでしまつたんだろう。と思った。もし

3人なら、彼女以外は全滅してしまつたことになる。

「違うのよ。明らかに生き物の気配がしたのよ。それも1匹じゃないわ。ここに来るまでに見た獰猛な植物のことを言つてゐんじやないのよ?たしかにそういうのもいたと思う。」

僕は、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「動物がいたわ。一種の生態系があつたわ。実際そういう痕跡はあつたし、何より。」

この時、ミコキ・エレレンスは今までで一番難しい顔をした。

「あれは虫だつたわ。大きな虫が私たちを襲つてきたのよ。」

ジョージ・バンディクー

ミコキの話によると、彼女たちは、外に出るための他の扉やら、古代人が残した何らかの遺跡やら道具やら、とにかく未知の何かを探索しようと4人のチームを作り、実際に探索をしていたらしく、すると3つの扉が見つかったのでそのうちの1つを開けてみた、それは確かに外の世界につながっていた。ところがその先には訳の分からぬ生物がいて、隊員の2人がその謎の生物に襲われ、死んでしまった。その生物は残ったミコキ・エレレンスとジョージ・バンディクーにも襲いかかろうとしたが2人は間一髪のところで襲撃を逃れ、ここに帰ってきたということだ。

「見たこともない生物だったわ。体長は4mほどあった。あの大きな、不気味な羽音は」

ミコキは両耳を抑えた、スースの下では鳥肌が立っているに違いない。

「思い出すだけで吐き気がする。大きな目が複眼で2つあった。私たちの頭より大きな目玉よ。細長い6本の手足に細長い胴体。背中には4枚の、とにかく大きな透明の羽があつたわ。

ブリックは高速で飛んできたあれの羽に胴体を引き裂かれて死んだわ。彼の悲鳴が耳から消えないのよ」

ミコキは嘔吐を堪えて続けようとしたが、ガンドがそれを遮った。

「無理に話さなくていい。2人だけでも助かっただけましだ。」

「いや、話しておいたほうがいい、ミコキも話すのは辛いだろう。おれが続きを話そう」

そこには短躯で筋肉質な男が立っていた。

「無事でよかつた、ガンド。それからよく来てくれた、感謝する、ジョン。ジョージ・バンディクーだ。よろしくな」

「ジョージ。よく帰つたな。怪我はないかね？」

「もちろんさ、博士。怪我一つ無い。ブリックとウェインのおかげだよ。感謝しなければならない。2人には」

「そのようだな。悲しいものだ」

博士は手近にあつた椅子に腰掛けた。その表情は部下を失つた上官のそれだつた。立場的には実際にそうなのだろう。実質的に彼女がリーダー的な存在であるとは思えないが、名目的には彼女がこのチームのリーダーなのだ。

「とにかく、話さなければならない。さつきあつたことを。ミコキ、その場にいた君に話す必要はない。気分がすぐれないなら、向こうで休んでいても構わないよ」

大丈夫よ。とミコキ・エレレンスはすぐに応えた。

「いいだろう。ミコキの言つたとおり、ブリックとウェインが死んだ。巨大な昆虫に殺された。俺が知つてゐる、つまりシェルター内でも見かけられるハチとか、アリなんかとは全く違つ構造をしていた。」

「攻撃的な生物なのか？」

ガンドが訊ねた。早くもこの大男は戦闘時のことを考えている。僕はやれやれと思った。何しろ、ガンドがそう考えているということは、そういう事態が起りうるということなのだ。馬鹿でかい（4mだつて？）昆虫の駆除。

「いや、体の構造からは攻撃的なものとは思えなかつた。毒針も牙もなかつた。武器になりそうなものといえば、あの羽だな。薄い鉄板のような羽が高速で羽ばたくんだ。肉食性にも見えなかつた、そもそも口がなかつたから、バタフライのように樹液か何かを吸つているのかもしねい。」

「そんな昆虫が2人を殺したのか？」

僕は訊ねてみた。仮にも軍隊の人間が強化外骨格を身につけていたのだ。

「そうだ、もちろん準備があればそれなりの対処はできただろう。しかしあれは本当に突然の出来事だった。いきなり後ろから飛んできたんだ。あれは相當な速さだった。そのときだよ、奇妙な羽音がして、突然何かが破裂するような音が聞こえた。気づいたときにはブリックは10mほど先にあつた巨大な木に激突していた。彼の胴体は右の脇腹から心臓に渡つて完全に避けていた。ほとんど即死だつたろう。もし彼が死んでいないのであれば、俺達は今からでも助けに行かなければならない。だけど、あれは、完全に死んでいた。

俺たちはすぐに上空を見た。羽音がする方向だ。そこにやつがいた。1人殺されたんだ。俺達は退散しようとした。その扉は例によつて地面から地下へつながるものだつた。つまり梯子があつたんだよ。俺達は一人ずつ扉に入る必要があつた。扉の近くにいたミュキが先に扉に入った。次に俺が入ろうとしたとき、やつはウェインの背中に向かつて突進した。俺が咄嗟に銃を取り出そうとしたとき、ウェインはブリックの死体と反対側の木に激突していたのだよ。致命傷だつたに違ひない。背骨が反対側からへし折れるような衝撃だつたろう。その時、ウェインにはまだ息があつたと思う。そして巨大な昆虫は俺に向かつて突進を試みようと、明らかにこちらに向かつて飛んできた。

「ちょっと待つてくれ。ということは、ウェインはまだ生きているかもしねないのか？」

ガンドが僅かながら非難するような目で言つた。

「いや、だめだらう」

「なぜだ？」

「例の化物草がいたんだ。扉に飛び込んだ時には、もうウェインはやつの触手にとりつかれていた。そうやつて間一髪、俺達は逃げてきたわけだよ」

「そうか、何にせよ。その昆虫の対処法を考えておく必要があるな。

「いつどこでそいつに襲われるかわからん」
やせり戦うときは来てしまうのだろうか。

「ところで、大佐と先生はどこに行つたんだ?」

まるでさつきの話を、つまり2人の死の話を聞いていなかつたよう博士は言った。無論、彼女にも、その死を残念に思う気持ちはあるのだろうが、僕にはよくわからなかつた。つまり、彼女が本当にそういう事に対しても関心があるのかどうかということだ。たぶん、あるのだろう。彼女だつて人間で、そして女だ。僕はあまりにも、彼女の世間一般のイメージを持ち過ぎていて。そのイメージは気づかないうちに増大していった。しかし実際、彼女は確かに変わつてゐるが、人間的な心を持ち合はせているのだ。

「先生?」

僕には意味がわからなかつたので、あまりにも意味がわからなかつたので、自分の意志とは関係なく、ほぼ脊椎反射的に訊いてしまつた。本当は僕はこの間、口を閉じてゐるつもりだつたのだ。

「そう呼んでいるだけよ、だつてこういう所に来るんだもの、ドクターは必要でしょ? 本名はレイヴン・ジャックよ。ドクター・レイヴン・ジャック。優秀な医者よ

それを聞いて僕は驚いた。

「レイヴン・ジャックだつて?」

彼がこの作戦に参加しているというのか? ミユキは僕に彼は優秀な医者だと言つた。それぐらいのことは僕も知つていた。ミユキだつて僕が彼のことを知つてゐることはわかつてはいたはずだ。なぜなら、ドクター・レイヴン・ジャックは有名人で、現在の衰退した文明で言うなら、彼以上の名医はいない。天才外科医として世に名を知らしめる最高の名医だ。だが僕が驚いたのはそんな最高の医師がこのチームに携わつてゐるからではない、レイヴン・ジャックという人間が携わつてゐるということに驚いたのだ。そもそも、彼は嚴格たる医師免許を持つていて、そのことは誰もが承知だ。だが多

くの患者が彼のもとを訪れる。極点な人間を象徴して話すなら、天才レイヴン先生のもとに行けば万病は治癒し、あらゆる怪我が復元されると思われている。

そんなことがあるはずはない。馬鹿馬鹿しい、どんな病気も、怪我も治してしまう医者。そんな人物がいるとすれば、それは天才科学者であり、天才精神科医だ。だが実際、彼はそうではない。天才科学者であるかどうかについては僕は知らない。あるいはそうであるのかも知れぬけれど、僕は知らない。僕が確固として否定できるのは、彼が天才精神科医ではないということだ。

レイヴン・ジャックは医師免許を持たない。そして彼は良心の治療行わない。つまり、彼の治療には莫大な金が必要なのだ。そのために彼は医師免許を持たない、そんな医者が良き精神科医でありますまい。

僕が入隊したちょうどそのぐらいの時、ドクター・レイヴン・ジャックは世間を大いに賑わせた。

ある老人を不老不死にさせたのだ。

それは科学的成功だつた。老人の生命サイクルが半永久的に続くと理論的に確認されたのだ。そしてその証明には著名な、権威ある2人の科学者が立ち会つた。ポリノと、ここにいるファリス・ロマンコフ博士だ。その時の2人の博士の言葉を、僕はよく覚えている。あの日、研究施設に帰ってきたポリノの顔は青ざめていた。気絶しそうな目と、さも恐ろしいことが起きてしまったという風に、こう話した。

「あつてはならないことが起きてしまつた。生命への冒瀧だ。恐ろしいことだよ。確かにシン老人の生命サイクルは理論的には半永久的に繰り返されるだろう。だけどね、人間は摩耗するんだよ。摩耗する永久機関と変わらない。それは真的永遠ではないんだ。わかるかい？あの男が創りだしたのは、單なる残酷な処刑なんだ。精神的処刑だよ。彼が治すのはね、殼だよ」

そしてファリス・ロマンコフ博士の言葉を新聞で目にした。

「すごいことなのかも知れない」

それから3週間後のことだ。ドクター・レイヴン・ジャックは、
その老人を殺害した。

「ヤブ^{クアック}医者^{じや}じやないか」

僕は立ち上がりかけた。僕とポリノは昔からの友人だ。彼が凶人だと呼ぶ人物を、僕は好きになれない。たとえポリノがそう思つていなくとも、僕の好きなタイプではないことは明らかだ。

「違うのよ、ジョン

「誰がやかましい（クアック）つて？」

そこに立つっていたのは不気味な色、不気味な顔をした男だった。ポリノースーツとは別の強化骨格スーツの上に黒いコートをまとった男は、僕に死神を思い出させた。

「先生、大佐と一緒にやなかつたんですかい？」

ガンドが意外にも好意的な、友好的な雰囲気で話しかけた。

「カツサード大佐なら1人で探索を続ける。私も行くと言つたんだがね。大丈夫だと退かなかつた」

「でもいくら大佐でもあんな大きな怪物が出てきたら太刀打ち出来ないわ」

「君が言つていた昆虫のことかね？私たちが見つけたのは外へ出る扉ではなかつたよ」

「どううと？」

いつの間にかはつか煙草を咥えている博士が言つた。

「別の部屋を見つけたつてことだな」

「素晴らしいな」

「私が行くと邪魔らしい。それに私が負傷すると何のための医者かわからんそうだ」

「なるほど、さすがはカツサードだ」

僕はこの会話を唖然として聞いていた。僕の目は言葉を発する人物へと次々視線を変えていた。実際的にそれは何かを見るという行為でなく、あるいはただ漠然と見るという行為をしていただけかも

しない。

この黒尽くめの男は闇医者で、詐欺師で、殺人者なのだ。そしてそれより、どうしてこんな男がこの作戦に参加している？要請があつたとして、それはわからないでもない、超一流の、神の手を持つ医者だからだ。^{アウタ}問題はどうしてこの気まぐれな大物が、世間からのはじめられ者が、その要請に応じるのだ？

僕は乾いた唇を無理やりこじ開けて声を出した。

「どうしてあんたがここにいる？」

医者は戸惑いもせず答えた。

「私だつてこんな、一文にもならない話はごめんだ」

そして医師はニヤリと、悪意ある笑みを浮かべた。

「正式な医師免許が欲しくてね」

「国の要請か？」

「もちろんだとも、わかってるだらう？私が善意でこんなことをするのも？」

そう言つて笑うドクターを見て、僕は奇妙な感覚を覚えた。確かにとびつきりの悪人だ、僕は好きになれそうにない。しかし彼からは、どこかしら僕が想像してた程の狂人的性質は感じられなかつた。

「守銭奴め」

「君が私の何を知つているか知らんが、どうさ、私はね、金というものが大好きなんだ」

医師はニヤリと笑つてゐる。僕の悪態を全く気にする様子はない。おそらく、慣れきつてゐるのだろう、ニヤリ悪態をつかれることに。もし慣れていないとしても彼はこつこつとに動じない性格なのだ。僕は何となくそれがわかつた。彼は世界の嫌われ者であることに愉悦を感じてゐるようすら見えた。

「だが、私は君のことを知らない。恨みを買つた覚えはない。つまり君と私は初対面だ。治療を断つたことも、治療をしたこともない。つまり君も私のことを本当はよく知らない。だがね、私はあんたの想像通りの人間さ。そう思つてくれて構わないぜ」

彼は悪人特有の余裕を惜しみなく持ち合っていた。神がいるのならあまりにも不公平だ。あるいは彼が神の両手をもぎ取つてしまつたのかもしれない。彼がどんな人間であれ、その両手には神業が備わっているのだ。

「カツサード大佐が見つけた部屋というのはどこなんですかい？先生」

「南だ。ただ、扉の先にあつたのは部屋ではなく廊下だよ。カツサード大佐は一人で探索を続けている。向かうかい？」

「そうですね、大佐と合流してこれからの方針を立てたい」

「私が案内することになるようだな、やむを得ない」

「3人程度でいいわね、大佐を見つけたら帰つてきましょ」

「それがいい、私はここに残つて作業を続ける」

博士ははつか煙草をくわえて年代物のコンピュータに向き直つた。

「作業？」

一度コンピュータに向き直つた博士に、僕の声は届かなかつた。答えたのはガンドだつた。

「無線機だ。俺達がここに持つてきたものは使い物にならなくなつてしまつた。周波数の問題だつたが、地場の関係だつたが、とにかく博士が今、新しいものを作つてゐるんだよ。幸いにも材料や器具は揃つてゐる」

「じゃあ僕の無線機はどうせ使い物にならなかつたわけだ」

「そうとも限らんよ。ポリノ製だらう？俺達のものとは違う、もしかすると使えたかもしれん」

「悪かったな」

巨体に見合つた笑い声と共にガンドは僕の背中を叩いた。

「氣にするな。とにかくもう無線機は使えない。新しいものができるまでまとう。博士のことだ、そう長くはかからんよ」

スーツを着てゐるにもかかわらず背中に強烈な振動を感じたのは、大男もスーツを來てゐるからだろう。凄まじい怪力の持ち主なのだ、この男は。

「私と先生、それからジョン。この3人で行きましょう。ガンドは

博士をお願い。できれば女2人が一緒にいるのは避けましょ「う

「うむ

ガンドは力強く頷いた。

「ジョン。この施設の全容を、私たちも理解しているわけじゃない
んだけど、あなたはここに来たばかりだし、私たちと一緒に行きま
しょう」

「わかった、役に立てればいいけど」

「大丈夫よ、あのエルンスト博士が選んだ人だもの。さあ、急ぎま
しょう」

ただ友達だからだよ。僕はそう思つたが、口には出さなかつた。
事実、僕が選ばれたことは事実だし、役に立つつもりでいたからだ。

博士と会つた大部屋の南側には扉があつて、その先には廊下があつた。そして廊下は二手に分かれていた。一方の道をミユキとジョージ、そして死んでしまつたウェインとブリックという2人の男が向かつた。そしてもう一方の廊下を進んだのがレイヴン・ジャックとカツサード大佐だ。

僕はカツサード大佐という人物を想像してみた。頭が良い人物なのだろう。敏腕のエリート軍人、そんな感じだらうなと僕は想像した。何しろあの博士に「さすがはカツサードだ」と称され、ひねくれ者のレイヴン・ジャックにそれなりの指示を出し、おそらく超優秀と言える軍人の集まりであるこの部隊の要に選ばれた人物なのだ。ガンドのような大きな体にミユキのような知性を持ち合わせ、ジョージに劣らぬ社交性を持ち合わせた完璧な男、そんな男の姿を想像しようとしてみたが、それはひどく難しい作業だった。それは僕の想像する完璧を超えた完璧なかもしれない。

「先生、ここから先はお願ひします」

「かまわんが、ただまつすぐ歩けばその扉はある。それから先にまた廊下が続く。そこから先は私たちにとつて未知だ。冒険だな」「カツサード大佐を1人で行かせたのか?つまり、先が無くなつたから大佐を残したのではなく、大佐1人にその冒険をさせたのか?」「そうだ、はつきり行つて彼が太刀打ちできない問題が発生したとしたら、私など足手まといにしかならんよ」

医師は歩みを続けながら話した。僕の目は先にある扉を見続けていた。それからふと、天井の両隅にあるライトのことを考えた。どういう仕組でこのライトは機能しているのだろうか。博士が点けたのだろうか。まさか大昔から点きっぱなしだったわけではないだろう。

「2人で引き返してもよかつたんじやないか?何か急がないといけ

ない理由でも？」

「さあね、私は医者だ。軍人の考えることなどわからんよ。大佐が

そういう性格なのがもしかん。無駄を省略したいのかもな」

「ミコキ。そういえば僕は聞いていない、なぜこんな地球の最果てに調査に来ているんだ？ 結果的に、こんな場所があつたわけだけど、それは予想されていたことなのか？」

「何も聞いていないの？ エルンスト博士もわりといい加減なのね。科学者の人たちってみんなそうなのかなしら」

女博士に会つてから、僕もそれについて多少の疑問を持つていた。

「私たちが探していたのはね、熱資源よ。この地域に近づくほど気温が上がるのを知ってるわよね？」

「えらく安いな考え方だな」

「それがそう単純でもないのよ。確かに考え方はシンプルよ。だけど状況はあなたが考えているよりはるかに深刻だと思うわ。」

最も簡単な言い方をするならこうね、私たちの住むシェルターにはもう、資源がないのよ。エネルギーを作り出すための資源がね。シェルターで最もエネルギーを使っているのはどの機関か知ってるわよね？」

「空調管理かい？」

「そうね。もつと詳しく言うならばね、温度調節よ。ナスカ・システムも万能じゃない。時間と共にじわりじわりとその力を失っていくわ。食物や電気に関わるエネルギーを作り出すのにサラ・システムはそれほどの資源を必要としない。熱を創りだすのにもね。だけど熱に関して私たちが枯れ果てた自然界以外から補わなければならない莫大なエネルギーはね、ナスカ・システムをもってしてもそれほど長く持たないことがわかったのよ」

「補えなくなるとどうなるのかね？」

質問したのはレイヴン・ジャックだった。

「寒くなるなんでもない。シェルター内の人間全員がこの无数次を常に身につけたとして、1日に何人もの凍死者が出ると思われます」

「不可能だな。そもそもこのスーツをつくるのにどれほどのエネルギーを必要とするか」

後に聞いたところ、この医師の着ているスーツだけはファリス製でも、ポリノ製でもないらしい。ファリス製のものに似ているのは、彼が女博士と共に自分で自分専用のスーツを使つたからだ。

制作に莫大な費用を要するこのスーツを特注することを、政府はもちろん拒んだ。しかし最終的にはこのやぶ医者に専用スーツを用意するはめになった。医師の言い分としては、医者には医者のやり方と用意がいる。ということだ。もつとも、ファリス製とポリノ製のスーツに大した違いはない。やぶ医者専用スーツがどのようにできているかは知らないが、多少の構造や装備の違いはあるが、そのスペックに大きな差はないだろう。

「だがそれで、どうしてここに来るんだい？新しい熱エネルギー算出システムを考えるほうが可能性がありそうなものだが」

「その可能性がなかつたのよ。この問題を解決するためにファリス博士と、あなたによく知るエルンスト博士はシステム開発に躍起になつた」

知らなかつた。ポリノはそんなプログラムにも参加していたのか。「だけど無理だつたのよ。一時的な熱を僅かな期間作り出すことは可能だつたけど私たちの生活を支えられるほどの熱のみを生み出すことはできなかつた。本当の、ただの熱だけを生み出すことができなかつたのね。具体的に言うとね、私たちが求めていたのは気温なの、気温という自然のものを作り出すプロセスは、シェルター外部が極寒となつてしまつた今、どうしようもなく実現できないことなの。片方のパズルを組み合わせると、必ず反対側のパズルが外れてしまう。ファリス博士がそう言つていたわ」

「ここに来てようやく、女博士がファリスと呼ばれることに僕は慣れてきた。しかしポリノがエルンスト博士と呼ばれることに慣れるのには、もう少し時間が必要かもしれない。

「つまり、これは最終手段なのよ。人類の最後の頼みの綱」
知らなかつた。今日は知らなかつたことをいつぺんに知りすぎだ。
何しろポリノはそんなことを僕にいちいち説明しなかつたのだ。

「全く不運だ。どうしようもないから、とにかく暖かいところに行つて、そこは住めるのかどうか、あるいは何故そこに気温があるのか、生贊にさんに来たというわけだぜ」

あるいはレイヴン・ジャックの言葉は正しいのかもしれない。
「まず住めそうにないね。そして僕らはまだ先に進まなければならぬ」

「そうよ。そして確かめないと、外で見た光が本当に太陽の光ならそこでミユキは「あなたもそう思つたでしょ?」といふ顔をこちらに向けた。

「私たちの、はつきりしないものだけ、私たちの歴史の間違いが証明される、太陽はあつたのよ、私たちに見えないところにあつただけ。素敵だと思わない?」

僕はそれについて何も答えることができなかつた。あの時、僕は確かに、天空から突き刺さる光の束を、本能的なものだらう、太陽の光だと感じた。そんな僕の心を見透かしたように、レイヴン・ジャックは言った。

「あれは太陽の光だね。私も初めて見たが、私の本能はあれを太陽だと疑わなかつた。世界に存在する最高のプログラムはね、本能だな田は、僕には掴めない曖昧さと不自然さの霧の中に、優しそうな影をちらつかせていた。

「先生、ロマンチックなことですよ。プログラムだなんて、機械的な言葉で片付けないでください」

黒い衣装に包まれた医者は笑つた。

「ロマンチックなのかい？これは？面白いぜ、君は。だが君だって、初めてなのにそれが恋と、初恋だとわかつただろう？」

僕がミユキ・エレレンスの女性らしさについて、容姿と言葉遣い以外で感心したのはこれが初めてだった。

非現実的な空間での非現実性は、それとは逆の一種の現実性を僕に感じさせた。

「さて、ここから先の道は私にはわからない。開けてもいいのか？」

「僕が開けよう」

僕は念のためコイルガンを右手に構え、^{セーフティ}安全装置を外した。それに答えるようにミコキはペルーサ19を両手に構えた。歴史ある、女性らしいマシンピストルだ。カップアンドソーサーのそのスタイルが美しく、これもまた女性的だつた。レイヴン・ジャックはとうと、両手をポケットに突っ込んだまま。この男は銃を持っていないのだろうか。

僕は扉に左半身を寄せて逆手の左手でノブをしっかりと握った。ノブからは何の感触もしなかつた。スーツからつながるグローブの生地が軋むような音を少し立てただけだ。

反射的に軍隊式の言葉が口から出た。ただしそれほど大きな声を出さないよつにはした。

「ムーヴ」

それと同時に僕は室内に飛び込んだ。思つたほどドアは重くなかつた。鋼鉄に近い種類の材質の扉だつたが、僕はほとんど力を込めずにそれを開けることができた。そうだ、僕が着てているのは強化外骨格をまとつた特殊スーツなのだ、鋼鉄の扉があつたとして、こじ開けるのにどんな苦労も必要ではない。もつともこのドアに鍵穴は存在しなかつたのだが。

僕が飛び込んだすぐその後に、身を寄せるようにしてミコキが飛び込んできた。僕は両足でしっかりと床を踏みしめて右斜め前方に向けて両手でコイルガンを構えた。跳ね上がりの強いコイルガンの衝撃に備えたその構えはフインガーレストだ。僕はここに来る前、しっかりと僕の指の形にあわせてトリガーガードを削つていた。万全の準備は時に不安を取り除いてくれる。だがそれは非戦闘状態の時の気休めに過ぎないと僕は知つた。ミコキ・エレンスは左膝を地面に付け、僕とは反対側、つまり左斜め前方に向けてペルーサを構えた。美しいカップアンドソーサーは依然として変わらない。

刹那の時間、僕らはその体制を保っていたが、すぐに大した危険がそこにはないと判断できた。やはりこの施設内は安全なのだろうか。地上にいた僕達に危害を加えるおそれのある動植物はそのテリトリーをこの地下に向けてはいない。というよりも物理的に見つけられず、侵入もできなかつたのだ。恒久に近い時を経て、この空間は僕達に侵されたのだ。

僕は銃を降ろした。安全装置は念のため外したままにしておいた。ミユキも立ち上がり、ほつとしたように銃をホルスターに戻した。見るとミユキ・エレレンスのペルーサには見事なエングレーブと、見たことのない文字が彫つてあつた。当然その文字の意味は僕にはわからなかつた。だがとにかく、どことなく芸術的で美しい文字だつた。実際には、それが本当に文字なのかどうか、僕に判断のしようはないのだが、なんとなくそれは文字だと感じられたし、おそらく本当に何かの文字なのだ。

両手をポケットにしまつたまま、レイヴン・ジャックがドアから入ってきた。

「これは何というか、馴染みのある感じの部屋だな」

そこにあつたのはベッドのある部屋だつた。もちろん、意味のない飾りのついた豪華なベッドではなく、とてもシンプルな、悪く言えば見窄らしい簡素なベッドだつた。その空間は失われた熱に支配されていた。確かにある数の人間がその部屋を使つていたような痕跡があつた。なぜならこの部屋にはベッドの他にも椅子とテーブル、簡易なキッチンが備え付けられていたからだ。人が生活するために作られたスペースであることは明らかだ。木製のテーブルが時の流れに崩壊させられずにいる光景は、まさに時間という概念の消失を僕に感じさせた。それでもやはりそのテーブルは古びている、木そのものの齢が感じられた。そして僕はそのテーブルから一種の生命を感じることができた。

ミコキ・エレレンスはゆっくりと、優雅な動きを伴い、左手でグリップを下から包み込んだ。すでに右手の人差し指はトリガーに添えられている。敏速な動きではなかつたが、その動作からは緊張感が滲み出していた。

この空間には、僕達が入つてきたドアのちょうど反対側にあるもうひとつの中扉を除けば、異様な物体がひとつだけあつた。ペルーサの銃口はそこに向けられている。それは黒い布をかけられていたが、その中身の形は容易に想像することができた。黒い布の内部のそれは、明らかに人の形をしていく。

アサルトライフル

「そーら、おいでなすつた」

余裕のある声の主はレイヴン・ジャックだ。だがその声とは裏腹に行動は戦闘態勢に移ろうかという姿勢だ。懐に手を忍ばせ身構えている。ミコキの姿勢も戦闘に身構えたそれだ。何があの黒い布の中から現れるかわかつたもんじやない。

僕は黒い布の中にある何かの頭だと思われる部分に照準を定めたまま、じりじりとそれに近づいた。嫌な汗が出た。だがその汗はすぐースツの内側に吸収された。

気づかぬうちに僕はできるだけ音を立てないような歩き方に移行していた。これが本能だろう。自らを守るために入力された最高のプログラム。本能、生存本能。

だしぬけに、何かの気配を感じた。それは黒い布の方向からではない。僕にはそれだけが判断できた。僕の方に向かってきたそれはあまりに素早かった。まだそれが何なのかわからない。僕は黒い布を睨みつけ、戦闘準備の構えをとつたままの姿勢から動けない。

僕の右のこめかみに突き付けられていたのは、アサルトライフルの銃口だった。

「動くな、何者だ」

男の声は最小限の言葉しか発しなかった。渋味のある、深い井戸の底で発したような、低く轟くような声だ。

「待つて！ カツサード大佐！」

僕を死の恐怖から解放させてくれそうな言葉が女の口から発せられた。ミユキ・エレレンスの声だ。

僕は横目で男の方に目を向けた。視界が届かない。男の位置は見事に僕の視界の範囲から消えている。男の姿は隠げにしか確認することができない。そのうえ体の大部分はアサルトライフルの銃口によって死角となっている。おそらく全て計算の上なのだ。ただ者ではない。僕も一端の軍人なのだ。

「彼は味方です」

アサルトライフルは僕のこめかみに突きつけられたままだ。この男に油断の二文字は存在しないのだろう。だがその銃口からは殺意は感じられなかつた。しかし僕がその銃口をかい潜り、反撃の一手を加えるというのは賢い考えとは思えない。僕は本能的に感じているのだ。この男は上手だ。圧倒的な実力差がある。僕を組み伏せる程度のことは一瞬でやつてのけてしまう。それがわかる、本能的に。「大佐。そこをぶち抜いちまつたら治療も何もあつたもんじやないぞ」

ひどくひねくれた言葉のように聞こえたが、それはカツサード大佐を諫めた。僕はこの医者をどのように判断していいのかわからぬ。大物感たっぷりのその口調は、やはりだだの無礼な医者だとうわけではなさそうだ。

「あんたなら治せそうなもんだ」

大佐はアサルトライフルを降ろして言った。僕は心の底から安心した。助けに来たつもりが逆に殺される、なんて不幸でマヌケな話

だろうか。僕は危つくそういう話を作りかけたのだ。

僕はやつとその男の姿を見ることができた。頬のこけたいかにも軍人という感じの男だ。赤土のような色の短く切り立てたような髪は鋭く硬そうだ。顎と唇の上には濃い無精髭が生えている。高い鼻に彫りの深い顔。目は老練で油断がない。

何よりも目を見張るのは男の長身だ。身の丈はガンドのそれよりも大きい。それに加えての細身の体がさらにその長身を際立てている。痩せこけたように見える容姿だが、長大で重みのある軍式アサルトライフルを軽々と片手で構えていたことを思い出すと、スリーブの下にある細身の体に備えられた逞しい筋肉を想像するのは難しくなかつた。

やはり僕が無闇に反撃に出なかつたのは正しい判断だつたのだ。

「すまんな」

大佐は至極短い言葉で言つた。

「お前さんはもう少しリラックスしたほうがいいな。早死するぜ。

シェルターの中に危険な生物はいないみたいだから、もう少し気を抜けよ」

レイヴン・ジャックが呆れたように言つた。

「どうかな。敵がないとも限らないようだ」

「どういう意味ですか大佐。もし敵がいたとしても彼であるはずがないません」

そうだ。もしシェルター内に僕達に攻撃を仕掛ける何かが居たとしても、それは例の化け物草とか、恐ろしく大きな生物であつて人間である確率は低い。仮に人間だとしたら、こちらに攻撃を仕掛けては来ないはずだ。

「彼が人間だからか？」

やはり、その程度のことは大佐にも判断できている。腕つ節だけの軍人ではない。

「そうです。もう少しで彼を殺すところでした」

僕には恐ろしくて口にできないような言葉をミコキは口にした。それとも、僕がカツサード大佐に対して恐怖し過ぎなのだろうか。おそらくそうだろう。

「すまなかつた。何しろ、そつとも限らんのだ」

そう言ってカツサード大佐はさつきの黒い布をつかんだ。どういう事だ？ そうとも限らんのだよ？ 僕が敵となる可能性があつたということか？ 人間が存在し、僕達に危害を加える可能性があるということか？

カツサード大佐は勢い良く何かに被せられていた黒い布を剥ぎ取つた。

「なんだこれは・・・」

僕は阿呆のように口を開けた。啞然としたといつやつだ。見ると、ミコキも驚きの表情を隠せないでいる。

「こりゃあ、たまげた」

レイヴン・ジャックですら驚いた布の中身は人間だつた。いや、正確に言うならば、人間と全く同じ姿をした何か。

それはスキンヘッドの男の姿をしていた。妙に青白い肌を除けば、彼は僕達と全く同じ姿をしていると言えるだろう。ただし、見開かれたままの目からは生氣というものが全く感じられなかつた。彼はただただ何も無い空間を見つめ続けている。それはまさにこの男の時間というものが止まつてしまつてゐるようだつた。

「これは、何でしようか？」

誰にというわけでもなく、ミコキが疑問の言葉を発した。

「人間なのか？」

僕はカツサード大佐に訊ねたつもりだつたが、答えたのはレイヴン・ジャックだつた。

「違うな。彼は人間じゃないぜ。私にはわかる」

医者はこの男を人間ではないといつて、だが医者は男を彼と呼んだ。

「生物なのか？生物特有の匂いが感じられない気がする」

医者は男を生物ではないといつて、どうしたことなのだろうか。あるいは医者が間違つた判断をしているといつて可能性もあるが、彼の言葉にはどこかしら僕達を納得させるものがあつた。確かにそうだ、この男は完全に止まつてゐる。それは彼が生物だつたといつことなのか、もともと生物だつたのか、僕にはわからなかつた。

「さすがだな、医者よ」
カツサード大佐の声が響いた。すかさずミコキが疑問の音を上げる。

「どうしたことですか？これは、何なのですか？」

ミコキが少し興奮気味のを僕は察した。それは動搖と呼ばれる心理状況だ。それは僕にも言えることだ。ただし、ミコキほど物事に對して色んな疑問点を見つけることができない分、僕は彼女よりは落ち着いていた。

「落ち着け、ミコキ。彼はANDROIDだ」

当然のようすにカツサード大佐もそれに気付いていた。ANDROIDイド？何を言つている？そもそも、それが本当だとして、どうして大佐がそのことを知つているのだ。

「ANDROID？」

僕は眩暈を感じながら言つた。カツサード大佐の顔はまるで冗談を言つているようには見えないし、そもそも大佐が必要でないことを口にする性格には見えなかつた。

「ちょっと待つてくれ。何もかもがいきなり過ぎる。ANDROIDイドつて？」

「ANDROIDだ。人造人間だろ？」

「どうして彼がANDROIDだとわかるんですか？」

ミコキはこのANDROIDを（彼）と呼称することに決めたようだ。

「いいだ」

大佐はANDROIDの首筋を指した。黒くはつきつとした、全く劣化していない文字でAndroid.COM - LOGと記されていれる。

ミコキは不思議そくに動かないANDROIDの腕を撫でてこる。

その感触はきっと僕らの腕と何ら変わらないのだろう。

「ANDROID・「ムログ」…どういう意味でしょうか」

「それは私のマーユナンバーです。設定上の正式名称としてはタウマタフアカタンギハンガコアウアウオタマテアポカイフェヌアキタナタフとお呼びください」

クロノキ

僕が驚愕で声を上げそうになつてゐる時、カツサード大佐は既にアサルトライフルをアンドロイドに向けていた。既に完璧な構えが整つてゐる。「お前は何者だ?」とは言えない。何しろアンドロイドは既に名前を言つてゐる。馬鹿みたいに長い名前だ。

数秒間の沈黙があつた。僕とミユキの銃口もアンドロイドを捉えている。レイヴン・ジャックは少し下がつたところで腕を組んでいる。

アンドロイドは完全に沈黙している。恐怖を感じてゐる様子も、焦燥を感じてゐる様子もない。さつきコイツが喋つたのは気のせいだつたのだろうか。僕はできれば 何となくだが そうであつて欲しいと思つてゐた。だがアンドロイドは時折、瞬きをするのだ。その瞬きは全くもつて生身の人間と同じで、それは妙に不気味に見える。

大佐は様子を見ているのだろう。もしにのアンドロイドが何らかの攻撃を僕達に仕掛けようとしたならば大佐は簡単にアサルトライフルの引き金を引くだろう。だがそれでこのアンドロイドが生き絶えるのかどうかは僕に判断できることではなかつた。アンドロイドは相変わらず、両手を上げることもなく立ち尽くしてゐる。人間ならば咄嗟に両手を上げてしまつものだ。

「どうしました? 私はあなた方に危害を加えるつもりはありませんが」

アンドロイドはもう一度口を開いた。

「どうしてここにいる?」

呼応するように大佐は言つた。アサルトライフルはもぢりん構えられたままだ。

「ここに住んでいるからです」

「どうしたことだ?」

「どうこうことだと申されましても・・・ここに住んでいるのです
「ここはどこだ？」

「クロノキです。正確に言えばクロノキ第4地区シェルターです」
クロノキ。彼はおそらく地名のことを言っているのだろう。だが
それは間違いなく大昔の地名だ。僕たちはこんな土地に名前をつけ
てなどいない。この時にもう全員が気付いていた。このandroイ
ドは大昔に製造されたのだ。

「今はいつだ？」

当然そのことに気付いていたカツサード大佐はそう訊ねた。

「瑞歎47年です」

僕達にはそれがどれくらい昔のことなのかわからなかつたが、このアンドロイドの時間が止まつてしまつてはいることは理解できた。アンドロイドは人間らしく作られすぎたせいで、機械的な時計機能を持ち合つてはいるのだろう。仮に彼が精密な時計機能を持つてはいるのならば、何年かわからないと答えるだろう。ただし経過時間がぐらいは把握しているはずだ。

「それはお前が機能停止状態になつた時点の時間か？」

「そうか」と僕は思った。アンドロイドは既に彼が機能停止状態にあつた時の時間を計算に入れてはいるのかもしれない。仮にそうだつたとするならば、僕たちはやはりアンドロイドが機能停止した時間からの経過時間がわかるわけだ。

「申し訳ありません。それは私が機能停止した時点の時間です。私は把握できるのは、あなたがたと同じ体感時間だけです。つまり私が機能停止状態にあつた期間の経過時間は計測できていません」「つまりお前は自らが機能停止してからどれくらいの時間がたつたかわからないんだな」

「はつきりと申し上げますとそういう事です」

レイヴン・ジャックはやれやれという顔をして両手を広げた。ミユキと僕はとにかく彼が僕達に危害を加えそうには無いと見て僅かに安心した。カツサード大佐がやつと大きなアサルトライフルの標的をアンドロイドから外した。その表情にはほとんど形というもののがなかつた。

「あの、失礼ですが、これはどういう事なのでしょうか？」

「なるほど、そうでしたか」

僕たちはアンドロイドに現在の時代の状況についての話を聞かせた。アンドロイドはそこまで驚いた様子を見せなかつた。それは彼がアンドロイドだからなのだろうか？

「驚くべきことです。たしかに、過去からそういう懸念はあります。つまり近未来中に地球が現在のような姿になつてしまつだらうということです。事実そうなつてしまつことが間近に迫つた時代にあの事故ですから、なんとも」

「あの事故？」

あの事故とは、地球を滅ぼす大きな要因となつたとされる魔の事故のことだらうか。僕は訊ねてみることにした。

「事故というのは、原子炉の爆発のことか？」

「そうです。67年福島第一原発事故と呼ばれる史上最悪の原発事故です。もつとも後々の見解としては起こるべくして起こつたと言われる人災です」

「その事故が原因で人類が滅亡したわけではないんだな？」

「もちろんです。大きな要因にはなりましたが。当時の地球上の総人口は計測上で約87億人でした。さらにその人口のほとんどは世界最大の大陸であるララシア大陸に集中していました。元来この地域は乏しい土地と極寒、凍りついた港のせいで過疎であつた地域なのです。ですが、温暖化により赤道付近が居住不能地域となり、港の氷が溶け始め貿易港としての機能を發揮し始めたころ急速に人口が増加したのです」

「それにしてもすごい人口ね。今とは比べ物にならないわ」

「そうでもないですよ。私のデータによれば、過去の世界総人口の最大値は約220億人です。

とにかく、直接的な被害を受けた人々はその内の約35億人にの

ぼりました。そしてその内で災害によって死亡した人々が約30億人。約5億人が被爆し全員が8年以内に死亡しました。食物や水の被爆によって二次的な被害を受けた人々が15億人、被爆した人々はほとんどが死亡し、その子孫にも甚大な影響を及ぼしました。経済の麻痺などによる食糧危機により被爆しなかつた多くの人々も飢饉により死亡しました。何しろ当時の唯一の居住快適エリアだったと言えるララシア大陸で大規模な原発事故が起こったのです

「起ころべくして起こったというのはどういうことかね？」

壁にもたれかかっているレイヴン・ジャックが訊ねた。

「私たちは原子炉を作りすぎたのです。当時ララシア大陸には石油という化石燃料がまだ大量に残っているという予想だったのです。ところが凍りついた大地が太陽の熱で解凍され、本格的な調査が入ると、それは幻想に過ぎなかつたということが判明しました。

そこで代替エネルギーとして選ばれたのが原子力発電だったので、大陸に集まる人々の消費エネルギーを補うには少なくとも75の原子炉が必要なことがわかりました。

政府はなんとか原子炉の数を67まで削減することにまでは成功したのですが、一刻も早い石油からのエネルギー転換を必要とされていたこともあり、無理矢理に原子炉を建設したのです。

立地条件なども検討した結果、67の原子炉群が完成しました

「なるほど、原子炉同士を密集させたのね」

「そしてある日、炉心融解を起こし爆発した原子炉は隣の原子炉を巻き込み、あとはもうねずみ算式です。人類に為す術はありませんでした」

割とまぬけな話だが、大事故の理由など、現実は思うより単純なミスによるものなのかもしない。

「ということはこのシェルターはその爆発が起きる前から存在していたのかね？」

レイヴン・ジャックがもう一度訊ねた。

「そうです。ここは事故現場からは割と離れたところに位置していますし、世界有数の巨大シェルターですから。被害は殆ど受けていません」

「なるほど」

カツサード大佐が長身を乗り出して言った。

「その話はもういい、どちらにしろ我々はここから脱出しなければならないのだ。一度体制を立てなおしてな。だがそれもこの先にそういうものがあればの話だ。熱を生むための技術でも何でもいい。そういうものはこの先に存在するのか？」

アンドロイドは腕を組んで考え込んだ。僕は彼に対して機械が内部に存在するいくつものデータを引き出す様子を連想したが、実際に彼が考え込んでいる様子はまさしく人間と同じだ。

アンドロイドが声を発するまで、そう長い時間はからなかつた。

「無いとは言えないのですが」

ミコキと僕は身を乗り出しだが、レイヴン・ジャックと大佐は極めて冷静な表情を崩さなかつた。

「まず言わなければいけないと思うのですが、あれは熱を作り出す機械でもなければ技術でもありません。端的に申し上げますと、生物なのです。雷吼樹と呼ばれる植物です」

「雷吼樹？それはどんな植物なのかしら？」

「5m程の大きさの植物です。細い幹に長い刺のような枝が付いている植物なのですが、1日のうちの何時間か、雷吼樹は燃えるのです」

「燃える？植物がか？それはどんな仕組みだ？」

レイヴン・ジャックが医者として訊ねた。

「生物が自ら燃えるなどありえない。発光する種や水を出す生物については聞いたことがあるし、その理由だつて理解できるものだ。しかし、植物が燃える？それはどういうメカニズムなんだ？そもそも燃えたあとはどうなる？お前さんの身体についてはよく知らないが、自然の生き物は燃える物質から成り立つのが普通だ」

「その通りです、ドクター・レイヴン、私たちもそのメカニズムを解明できていないのです。とにかく私のデータにはありません。

それからもう一つ申し上げますと、ドクター・レイヴン。雷吼樹は燃えない物質でできているわけではありません。何故なら雷吼樹は発火したあとで、完全に燃え尽きるのです。燃え尽きたあとには黒い灰と細い幹が焼け焦げた炭が残るだけです」

「たまげたな。自らを消滅させる生命なんて想像したことなかつたぜ」

「雷吼樹は確かに消滅します。ですが、復活するのです」

「なんだつて？」

「気が付くと僕は自分で思つていてる以上の大きさの声を上げていた？客観的にはそれほど大きな声ではなかつただろう。しかしそれは僕の考えよりも大きな声だつた。

「復活する？どういう意味だ？」

僕が言う前に、簡潔に、手短に大佐が訊いた。

「復活です。C・カッサード。^{コーネル} 焼けた雷吼樹の炭は時間が経つとわずかに水分を取り戻し、もとのような幹に戻るのです。そして1日も立たないうちに、もともと根が生えていた部分から真新しい根が生え出し、寄生するよ^ウにして地面の中に潜り込んでいくのです。そしてやはり1日も立たないうちに幹はその身を起こし、復活するのです。それから枝が生え始め、80cmほどまで枝が生えたとき、雷吼樹は発火します」

信じられない話だつた。この死の大陸に入る前の僕だつたなら、全てをそんな風に片付けられていただろ^ウ。だが今はそれができない。したくてもできないのだ。このアンドロイドの言つていることは嘘ではない。

僕はもう知りすぎているのだ。化物草が僕自身を捕食しようと襲つてきた、生まれて初めて どれくらい遡れるのかはわからないが僕の先祖においても初めてだろ^ウ 日光を見た、しかも広大な森の中で、圧倒的に聳え立つ巨木の海の底で朝を見た。気が狂つたような自然の底で地下に潜ると、さらにそこには暗黒の海があり、古代コンピュータの揃つた部屋があり、青白い肌のアンドロイドがいて、そいつが僕に、それもえらく丁寧な言葉遣いで、燃えさかつては再生する植物の話をしている。

何もかもがでたらめだ。何もかもがふざけている。

「なるほど、しかしメカニズムやら仕組みやらは俺達には関係の無いことだ。田処が立ちそつなものがあるのならそれでいい。かといってこのままではいかんだろう、一度シェルターに戻つて部隊を立て直す」

（お前さんはもう少し驚いたほうがいいと思つぜ）レイヴン・ジヤックがそんな風に言つてくれるることを期待したのだが、医者はそんなことは言わなかつた。

「ちょっと質問させてもらつて構わないかな？」

「もちろんです。M・ビジネス」

「まず、君のことはどう呼べばいいんだ？その、君の正式名称か何かは少し僕らには長すぎる」

「ごもっともです。M・ビジネス」

「コムログでいいじゃないかしら？だつてそう書いてあるのよ」

書いてある。という表現はなんとなく残酷な気がした。このアンドロイドは自らを人間だと思っているかもしれない。あるいはそう思いたいのかもしれないじゃないか。

「かまいませんよ、M・Hレレンス」

コムログは全く否定ということをしなかつた。彼は僕達に的確なアドバイスをするが、否定や拒否といったこと、自分が嫌だとすることをしないのだ。

「その方が可愛いわよ」

このまま話が逸れるのが嫌だったので、僕は单刀直入に聞くことにした。

「君以外の人間はどこにいたんだ？」

「申し訳ありません、M・ビジネス。私が機能停止した時点では全員この地下施設にいたはずなのです。私が記憶しているのは私が起動状態で記憶したデータと、事前に書きこまれていたデータだけな

のです

「事前に書きこまれていたデータ?」

「製造段階でプログラムされた記録です。つまりです、M・ビジネ
ズ。人類が認知する情報はすべて私が記憶していると言つても過言
ではありません。停止状態以降のことは記憶にも記録にも記憶にも記録にもありませ
んのでどうしようもないのですが」

「すごいじゃないか」

僕は心の底から、本当にすごいと思った。いうなれば彼は歩く百
科事典と言つても間違いではない。

「ありがとうございます。しかしあなたがたにとつて有益な情報を
私は記憶しても記録してもいいようです」

「それでだ、コムログよ。雷吼樹といつのがある場所まではどれく
らいの距離がある?」

やれやれ、大佐の頭にあるのは、現在の任務だけなのだ。そして
それを遂行するにあたり、この男は右に並ぶものなど想像もできな
いプロだ。

「ここにの真上です、C・カッサーード」

何もかもが急すぎた。

僕からすれば聞きたいことはまだまだあった。だがこの部隊の人間はあまりにも任務とか仕事とかいうものに執着しすぎている。あるいはそれをプロというのだろうか。しかしそういうものはある意味で現実離れしている。さすがは選りすぐりの、最高のチームだ。

「そうか、それは運がいい」

「いや、良くない。

「待つてくれ。まさかこのまま見に行くなんてことはないだろ？」

「見に行きたいのか？ビジネスよ。それほど距離がないのならば、俺一人で様子を見に行こうと思っていたのだが、自信があるのならば来ても構わん」

僕の予想の斜め上を行く答えた。

「そうじやない。全員で穏やかに戻ったほうが良いと思うんだよ。燃える植物なんて馬鹿げたものがあるんだ、どんな危険な生物がいるかだつてわからない」

「だから俺一人で行くのだ。ビジネスよ。帰ればロマンコフが通信機を完成させているだろう。簡易なものだが、森から抜ければシリターに通信することも可能なはずだ。少なくともロマンコフはそういう設計をする。幸いにも多くの機材がここにはある」

僕は全くもつて全員で確認しに行くのではないかと考えていた。あるいはこの男ならば単独でこの森で生き延びることができるのだろうか。どちらにせよ、馬鹿げた発想だ。本当に何があるのかわからないのだ。何が起こるのか、何が住み着いているのかわからない。突然死をもたらす毒ガスがどこからか湧いてきたって、僕は多少驚く程度だろう。

「しかし

僕がその先の言葉を探ろうとしたとき、大佐の口角が弧を描いた。

ニヤリ、という音が聞こえてきた。そしてその表情は恐ろしく不気味だった。

「心配するな。サバイバルするわけじゃない。少し様子を見るだけだ」

この男は楽しんでいるのだ。

問題

「問題があります。M・カッサーード」

「どんな問題だ？」

「率直に申し上げますと、雷吼樹がまだあるのかどうか、私にも確定なところは判断できないのです」

「コムログは申し訳なさそうに言つた。その表情は人間が申し訳なさそうにするときのそれと全く同じと言つてよかつた。

「雷吼樹の存在が確認できるのは私が機能停止した時点の話です。そして先ほど私が聞かせていただいた話によれば、外の世界は私の知つている世界と大きく異なつているのです。たとえば、たしかにクロノキは広大な森でしたが、あなた方に訊かせて頂いたような摩訶不思議な動植物は存在しませんでした。じく普通の森だったのです。

それに世界はまだ暑苦しく、現在のような極寒の世界ではありませんでした。広大な海も存在していましたし、太陽は当然のように東から昇り西に沈んでいきました」

「僕はこの時はじめて、太陽が東から昇り西に沈むものだと知つた。」

「造作無い。問題などない」

「はやくもやれやれ、という仕草をしたのはレイヴン・ジャックだ。彼がこの部隊に召集されたのは、もちろん医師としてなのだろう。莫大な金が動いたはずだ。」

「そして僕も思った。問題だらけじゃないか。」

「どうせ確認するのだ。あればあるで万々歳だ。なかつたとしても一度シェルターに撤退せねばならん。どちらにしても同じことだ」僕は大佐を説得することが半ば無理なのだと悟った。この男ならそのくらいのことは造作なくやり遂げられるのではないかと思ったのだ。自由にさせてやろう。ただし、この男が途中で死んでしまうようなことになればそれは大問題だ。帰りの道中でまたもし訳の分からぬ未知の生物が襲ってきたとき、この男がいないというのはかなりの損失だからだ。

「君はどうするんだ？」

僕はコムログに向かつて訊ねた。

「ここにいる必要はあるのかい？」

「いえ、正直に言いまして、私もどうしたものかと思つています、M・ビジネズ」

「なら一緒に行かないか？君の知識というのかデータというのか、とにかくそれは僕らにとつて必要だし、興味深いことだ。それに君だっていつまでもこんな地の果てで暮らすわけにはいかないだろう？」

「たしかにな、うまそうなメシもない」

これはレイヴン・ジャックだ。そういうえば、ここには食料と水があると聞いている。まだ誰も口にしてはいないのか、と僕は思った。ガンドが飲み食いできる。といったのは予想の話だったのだろう。それもそうだ、いくら見た目が食べられそうだからと黙つて、こんな辺鄙なところにあるものなど誰も口にしたくはない。

「構いませんよな？ カッサード大佐？」

懇願の意味を含ませてミユキが言った。

「造作無い」

なんの躊躇もなく大佐は答えた。

「そういうことでしたら、皆さん、私が力になれるかどうかはわかりませんが、きっと何か期待に応えて見せます。お供させていただきますよ」

「ありがとうございます」

僕は心の底からそう思った。僕はなんとなくこの丁寧なアンドロイドが好きになつたのだ。

レーシヨン

「それから、ドクター・レイヴン。さきほど食料のこと話をされましたね？」

「それがどうした？レトルトカレーでもあれば嬉しいね」

頭の後ろで手を組んだ医師は退屈そうに答えた。

「軍用レーシヨンなら保存されているはずです。あれは持ち出されではないでしょ。山ほどありますよ」

「軍用レーシヨンか」

僕はため息を吐きながら言つた。あれはあんまり美味くないのだ。栄養価も高いし、現在の技術なら破損や劣化でもない限りは半永久的な保存性を誇る。だけど本当に美味くないのだ。

「この保存スペースを管理しているのは私ですから、誰かがこじ開けたりしていい限りはあるはずです」

「「」」

「この、といふのはビデオいう意味なのだろうか。

「そうです。この、保管スペースです。M・ビジネズ」

コムログは微笑みをこちらに向けながら壁に手を当てた。無機質で真つ平らな壁のそこにあつたのはパネルだった。コムログがそこにあてた途端、半透明のタッチパネルが浮き上がり、原始的な数字の並んだパスワードの入力画面が現れた。

タッチパネルが浮かび上がったとき、カッサード大佐はいつのまにかガンホルダーから半分ほど身を乗り出した45のトリガーに指をかけていた。極めて余裕のある、冷静な表情だった。

コムログは8桁のパスワードを入力した。入力し終わつたと思うと、タッチパネルは音も立てずに同化して消えた。

「ここです」

コムログはそう言つてその壁から一歩後ずさり、その分だけ距離をとつた。

壁の表面は数センチ浮き上がり、蓋をずらすようにスライドした。隙間から僅かな冷気が溢れ出したのを見て、それが未だに機能していることを僕は確認した。実際にそれが冷氣なのかどうかはわからぬが、この施設は生きている。

壁がスライドを終えると、そこから現れたのは原始的な棚だった。どこからどう見てもなんの変哲もないただの棚で、実際それはただの棚だった。棚には複数の、人間が一人身を丸めれば、なんとか入れそうな具合の箱が8箱詰まっていた。

「ここにあるのはすべてレーシヨンです。いろいろなレーシヨンがありますよ。当時の、ですが、世界各国のレーシヨンが取り揃えられています。特に美味なのはフランス、イタリアーノ、あとはニッポン」

僕はどの国の名前も知らなかつた。この男と歴史の話をするのはとても面白いことだらう。何しろこの男は過去の出来事についての知識に欠けて抜群の能力を持つている。過去の出来事、それは歴史と呼ばれる、今ではその大義を大きく失つてしまつた知識の集合体。今の人々の多くは、過去を振り返る余裕などない。

そこで僕はふと気付いた。この男は歴史を知つている。

「一番まずいのは?」

レイヴン・ジャックが訊いた。本当にこの男は世紀の悪徳医師なのだろうか?確かにとびきりの変わり者ではありますだが、そいつた類の残虐性は全く感じられない。

「合衆国のはひどいですよ?」

「合衆国?」

「アメリカ。と言つたほうが伝わりやすいのかもしません、ドクター・レイヴン」

「それは耳にしたことがあるな」

僕もだ。おそらく過去において最も強く、名のある国だったのではないだろうかと僕は思った。何しろ、歴史の意味が退化したこの時代の普遍的な男ですから、少しは知っている国なのだ。名前だけとはいえ聞いたことぐらいはある。

「地上最後の超大国と言われ、あらゆる分野において最高の人材を、機関を有していた大国です。ある時期で言えば、世界のルールを定めているのはアメリカであり、アメリカこそがルールでした。

もう少し、素晴らしい点を挙げるとするならば、それは史上名立たる大国家と合衆国の異なった点です。歴史的に見て、抑止と自由、両方の概念をほとんど両立させてしまった唯一の国家が合衆国だったのです。

それこそが、合衆国が超自然的な理由により衰退するまで発展し続けた理由なのです」

僕には一つの気になる点があった。

「抑止と自由を両立させたとはどういう意味かな?」

コムログは嬉しそうに答える。おそらく彼は質問されるのが好きなのだろう。すべての答えを知っているのならば、そういう気持ちはわからぬもない。

「決定的な支配をしなかつたのです。合衆国はどんなときでも世界のリーダーであり、実際にそのように振舞つてきました。しかし、かつての滅びた大国と同じ轍は踏みませんでした。自分たちで支配しないのです。合衆国は重大な決定に立会い、議論に加わり、議論の上で決議されたことを強く保持したのです。つまり、議論は他国にさせたのです。かつて世界を支配した国々は全てを自らで管理しようとしたのです。それが傲慢だったのです。

繁栄しすぎた国は滅びる。それは決定的な哲学でした。繁栄すればするほど、国は大きくなり、管理が難しくなり、やがては不可能になる、すると小さなところにぼんじろびができるのです。そのぼんじろびは一度解け始めると止まることをしらずにその範囲を大きくし、やがては国を滅ぼすのです。かつてのローマ帝国の衰亡の理由は全くもつてここにあったのです。

合衆国はこの永遠のジレンマと思われた哲学を、システムティックな技で覆してしまったのです

繁栄しすぎた国は滅びる。その言葉は僕の頭の中をうろつきまわり、離れようとしなかった。（これは哲学ですよ。M・ビジネス）コムログはそんなふうに言つただろうか？人類は繁栄しすぎたかもしれない。ふいにそんな考えが頭によぎつた。

「もう一ついいかな」

「もちろんです。M・ビジネス」

「超自然的な力とは何だい？どうして合衆国は衰退したんだ？」

「超自然的な力とはですね、M・ビジネス。気温です。」

確かに、実際に今、残り僅かな人類は寒さに喘いでいる。

「現在とは逆で、世界はほとんど灼熱の地獄でした。とにかく暑かつた。そこで、単純なことですよ。人々は快適な場所を求めてロシアへと移住したのです。それはもう大規模な移動でした。西洋史の

変換期と言つて差支えのないゲルマン民族の大移動の規模をはるかに凌駕するものです。太陽という名のヴァイキングに襲われ始めた人類はロシアというかつての不毛地帯に住処を求めたのです」

彼の話にはわからない単語が多すぎた。西洋？ヴァイキングといふのはいつたい何なのだろうかと僕は思つたが、彼の話を止めるのは悪いと思つたし、僕自身その先に興味があつたので質問はやめた。「そんな単純な理由でアメリカからは多くの人が消えたのです。實際にはアメリカの北部、ベーリング海に近いアラスカ周辺に移動した人々も存在しましたが、人間というのは一旦群れを成すと止まらないのです。結局、世界の人口はロシアの広大な国士に密集したのです。そして人々が集まり始めたとき、かつてまでは凍りついて使ひ物にならなかつたロシア北部の港が発達し、僅かに残つた他国の人々との連携を可能にしたのです」

僕は話の続きを期待したが、はつとしたような顔をしたコムログは顎に手をやつて何かを考え出した。何かを考え出した。ということが僕にはわかつた。

「今ふと思つたのですが、貴方達はおそらくアメリカ人の血をひいているのではないでしょうか？」

「あるいはそうかもしれないけれど、確かめる術がないわ。でもどうして？」

「はつきりとした根拠は口にできませんが、まず、あなた方が今生き残っているというのが一つの根拠ではあります。かつてのロシアを含む大陸で子孫まで残して生き残っているというのは考えにくいのです。皆それぞれ遺伝子的な問題も抱えていましたから。もちろん被爆によつてです。

それから、生き残つた地域でシェルターを作るほどの科学力がつたのは、からうじてアメリカだけです」

「なんだか、歴史的な話に聞こえちゃうわね。今まで先祖のことなんて考えたこともなかつたわ。ちょっと素敵よ、そういうの」

「やはりアメリカは怖い国です。そして強い国です。そしてM・エレレンス。もつと遡つて言えば、あなたの先祖はおそらくジャパン出身ですよ」

「ジャパン？」

「そういう国があつたのですよ。美しい国です。技術、文化、芸術。どれをとっても超一流の国家でした。世界でも最も興味深いとされる国でした」

本当にいろいろなことを知つてゐるなど、僕は素直に感心した。そして彼はそれをどういう風に話せば良いのかも心得ている。

「それぐらいにしてそろそろ行くぞ。ここに長居する理由はない」カッサード大佐は現実的なことを言いながら廊下への扉を開いた。ミユキの表情はあからさまにその先を知りたがつていた。

僕たちは元来た道を戻り始めた。

「それにして、よく言葉が通じたもんだ」

「シエルターで使われる言葉はもちろん1つだつたから、僕はそんなことに気付かなかつた。しかし確かにレイヴン・ジャックの言うとおりだ。果てしない年月を経てなお、コムログと僕らの間では同じ言葉がかわされている。シエルター内でだつて、失われた言葉や新しい言葉、はやり言葉がしおりうでてくるのだ。

「実をいいますと、先程から私の知らない単語は登場していますよ。あるいはどうしてそんな言葉を？と思えるような外来語も、貴方達は使っています。なかなか興味深いものです。ほとんどが推測でその意味は判断できますし、外来語については、私はほとんどの言語をプログラムされています、多少の意味の変化は見られるものの理解できるものです」

「外来語？」

「別の国の言語を自らの言語に取り入れることです、簡単に説明しますと。昔は多くの言語が存在していたのですよ。最盛期には約400の言語が確認されました」

たまらない数だ。世界の人口が仮に400人なら僕たちは誰ともコミュニケーションを取れないのではないだろうか、そんなふうに僕が考えていたとき、目の前に迫つた大昔のコンピュータ部屋の中から騒音が鳴り響いた。それはある種の銃声だった。

カツサード大佐は扉を盾にするように身構え、その大型アサルトライフルとともに部屋の中に飛び込んだ。レイヴン・ジャックとコムログを残し、僕とミコキもそれに続く。

部屋の中には火薬の匂いが立ち込めていた。見ると扉のすぐ横側には馬鹿でかい銃痕があり、壁が大きく崩れている。中に見えるのは強化ゴムのような素材でできたいくつもの配線だ。

「またなんか！－ジョージ！－」

大きな叫び声はガンドのものだ。ガンドはチラリとこちらを見た、しかし僕らのことなど気にもかけずに、暗黒の廊下へ続く扉に駆け出した。僕とガンドが入ってきたあの扉だ。

だしぬけに、小さな隙間に空気が吸い込まれるような音がした。

「伏せるんだ！！！」

ガンドがさつきよりも大きい声で叫んだ。彼の声が僕の耳に入つたちょうどその時、カツサード大佐がこちらに向き直り、猛烈な勢いで僕とミコキを抱え込んで倒れ込んだ。相当な勢いで地面にぶつかつた衝撃を感じたとき、僕らの上にいる大佐の背中の1mほど上で猛烈な爆発が起こつた。その爆発は無反動ランチャーのそれであることが僕にはすぐに分かつた。

扉の外からアンドロイドとコムログが飛び込んできた。医者はカツサード大佐に駆け寄り、怪我を確かめるような目で言った。

「大丈夫か？」

「造作無い」

表情というものを殺し、そう言って大佐は立ち上がつた。僕とミコキを抱き起こそうとするコムログよりも遥かに機械的な姿だつた。

ジョージ？

あまりにも突然の出来事だつたから、僕の頭は状況というものをうまく把握していなかつたのだけれど、乾いた砂に落ちた水のように、状況というものがゆっくりと僕の頭に浸透してきた。

ガンドの声を頭の中で再生させ、それを頼りに疑問を探りだす。（またんか！！ジョージ！！）

ジョージ？僕達に一人の男の死を丁寧に、哀悼の意を含めた口調で話した、落ち着いた、好かれるべき青年が、こちらに向かつて砲撃をかましたのか？

「何があつた？」

相変わらずの落ち着いた、渋い声が響いた。

カツサード大佐はアサルトライフルを構え直している。

「わかりません。突然、ジョージのやつがそつちの壁に銃をぶつ放して、扉のほうに歩き出したんです」

極めて早口でガンドは答えた。その間も二人は歩き、ジョージを追いかける姿勢を崩さない。ジョージはすでに扉の向こう側だ。「ミユキ、ここは任せる。待っている。ビジネス、お前は我々についてこい、銃の安全装置は外しておけ」

「わかつた。博士、怪我はありませんか？」

「大丈夫だ」

カツサードとは別の種類の落ち着きが彼女にはあつた。椅子に座つたまま足を組み、やれやれ、わけがわからない。といった姿勢をとつてている。

彼女の目の前の机にはいくつかの無線機らしいものがあつてあつた。

僕は何も言わずに大佐のあとに、駆け足で続いた。

扉まで来ると、僕たちは扉の脇に肩をつけ、一気に中へ飛び込んだ。

だ。

それはやはり僕とガンドが（おそらく大佐たちも）歩いてきた廊下だが、ある意味でそれは同じ廊下ではなかつた。行きは気付かなかつたどこかにある照明が点いている。ただしそのいくつかの照明はあまりに遠くに設置されていて、僕達が周りに何かがあると判断できるほどの光を産み出してはいなかつた。僕らが判断できるのは、ただの光源と、この廊下が恐ろしく幅広く、高さがあるということだけだつた。

ガンドが大型のサーチライトを点けると、不気味なシルエットを伴つたジョージ・バンディクーの後ろ姿が見えた。

だが、僕にはその後姿がジョージのものだとは思えなかつた。たしかに人の形をしてはいたが、それは微妙なところで、人間とは違う何かのようを感じられた。

レールガン

僕達三人はそれぞれの武器を味方であるはずの男に、その銃口を向けた。ガンンドは重そうな、巨大な銃を構えている。相当な威力のあるM9でまず間違いないであろうその銃の先のやはり巨大なサチライトがジョージを照らす。カッサード大佐も相変わらず大きなアサルトライフルを片手で構えている、スーツの力を取り入れたとして、マズルジャンプを片手で抑えこむのにはかなりの力が必要なはずだ。

「ジョージ！！」

ガンンドが重低音の声で叫んだ。目の前にいる男の歩みがとまった。なんとも形容しがたい沈黙が立ち込めた。緊張の面持ちで銃を構える僕とガンンドとは対照的に、カッサード大佐は余裕の表情で、堂々相手の動きを待っている。

目の前の後姿は立つたまま死んでいるのではないかと僕が思い始めたとき、そのシルエットは素早くこちらを向いた。当たり前のようにその右手には小型のレールガンが構えられている。

そしてこれも当たり前のようにジョージはレールガンをこちらに向けた。

その瞬間、僕の左側で激しい銃声と撃鉄の弾かれた音が聞こえた。躊躇なく、仲間であるはずの男に引き金を引いたのは、もちろんとすべきかカツサード大佐だ。

しかしジョージとて相当の手練だ。銃声が轟いたその瞬間、右足に力を込め、スーツの助力を活かして思い切り左に飛ぶ、一瞬、空中で横倒しになり、華麗な弧を描きつつ2mほどの距離を飛ぶ。その間にジョージは引き金を引いていた、レールガンは破壊力こそ抜群だが、トリガーを引いてから実際に弾丸を射出するまでには微妙なタイムラグがある。

ジョージが両足を地面につけたと同時にレールガンの先から小規

模な青白い稻妻を纏つた帶電弾道弾が射出される。僕とガンドは別々の方向へ飛び、なんとかその弾道をやり過ごす。銃弾は僕達の間を貫き、その先の壁に激突した。

レールガンは射程距離に応じてその威力を大きく変える、最大出力で最も効果が発揮されるのは充分に加速がついた中距離だ。壁にぶち当たつた帶電弾道弾はその勢いをほとんど空氣中に放出していた。小規模な衝撃が壁に生じた。

大佐はすでに行動を開始している、僕達を狙つたレールガンの弾道の遙か離れた位置から、猛烈な勢いでジョージに向かう。その姿はある種の、俊敏な肉食獣を思い出させた。

僕が後ろ手にバックパックのサイドポケットからスタンウェイップ気絶鞭を取り出すごく僅かな時間で、すでにガンドはジョージとの距離をかなり縮めていた。ジョージがレールガンの引き金に指をかけると同時に、ガンドも俊敏に45口径を構える。

「動くな！」

ガンドが叫ぶ。標的はジョージの肩だ。おそらくその辺りのはずだ。あるいは大佐なら眉間であつたかもしれない、そして引き金はすでに引かれている、もつと言えばジョージはすでに生き絶えている。

普通の人間はその銃の照準が自分に合わせられていると知つて、動くなと命じられれば行動を停止する。だが、あらうことか、ジョージはガンドの言葉を完全に無視し、引き金を引いた。それはガンドにとって、僕にとって全く予想外の出来事だった。

レールガンの先端に刹那、青白い光が纏つた。この距離でその銃撃を受けたなら、大男の体に大きな穴が空く。残るのは胴体に不自然な穴の空いた焼け焦げた死体だけだ。

ジュー

突然、ジョージの体が、まさに重力を失つたがごとく後ろに倒れた。ふわりと両足が浮き、足があつたはずの場所に頭が移動する。レールガンはジョージの斜め上後方へと射出され、激しい音を立て何かを破壊したあと、おそらくは天井にぶつかって煙を上げた。倒れたジョージの後ろ側にはカッサーード大佐がいた。おそらく、ジューが何かの技を使ってジョージを思い切り地面に叩きつけたのだろう。大佐はジョージが手にしているレールガンを蹴り飛ばした。しかしジョージが気絶しているのは明らかだった。

僕がそれを確認するとほぼ同時に、今度はまた別のところから大きな音が鳴り響いた。それはまるで金属の板が地面に叩きつけられるような音だつたが、何しろ大きな音だつた。

それが金属の板なのだとしたら、とてつもなく大きな金属の板だ。

「何の音だ？」

「わからん。天井が崩れたのかもしけんな。念の為にスタンウェイップを使っておけ」

大佐は容赦なく言った。味方にこれを使うのは気が滅入つたが、さつきのジョージの様子を思い出し、僕はしぶしぶ、最低出力のスタンウェイップを仰向けに倒れているジョージに浴びせた。30分は目が覚めないだろう。

「何があつたんだ？」

「わからん。コムログに訊いてみるのが良さそうだ」

「コムログ？あの妙に青白い男のことですかい？」

「そうだ」

「何が何だかわかりませんな」

「まったくわからない」

僕の脳には気の利いた言葉が蓄えられていないようだった。僕にだって何が何だかわからない。

「ビジネスよ。説明は歩きながらしてやれ」

「俺が運びましょ」

Gandがそう言ってジョージを抱き上げようとしたとき、僕の目に妙なものが映った。

「ちょっと待ってくれ。これはなんだ？」

見ると、ジョージの首の後ろのあたりに妙なものがくつついている。それは緑色をしたキノコのようなもので、ぴつたりと、タートルネックになつたスーツの部分に張り付いている。

「なんだこれは？」

「うん？」

Gandと大佐も、僕と同じようにそれを覗き込んだ。3人の視線は俯せになつたジョージのうなじに注がれている。

やはりそれは僕の見間違えではなく、しっかりとそこに存在していた。何度見てもやはりそれはキノコのように見えた。いや、これは完全にキノコだ。だが僕はこんなキノコを見たことはなかつた。手のひらにちょうど良く乗つてしまいそうな大きさの緑のキノコは、生物的な息遣いを僕達に知らせながら、しっかりとジョージの首に付着している。

「もぎ取つていいと思うか？」

「わからん。わからんがこいつ、良く解らんことが人間の体に起つたときは医者に見せるのが一番だろつよ。これはな、じいさんの言葉だが」

カツサード大佐は何も言わず、難しい顔をしていたが、少し沈黙したあと、すつと口を開いた。

僕はこの沈黙を、おそらく大佐が今すぐにこれを除去しなければジョージが死んでしまうのか、あるいは専門的な処置を施さなければ死んでしまうのか、その選択にかけた時間だったと考えた。

「異常行動はこのキノコが原因なのかもしれん、それならばとにかく死にはせんだろう。純粹な毒キノコの類ならもう死んでいる」
実際には、僕はその選択が正しいのかどうか、わかりかねていた。しかしこの男の考えるところは、口に出した全てではないはずだ。僕はその秘められた大佐の思考を信じて、口を出さないことにした。

そして大佐はこう言いたした。

「そもそも猛毒のキノコ程度なら問題はないのだ」
僕にはそれがどういう意味なのかわからなかつた。
「戻るぞ。レイヴンに見せよう。あるいはコムログに」
「なるほど」

僕は納得を声に出した。出してしまつたといった方が正しい。なるほど。その程度なら、あの闇医者が治してしまつといふことか。

「何がなるほどなんだ？」

ジョージを背負つたガンドが不思議そうに訊いてきた。
「何でもないさ、行け。コムログのことは歩きながら話すよ」
僕達はもう一度、古代コンピュータの部屋を目指した。

「しかしまあ、信じられん話だ」「そりだらう。僕は何とはなしに、漫氣に、心のなかでそりいつた。「私も同意見だ。そもそも、どういう動力で今まで起動してきただ」

少し離れた場所から、博士は腕を組んでコムログを見た。その声はもちろんコムログに聞こえている。

「しかし、興味深くはある」

博士の直接的な物言いにコムログは嫌そうな顔も何もしなかつた。むしろ、（そうでしょ、スゴイでしょ）といった感じすら伝わってきそうな表情で、嬉しそうと言つても間違いではないのかもしれない表情を作っている。

「どうなんだ？レイヴン」

カツサード大佐は医師に訪ねた。一人の間には、並べられた机の上に横たわるジョージがいる。

「お手上げだな。こんなものは見たことも聞いたこともない」

医者はいとも簡単にさじを投げた。さつきからそうだが、この男からは人を救おうとする医者の心が感じられない。とんでもない医者がいるもんだ。

「おいおい、あんたは医者だらう？少し考えてみてもいいじゃないか」

僕は我慢できなくなつて言つた。そもそも、こういう事態が起きたときのために、この男は呼ばれたんじやないか。

「馬鹿をいうな。私はね、病氣や怪我の人間の治療はする。だがなんだこれは？お前さんにはこれが病氣やら怪我やらだとわかるのかい？」

医者の言つことは分からぬでもなかつた。

「だけどあんたは医者だ。それもどびきり性質の悪い、天才外科医

だ。どんな病気でも治せるんじゃないのか？」

「あんまり調子に乗らないほうがいいぜ坊や。私あね、自分でそんなことを言つた覚えはない。無理を言つた。病気にしきり怪我にしきり、なんにしきり、無理なものは無理なさ」

僕はそれ以上何も言わなかつた。悔しいが、何も言えなかつたと言つてもいい。

「おそらく寄生植物の一種だらうが。こんなものに手を出したくはないね」

「その通りです、ドクター・レイヴン。それは寄生キノコの一種です

「なんだって？」

レイヴン・ジャックはコムログの方へ振り返つた。

「それは知能を持つたキノコなのです。少々巨大化していますがビワガサで間違いないでしょ」

「待つてくれ

僕は話を理解できず、咄嗟に話しの流れを止めた。

「待つてくれ、それはどういう意味なんだ？ジョージにキノコが寄生した？」

「その通りです。M・ビジネス。しかもビワガサは高度な知能を有しています」

それが「冗談でないのなら、ジョージが寄生されたのはミコキともに外に出た時だろ？ミコキには異常が見受けられなかつたのが幸いだ。

「治す方法は？」
大佐が不安を見せずと言つた。

「ありません」

わずかに落胆したような表情を見せてコムログは答えた。
「ほらな。治療法がないものを、私にどうしろというんだ」
これが今まで数多の患者を回復させ、数々の新しい治療法を確立してきた男の言葉なのだろうか？

「くそ！どうにかならんのか！」

ガンドが思い切り壁を叩いた。スーツの助力も加わった怪力は、鋼鉄製である壁を碎いた。

目を閉じたまま、ジョージは未だ机の上に横たわつている。

「先生、本当にどうにもならないんですか？」

最もか弱く心配そうな声を出したのはミコキだ。医者はお手上げのジエスチャーをして、呆れた顔を見せた。

そしてため息を吐いた医者はコムログに訊ねた。

「このきのこを取るとどうなる？」

「死にます。このきのこは動物の首の後ろに寄生し、頸神経に向けて根をはるのです。それも恐ろしいスピードで。もし無理にこのきのこを取り除くと、頸神経に重大なダメージを与えてしまいます。人間を別にすれば、生物界における最も知能指数の高い種です。こ

のビワガサはそこまで賢い種ではありませんが。

実を言つと、かつて私が生まれた時代のビワガサは人間には寄生しませんでした。主な宿主となるのは昆虫で、稀に小動物にも寄生していましたが、まさか・・・しかしこれは間違いなくビワガサです

す」

医者は腕を組んで下を向いた。

僕はやけになつて医者に悪態を吐いた。

「機械みたいに、頭でも取り替えたらいいじゃないか、あんたなら出来るだろう」

「素人の坊ちゃんには黙つっていてもらいたいね。頸神経叢は連結部位を含めると前腕部まで伸びている。

お前さんの頭と両腕、それから首の周りの筋肉や神経、胸鎖乳突筋まで、私によこすのならやつてやろつ。成功するとは限らんがね

「やぶ医者め」

「金なら払うぞ、レイヴン
「博士、ひとつやあ金の問題じゃない。 できないものはできないんだ」

「しかし金は払うぞ、いくらでも。 政府にも、Jの要望は通る
「成功する見込みはない」

博士は脚を組み替え、右手の甲を顎に押し付けた。

「私にはあると思えるのだが、レイヴン。 私はね、君ならなんだつてやり遂げられると考えている。 人体の治療に関するね」「私には何もできんぞ。 私は患者の手伝いをするだけだ」

出し抜けに、ミコキが医者の腕に取り付いて叫んだ。

「お願いです。 先生。 ジョージを助けてください」

沈黙が少しく舞い降りたあと、タバコを取り出した博士が言った。
「私はね、私が正しいと思つていて。 とにかく見てやつてみてくれ。 私としても、少ない隊員がまた減るといつのは非常に好ましくない」「医者はその言語を軽く鼻で笑い、腕を掴むミコキをひつぺがした。
「五千万だ。 治る見込みのない手術に、五千万いただこう」

あまりの大きさに、僕は一瞬それが何を示す数字なのかわからなかつた。 もちろんすぐあとで、それが手術料だということはわかつたのだが。

この男は手術を引き受けるだけで（あるいはそれをだけと表現するには好ましくないのかもしれないが）、僕にとつては天文学的な金を手にすることができるのだ。 信じられない。 博士は、政府は、こんな男の言いなりになつてしまつのか。 バカげている。

「いいだろう。 感謝する。」「バカげている。

「失敗しても私は一切責任を負いませんぜ」

「一言はないよ」

「いいだろう」

医師は椅子に座り、懐から葉巻を取り出してカッターでその先端を削り始めた。

「ミユキ。私の荷物を取ってきてほしい」

「わかりました」

ミユキはいさかだけ安心したよう表情をしてから、部屋の隅に向かった。

「ドクター・レイヴン。しかしどうせここで手術を行うのですか？」

生憎、申し訳ありませんが、ここには医療設備がないのです

「心配しなくていいわ。準備はしてある」

ミユキが部屋の隅にあつた少し大きめのバックパックをまさぐっている。

「まさかその準備というのはあのバックパックに入っているのか？」

僕は訊ねた。あんな小さなところに？・コムログもやや驚いたような表情を作った。

「そうだ。とにかく、ここは私が引き受ける。お前たちにはやるべきことがあるだろう」

僕にはそれが何を指すのかわからなかつた。

「どういふことだ？」

僕の質問に答えたのは医者ではなくカッサード大佐だった。

「地上にでる。おれと、お前と、ガンドでな」

「どうして？」

正直に言つと、あまり外に出たくはなかつた。何と言つても、どんな魑魅魍魎が潜んでいるのかもわからない、得体の知れない危険

正直に言つと、あまり外に出たくはなかつた。何と言つても、ど

んな魑魅魍魎が潜んでいるのかもわからない、得体の知れない危険

地帯に旅出すのは」「めん被りたい。

それにこの大佐の冒険心は、僕が納得するだけの論理を示してはくれないだろうからだ。

「ウェインかブリックの死体を探す」

死体探し？ そんなことをして何になるといつのことだ？ 宗教的な儀式を始めるでもないはずだ。

「スーシを新調するのは少し非現実的だからな」

僕たちは死体から衣服を剥ぎ取る作業に出かけなければならない

ようだ。

それは全くもって憂鬱な仕事になりそうな気配を強く匂わせていたが、僕はそれに従う他なかつた。

何はともあれ、医者はジョージを引き受けた。傲慢と諦めの早い態度に僕は怒りを感じていたが、女博士と金の力が、質の悪い天才医師の心を動かした。

治る見込みのない手術に五千万。女博士は医者を高く買っているようだ。だけど僕は思った。五千万。それでジョージが回復するならば、それは大した金額ではない。倫理的にもそうだが、何しろ半減してしまった人数がこれ以上減ってしまうというのは、あまりにいただけない。

僕、ガンドそしてカツ サード大佐はミコキの案内を受け、ウェイントブリックという名の隊員が死んだ入り口につながる梯子を登つていた。

医者の手術を見守る博士やミコキ、コムログのことが僕は心配になつた。なぜなら、何かのミスが起き、ビワガサの洗脳を受けたままのジョージが起き上がるようなことがあれば、彼らがそれに対応できるのかということが気がかりだつたからだ。

しかし今、僕にはそれ以上に心配すべきことがある。僕自身の命だ。あの医師が術中に何かミスを犯すとは思えないが、今まさに大佐が手をかけた扉の先にいるであろう巨大な昆虫に僕が立ち向かい、あるいは追い返すことができるという保証はない。

何しろ、それがどんなものなのかもよくわからないのだから。僕の頭に僅かだけしぶきのような物が降りかかつた。

「いくぞ」

少しく扉を開け、視界の限り安全を確認した大佐が言った。

覚悟はできたか、僕。ジョン・ビジネズ。

ガンドが巨体を小さな扉から這い出させたその後を僕は追つた。僕の顔には、既に液体がまとわりつき、首筋まで流れしていく。僕が扉から這い出すると、ガンドがその扉を閉めた。あるいは閉じ

たと表現するのが妥当だろう。カッサード大佐は取り付けたゴーグルの前で、例のアサルトライフルを構えている。

僕は立ち上がり、バツクバツクからゴーグルを取り出した。

大粒の水滴が、厳しく、叩きつけるように僕の身体を責め立てた。お前は間違つた場所に立つていいんだ。降り注ぐ、圧倒的な激しさを伴つた豪雨は、僕にそう言つているようだつた。

「すごい雨だな」

Gandが言つた。しかしそれは正しい表現ではなかつた。天空から降り注ぐ、これは滝だ。

僕達を濡らすしぶきは上空から所々に降り注ぐ小さな滝が作り出したものだ。

雨と呼ぶにはあまりにも全体的でない。穴の開いたビニールを天井にするならば、こんな不思議な雨も降らないではない。しかしそんなものが上空に張り巡らされているわけがないのだ。おそらく、太陽の輝く日ならば木漏れ日が降り注ぐその部分に、集中した豪雨が降り注いでいるのだ。

その水量たるや、まさに小さな滝だ。おかげで地上には濃い霧が立ち込めている。

ところでカツサード大佐の着けたゴーグルは熱感知式の可視化ゴーグルだろう。 Gandもそれと同じものをバツクパツクから取り出す。僕は森の外で使つた暗視ゴーグルを取り出し装着し、熱感知モードに切り替えた。

僅かに陽光の熱を帯びた霧が薄く白い靄を作り出している。ゴーグルの感度を調整するとその靄は晴れた。ゴーグルはほとんど肉眼と違わない景色を僕にもたらしたが、それは実際には幾許か肉眼よりも輝度の差が激しい景色だった。熱を持った箇所、例えば上空を見るに連れその景色は眩く輝き、 Gandや大佐の身体も、上空ほどではないが、肉眼では確認できない輝きを帶びている。

辺りを見回すと、10mほど先に僕らと同じ輝きをもつた何かが、巨大な木の根元に巻きつくように、その片鱗を覗かせていた。

それはどう見ても人間の脚に見えた。

だがその脚の主の姿は、巨木と僕らの間にある多数の木に遮られて見ることができない。

僕の肩を叩いたのはガンドだった。

「行こう、慎重にな。ここからはもうどんな油断も隙もあつてはならない」

アサルトライフルを、その鋭角な頬に食い込ませ、大佐は慎重に進みだした。そして僕とガンドは使い勝手のよいオートマティックを構え、一歩ずつ、深い落ち葉の中に足を沈めていった。そしてそれは新雪のように柔らかく、僕らの足を包み込んだ。

10m程度の距離を、僕たちは相当な時間をかけて縮めていく。何しろここは何かが飛び出してくるかもしれないと思える場所が多すぎる。木の影、枝、上。あるいは類まれなる迷彩効果を発揮して地面や樹木、植物に模倣している生物が襲ってくるかもしれない。もしそのような生物がどこか見える範囲に潜んでいるならば、ゴーグルを通して、輝度で確認することはできる。しかしそれでも僕らは至極慎重に進んだ。木の後ろに潜む凶悪な生物がいつ飛び出し、僕らを捉えるのかわかつたもんじやない。そしてなにより、攻撃的で肉食性の樹木に対して、今のところのゴーグルは役に立たない。なぜならそのような植物はおそらく、僕達にとつてほとんどノーマルな、つまり人間を襲うなどという馬鹿げた行動を起こさない植物と温度の差を持たないからだ。

疑えば、何もかもが怪しく思えてくる。右を向くと、不自然に地面に広がる木がある。ほとんど完全な皿型をしたその木は、その中央に雨水を大量に溜め込んでいる。何に適応するためにこの樹木は進化し、このような形態を完成させたのだろうか？あるいは突然変異的に不慮の奇形となつて発生してしまったのだろうか？仮にそうだとすればここはまさに奇形の森だ。巨大化しそぎ、永遠の成長を続けてしまっている巨木たちのメカニズムは何かしら生物的な宿命を無視してしまっているように思われるし、ガンダが銃口を向けている白く細長く、多量の穴の開いた木はまさに奇形の代表格といつた出で立ちでそびえ立っている。

ちょうど僕がその多量の穴の開いた木を凝視しているときだ、穴の奥に何か光るもののが動きを示した。それはまさしく生命がこの口一グルの中で放つ輝きだ。

穴の開いた木とは逆の方向を向いていたはずの大佐が残像を残しそうな動きで、アサルトライフルの銃口をそれに向けた。あの木の裏で何かが蠢いている。

「まだ撃つな。音をたてるな」

大佐の声に返事をするものはいなかつたが、沈黙こそが返答だつた。聞こえるのは水しづきがたてる僅かな音と滝となつた雨が作る豪快な音だけだ。

ついにその時はやつてきた。木の裏側から光る生物の片鱗が飛び出したのだ。しかしその動物は明らかに僕らに襲いかかろうとはしていなかつた。なぜならそれが飛び立とうとしている方向は僕らのいる位置とは別の方角だ。

おそらくそれが翼を羽ばたかせたのはつい今しがたのことだろつ。なぜなら僕達がその羽音を耳にしたのが今この瞬間だからだ。

それは巨大な羽の生えた翼が生む音であり、鳥類の羽ばたきだつた。気持ちの悪い音を吐き出す薄く小さい虫類の羽が生む音ではない。

それは明らかに何かから逃れようとしている。

大部分が木の影となつて見えないが、穴からは巨大な灰色をした鳥の翼が見える。灰色の羽が激しく飛び散つている。木の裏側では激しい戦闘が行われているに違いない。鳥は不思議なことに一切の鳴き声を上げなかつた。

大佐は未だ戦闘開始の指示を出さなかつた。アサルトライフルのスコープを覗く姿はまさにスナイパーの顔つきだ。

僕ら三人は微動だにせず。あるいは戦闘を終えた直後の傷ついた

勝者を一刺しする漁夫にならうとその時を待つた。

纏わり付く棘のついた蔓を引きちぎり、傷つき血を流しながら飛び立つた翼は僕らを驚かすに全く問題のない姿をしていた。

それは鳥ではなかつた。それは翼だつたのだ。僕はそれが鳥の翼だということを疑わなかつたが、鳥という生物につきものの足や頭、胴体といったものがその生命体には見受けられなかつた。

蝶のように重なつた翼は完全な左右対称を作り出している。そして仮にそれが胴体と呼べるのならば、両翼の合わせた中心部分、そのほとんど中央の場所から一本の長い、毛むくじやらの管のようなものが生えていた。体の中央から出る目的不明の管の長さたるや、その生物の広げた両翼よりも長い。それは僕に不自然な位置から生えた長大なしつぽを連想させた。

両翼はひどく傷つき、ところどころの羽が剥ぎ取られて、生物の地の素肌を確認することができた。

力を失い、ようよると飛び去る翼の姿は敗者のそれではなかつた。命からがらの生還だ。この森の弱者にとって生還とは勝利を意味する。生きていることが勝利なのだ。

僕はなんども声を発しそうになつた。しかし恐怖と興奮が僕の音を喉の奥で締め上げ殺したおかげで「なんだあれは」と馬鹿のような、答えの返つてくる見込みのない質問をせずにするんだ、そして戦闘の一部始終を見納めることができた。

もし僕らの中の誰かが大声を出したなら、それを聞きつけたハンター達が僕らのもとに殺到するかもしれない。

「こいつはもう、森の奥深くなのだ。

「雨音で多少はましだろうが、念のためだ、大きな音をだすことはまかりならん」

そう言いながら大佐はアサルトライフルの簡易な安全装置をオンにし、ずつしりとした重みのあるそれを肩にかけた。大佐はライフルの代わりにバックパックからサイレンサー付きの大型拳銃と大きなサヴァアイヴァル・ナイフを取り出し、両手で器用に構えた。右手で逆手に構えたナイフの柄をグリップにぴたりとつけ、左手でそれを覆うようにトリガーに指をかける。ちょうど銃とナイフを両手でまとめて掴んでいる形だ。窮屈ではないのだろうか？

僕たちはまたゆっくりと歩き出した。

僕は右手でプラズマ銃を構えている。手頃な消音式の武器が見つからなかつたのだ。本来、これは戦闘用の武器ではないのだが、軽く機構内が水に濡れる心配もない、なにより全くの無反動なので片手で扱える、そして軽いのだ。俊敏な動きが求められる今、電光石火の飛び出しを仕掛けてくる厄介な怪物どもを焼き尽くすには、割かし気の利いた銃だ。

あるいはスタン・ウェップもそのような特徴を備えてはいるが、飛び道具ではないし、攻撃するまでには蓄電の微妙なタイムロスがある、それになにより、こんな豪雨の中で、つまりは水場で、強烈な電気をむき出しにする危険な棒は使えない

無数の穴のあいた木を通り過ぎようとしたとき、あの翼を襲つた何者かが一体何だったのか、僕たちは知ることができた。

それは巨大なバラだった。ただしバラは地面上に横たわるようにして、その大きな花弁を広げていた。花弁の下から覗く数多の蔓だ。蔓には鋭いトゲが備わっている。人間がこんなものに刺されたら、重症どころの話ではないだろう。

「たまげたな。近寄らないようにしよう」

それは僕の心からの言葉だった。ガンドはそれに頷いたが、大佐は何も答えなかつた。かと言つてもちらんこの妙な植物に危害を加えられる気はないと思うが。

蔓には多量の血液が付着しており、雨に流れた大半の血は地面をどす黒く染めている。

僕らは眠れる怪物を起こさぬよう、至極静かに目的のものを目指して歩いた。そしてようやく目のあたりにすることことができた足首の主はブロンンドの男の死体だった。

男の死体の左胸は、心臓を通り過ぎ、右の胸筋あたりまでを深くえぐられていた。多量の出血により異常に青ざめた男の両目は半開きになり、その瞳の主の生命活動が停止していることを明白に知らせていた。

「神の祈りの「加護を（ミゲタ・プリユス・パクス）」

ガンドが胸の前で空に十字架を描き、哀悼の言葉を捧げた。あまり宗教的なことに興味を抱かなかつた少年時代を過ごした僕には、それはどこか一種の現実逃避のように思えた。

完全に、すく死んでいる。

カツサード大佐は拳銃を構えた手を決して緩めなかつた。

何も言わずにガンドは死体に手を伸ばし、スーツの首部分をめくり、内側に張り付いたジッパーを摘んだ。僕と大佐はいつどこから、化物が飛び出しても対応ができるよう、それぞれ違った方向にそれぞれの武器を構えた。三人のうちの一人は、完全に無防備な状態だと言える。僕の緊張感は否応なしに高まった。

ガンドがそのジッパーを軽く引っ張ると、あとはほとんど自動的に、スーツはブリックの左の胴体を腰のあたりまで、さばくよろしくして脱げた。スーツの内部からは隆々の筋肉に貼りつく灰色のアンダーアーマーと、それに付着した大量の血液が見えた。

ガンドはブリックの左肩をスーツから露出させ、スーツの首の部分を大きく開いた。そして同様に右肩をスーツから出そうとしているが、横目でちらと見る限り、それは少し困難な作業のように見える。

物理的に難しいわけではない。何故なら、このタイプのスーツは構造上、ジッパーを引いて露出させた部分が十分であれば、自力であろうと他力であろうと、ごく簡単に脱げてしまうのだ。そして今ガンドが開いた露出部分はスーツを脱ぐに当たり十分な広さを得ている。

大男はブリックの体をできるだけ丁寧に扱う必要があった。あまり力を入れると、痛々しく、ほとんどを切り裂かれた上半身がさけてしまふだろう。

僕はそのいわく形容しがたい、生々しいとも痛々しいとも言える、そんな残酷な風景から目を逸らし、視線を手元から真っ直ぐ遠くに向けてみた。

両手で構えたコイルガン。外見は標準的なオートピストルとほとんど差はない。差といえば、取り除かれた、というよりコイルガンには不要な撃鉄がないことと、プラズマ機構のために膨らんだバ

レルぐらいだろ？

僕は視線でリアサイトからフロントサイトを舐め、さうにマズルの向こうを見た。

深い森が続いている。所々が低音の、つまり暗く見える水しぶきで視界が邪魔されている。木々は相変わらず、あまりにも巨大だ。そこにはもう、時間の概念というものがなかつた。この森では、どんな生物も時間というものを忘れてしまつていてる。

時間。もともとそれは断たれることのない永遠の法則だった。だが木々は、植物たちは、成長という名の牙を、衝動だけを頼りに、闇雲に、異様に、広がっていく。

熱、光、湿り気、変わることのないもの、決して変わるはずがなかつたもの。しかし既に、それがどれほど続いているかを知る者は存在しない。

（どれくらい？）（なぜ？どうして？）そんな疑問に気を利かせるのは、森に迷い込んだ数人の人間だけだ。だが僕達もそろそろ、そんな疑問は意思の外へと追いやらねばならない。

そこはもう思考の場ではないのだ。成長が、遺伝子が、野生が、植物が、それに取つて代わつていてる。

「ダメージが大きいな、なんとか接合できればいいが」

振り返ると、ガンドが右わき腹の大きく裂けたスースを手にしていた。アンダー・アーマー姿のブリックは木の前に横たえられ、両手を胸の前で組んでいる。

「とにかくつつけておこう、多少は自動修復するだろ?」

そう言ってガンドはスースの裂けた部分同士を重ねあわせた。もちろん、たちどころに接着できるわけではないが、こうしておけばこれ以上に傷が広がることはないし、修復の際の手間が少しほ省けそうだ。今はまだ、簡易な自動修復機能に頼るしかない。長い時間さえあれば、どんな修理もなくスースは自動的にその修復を完全なものにすることができるが、そこまでの時間は僕らには残されていない。自動修復機能は未だ、そこまで便利で完全なものではない。

「無いよりはいい。あのアンドロイドにも協力してもらひが必要がある」

それにアンドロイドとは言え、意思があり、精神を持っている。

こんな地球の果てのような場所に置き去りにするわけにもいかない。

「そうだな。やつも人間と暮らすほうが快適だらう。誰もいないシエルターなんて、地獄とかわらん。退屈すぎる」

ガンドは僕の意見を肯定しつつ、片方の手でブリックの死体に落ち葉をかけていた。やがて、多量の落ち葉で死体は見えなくなつた。湿つた落ち葉は完全にブリックを覆い隠した。だがそれにはどことなく、氣休めの儀式のよつた雰囲気があつた。

同意

しゃがんでいたガンドが立ち上がりこちらを向いた。そして僕の肩を軽く叩き、歩き始めた。

「戻るぞ」

ガンドの表情は複雑なものだった。それは悲しみに満ちてはいたが、強い意志のようなものが潜んでいた。

「待て」

大佐の声は、声色は、僕の緊張感を引き立てるに十分な響きを帶びていた。見ると、大佐は右ひざを地面に付け、何かに狙いを定めている。僕とガンドは大佐の銃が狙いを定めている方向からの攻撃を防ぐように、木の影に半身を隠した。

「なんだ？どうしたんだ？」

僕はできるだけ空気を振動させないような声で大佐に訊ねた。

「よく見てみろ」

大佐は銃の先を軽く振つてその先にあるものを僕に示した。

「まいつたな」

僕はガンドの言葉に同意せざるを得なかつた。

「化け物どもめ」

僕はもう一度同意した。

僕の額を流れ落ちる水滴の中には、じつとりとした汗が混じつている。

「あいつらは少々厄介だ。撤退する」

「そうしましょう」

大佐とガンドの口ぶりは既にあの異様な生物たちを知っているようだ。

「なんなんだあれは？」

だから僕は訊いてみた。答えたのはガンドだ。

「わからん。だがお前とここで会う前に一度、俺達はこいつらに襲われたんだ。幸い犠牲はなかつたがな。気をつけてくれ、そこのいらにいた植物共とは違つて多少頭を使えるみたいだ」

「そうみたいだな」

僕がそう思つたのは、まずその生物が集団で行動しているという点だ。目視できるのが4匹。それぞれが等間隔に立ちこちらを向いているところを見ると、明らかにこちらに気付いている。そして、相手はこちらが自らの存在に気づいていることもわかっている。だからこそ、すぐに襲いかかろうとはしないのだろう。なるほど、動物程度には脳みそが発達している。見た目は人間とは程遠い。それどころか、今までの僕が見たことのあるほとんど全ての生物とも程遠い姿だ。大きさは僕達と同じぐらいだろう。一足歩行であるという事実は僕を大いに驚かせたが。

「名前は？」

ガンドがニヤリと笑つた。

「まだ決まってない」

「ハリガネ人間なんてどうだ？」

「悪くないな」

そうなのだ。例えるならばその生物はハリガネ人間だ。二足歩行、サイズ、その2つに關しては人間と似ていると評してやつてもいいが、その体は全くの直線でできており、言うなれば鎧びついた鉄パイプでできた棒人間だ。頭部と思われる部分に目や口と言つた生物的な器官はついておらず、顎の部分には棘のような長く鋭いヒゲが生えている。そして頭は左右に割れ、その先端もやはり鋭い棘のようになつていて、全くの棒状といつてよい胴体部分に腕は生えておらず裂けるようにして両脚が生えている。そしてその脚の、妙に高い位置に存在する関節部分（それは膝に見える）から下は棘付きの棍棒だ。彼らが一歩歩くたび、棘だらけの棍棒が落ち葉を突き刺した。

彼らは徐々に近づいてくる。

「何匹確認できる？」

「4（ポホヴ）」

「違う」

カツサード大佐の声と共に聞こえたのはサイレンサーを被された銃声の音だ。強烈に空気を切り裂く高い音が放たれた後、樹木が砕かれたような音が鈍く空気に響いた。

ばさばさという音を立てて地面に落ちたのは砕けたハリガネ人間の亡骸だった。驚いたことに、バラバラに砕けた体からは一切の出血がなかつた。

「12だ（ポホアンドウ）。囮また」

大佐は上空に向けて銃を構えている。

「前方に4、上に1、左に2、右に2、後方に2」

僕は慌てて周りを確認した。前方の4匹は確かにガンドと確認した。ただしさつきよりもかなり殺氣立っている。一部の生物がそうするように、あるいは威嚇姿勢か、あるいは攻撃態勢か、顎に生える刺はさきほどより鋭く長くなっている。あれは間違いなく武器になる。

上空を見ると5mほどの高さの木の枝から1匹がこちらを覗っている。ただしその姿からは少し躊躇や恐怖というものが感じられた。顎の刺も萎縮している。大佐の狙いが定められていることを、そしてその意味を理解しているのだろうか。生物的本能的に、大佐に対して恐怖を抱いているのだろう。

理解できる。大佐からは前方のハリガネ人間を遙かに凌駕する殺氣を感じる。化け物を超える化け物、野獣的殺気。

左右には同じような位置取りを左右対称に低姿勢をとったハリガネ人間が2匹ずつ、武器はもちろん巨大化している。

そして後方、つまり僕らの退路を防ぐ2匹が巨大化した武器を構えている。大佐はそのことにも気付いている。それでいて「撤退」を宣言した。

それが意味するのはもちろん、この2匹の殺傷と強引な突破だろう。

「楽しめそうだ」

楽しめない。大佐の独り言だろうが、僕は心のなかで否定した。僕がガンドの方へ視線を向けると、大男は目を閉じ、大きく、ゆっくり、2回うなずいた。

「同情する」

「ありがとよ」

「後ろはまかせろ、左右の4匹は問題ない」

「左右の4匹は問題ない？ どういう事なのだろうか？」

「ビジネス。俺達が退路を開かねばならんようだ。2匹だが、悔るな」

僕はプラズマ銃を構えた。ガンドは大きなアンチギミック、大きなスペツナズナイフ。大男が持つにはせこい武器だ。僕は何故か笑えてきた。

左右の4匹と後方となつた4匹が頸の刺を剥き出しにして、僕らに狙いを定め、加速を開始した。

一気に力タを着ける気だろう。

そして大佐もそれに呼応した。

「戦闘開始だ（ボナペティ）」

いつの間にか、雨は止んでいた。

雨で湿つた空気は強烈な木漏れ日を強力に屈折させ、あたり一面を落ち着いたオレンジ色に変えていた。この世界の雨は、気温を大幅に下げていた。しかしながら太陽は復活する。

朝の前に訪れる、不思議な夕方が始まる。

その光景はさながら追い込みをかけるメスライオンの狩りだ。今ではすっかり、おとなしい稀少動物となつて動物園に住み着いているライオンも、大昔は勇敢な狩りを行つていたのだ。僕はその映像を頭の中に思い描いた。ただ今回、そのライオンに似せた戦略的狩猟は成功しないだろう。何しろ、敵は反撃しようと試みているどころか、すべてを把握している上で突破しようとしているのだ。

僕とガンドは加速を開始し、猛烈な勢いで、武器を構え立ちはだかる2匹のハリガネ人間に猛進した。2匹は全く怯む様子を見せず、むしろ全て上手くいつていて、しめしめ、と言つた感じの風貌だ。カッサーード大佐が攻撃を仕掛けないのは、彼らのその油斷、無知を狙つているからだろう。どんな手段を使うかは僕にも予想できないが、大佐が彼らがその猛威に気付くほどの攻撃をかませば、流石に異常を感じ、何かやつかいな行動を起こすかもしれない。あるいは大佐が圧倒的なを見せつけられれば彼らの方が逃げ出すかもしれないが。

「くるぞ！」

僕達の前方にいる2匹が膝の関節を折り曲げ、スタートダッシュを決めようとするランナーの姿勢になつた。それに合わせガンドは素早くスペツナズナイフを構え、僕はプラズマ銃を最大限にチャージした。そしてまたそれに合わせるように、1匹のハリガネ人間の刺がさらに巨大化する。

「なんだりや？」

「様子が変だな」

ハリガネ人間との距離は5mもない、僕達が丁度、地下へとつながる扉の上を通過しようとした時だ。

「ビジネス！ 気を付ける！ やつら何かかましてきそうだ」

その時、ハリガネ人間の頸が小さな爆発を起こした。僕はその瞬

間、ハリガネ人間は顎に空気を溜めていたのだと瞬時に理解できた。

「避ける！ ガンド！」

「くそ野郎め（シラーズ）！」

僕達に向かつて射出されたのはハリガネ人間の顎から猛烈な勢いで飛び出た、巨大な刺だった。

僕らは思い切り横に跳ね、なんとかその凶器をかわす。僕は右肩に地面の衝撃を感じながら、プラズマ銃のトリガーから指を離した。溜め込んでいた高温のエネルギーが射出され、紫色の小さな稻妻がハリガネ人間を襲う。

いち早くそのエネルギーの危険性に気づいたのは左側のハリガネ人間だったようで、そのハリガネ人間は素早く地面に伏せ攻撃をまぬがれた。高速で射出されるプラズマを避けきったのだから、それは相当な運動神経に違いない。そして何より、僕が銃を向けたときにそれが武器だと判断したその動物的な勘が素晴らしい。

プラズマの雷撃をもろに受けた方のハリガネ人間は青白い火花を体中に迸らせたあと、一瞬にして燃え尽きた。そしてそれは一切の悲鳴をあげなかつた。

ガンドが地面に横たわった体勢から素早く起き上がり、もう一度、ハリガネ人間に向かって走りだす。屈んだ姿勢のハリガネ人間は起き上がりかけたところに大男の猛烈な突進を受け吹き飛ぶ。

僕の後ろ側では大佐と6匹のハリガネ人間が戦闘を開始する。僕は6匹の化物と1人のモンスターの戦いに釘付けになる。勝敗はもう分かつている。僕の、何年も、おそらく人類の発生、あるいは文明の発達によつて限りなく無に近く削られた獸の本能が僕に知らせている。

カツサード大佐は、あまりにも圧倒している。ハリガネ人間はもはや獲物でしかない。

右側に位置する2匹のハリガネ人間に素早く発砲した大佐は、発砲の勢いそのままに、銃を振り回すように弧を描かせた銃を、流れまま左側のハリガネ人間に向け発砲した。

銃からはほとんど銃声が聞こえなかつたが、僕のプラズマ銃を見たハリガネ人間たちはそれが自分たちに対する武器だと理解してい

るようで、軽く計2発の銃弾をかわす。そして今や巨大化した武器を向けた左右のハリガネ人間達は大佐に向かつて突進を始める。それは一種の諦めなのか何なのか、おそらく彼らにはそうすることしかできないのだろう。

大佐はいつの間にやら取り出していた2つの手榴弾をそれぞれ両手に持ち、安全ピンを口で引き抜いた。ピンを抜くと同時に、2つの手榴弾は両手から放たれた、しかもそれはオーソドックスな、というよりはそれ以外に使われたことのない、つまり地面に向けて投げられず、空中に向かつて山なりに放たれた。カツサード大佐の左右に放たれた主榴弾は空中4mほどの高さまで上り詰めたあと、重力に導かれ降下を始めた。

「ビジネス！」

チラとガンドに目をやると、彼はすでに地下へとつながる扉を開けていた。膝をついて片手で扉を持ち上げている。

空いた左手でブリックのものだつたスーツを地下に放り込んだガンドが叫んだ。

「早く！」

見ると、大佐の向こう側にいた4匹のハリガネ人間はその数を増やしている。援軍が隠れていたのか呼ばれたのか、とにかくやつかいなことになりそうだ。

大佐の左右のハリガネ人間はなおも高速で突進を続ける。しかしもはやカツサード大佐は左右のハリガネ人間のことなど、全く思慮に入れず、後ろ向きに歩きながら、いつのまにか装備しなおした、お馴染みのアサルトライフルを後方に向け、引き金を引いた。

銃声は聞こえなかつた。なぜならカツサード大佐の発砲と同時に、それを上回る爆音が鳴り響いたからだ。

爆音。それは正しく1つの爆発音だつた。しかし爆発を起こした箇所は2つ。左でカツサード大佐に進撃していたハリガネ人間2匹と、その反対側で同じ動きをしていたハリガネ人間の2匹。計4匹がいきなり爆発し、爆音を轟かせ、不自然な、非生命体的な跡形のみを残して吹き飛んだ。同時に後方のハリガネ人間の集団の中の5匹の頭も吹き飛んだ。

「いけ。ビジネス、ガンド」

僕は全くの心配や意見を考えず、その言葉に従つて、扉に向かつた。

僕はカツサード大佐が何をしたのかということがすぐにわかつた。まず後方の5匹は、アサルトライフルの射撃によるものだ。左右

の4匹は、絶妙のタイミングで投げられた手榴弾が、彼らの頭上で爆発したのだろう。カツサード大佐は手榴弾の爆発のタイミングとハリガネ人間のスピードを寸分違わず計算し、最低限の労力ですべてをやってのけたのだ。直接投げれば、爆発のタイミングが合わないだろう、あるいは避けられるかもしれない。地面になげれば、それなりの知力を持ったハリガネ人間はそれに近づかないかもしれない。

だが、突如として降り注いだ爆発物に、彼らは気付けなかつたのだ。それはそうだろう。僕、だつてカツサード大佐の行為の意味がわかつたのは、ことが済んでからだ。

いくつかの銃声を聞きながら、僕は梯子を降りていた。
下で待ち構えていたガンドはすでにブリックのステップを拾い上げ、
傷の具合を確かめていた。

「大丈夫か？」

「ああ、問題ないよ」

「しかしどんでもない化物がいたもんだな。あんな生き物は見たこと
がねえ」

ガンドはもちろんハリガネ人間のことを言っているのだろうが、
僕からすれば、それは大佐の話に聞こえなくもない。
梯子を下るカツカツという音が聞こえ、おそらく残りの10段ほど
を飛び降りたカツサード大佐が現れた。

「戻るぞ。ジョージの様子も気になるな」

「急いだほうがいい」

僕は不安だつたのだ。もし洗脳されたジョージが暴れていたら?
「なぜだ？」

ガンドは本当に不思議そうな顔をしてこちらを向いた。

僕がジョージの暴走を示唆すると、大佐はやれやれ、という感じ
の仕草をし、何も言わずに歩き出した。それは本当に「やれやれ」
という感じだった。

「大丈夫さ。大丈夫。あの先生はそんなへマはしねえよ」

今度は僕が「やれやれ」と言つ番だった。

「やれやれ、たいしたゴロツキだ」

僕たちは戻つたのだ、太陽が届かない地下、静寂の夜の世界に。

ボディチェック

「待て

僕とガンドが振り返ると、そこに大佐がいた。

「悪いな。ふたりとも

今銃口を突きつけられているのは僕だ。幸いガンドの方にその凶器は向けられていない。にもかかわらずガンドはピクリとも動かなかつた。大佐がこちらに銃を向けている。その一事が既に、致命的に動きを取れる状況ではないのだ。

「どういうつもりだ？」

僕は震え上がりそうになる声を必死に制御し、大佐と目を逸らさないようにして言った。

「心配するな、単なるボディチェックだよ。ふたりとも後ろを向け」
僕のスーツの内側では冷たい汗がつるりと流れ、すぐさまスーツに吸収された。死ぬかもしれない、という恐怖はあった。それはもう、どうしようもなく受け入れるしかない事実であるかのように思えた。銃を握っているのが大佐だからに決まっている。後ろを向いた瞬間、僕は全ての感覚を失い、地面に横たわる意識なき肉片に変わってしまうのではないか。そんな考えを必死に抑制しながら、僕は大佐の指示に従つた。

「なにをそんなにこわばっている。殺す気などない

僕は心底安心した。それと同時に訳がわからなくなつた。確かに、大佐がそんな、つまり、今から殺そうとする相手に「殺さない」などと伝えるわけがない。そんなことは全くの無駄だ。

もし本気で大佐が僕らを抹消しようと言うのなら、僕らがそれに対抗出来る術も、気付くことすらできないだろう。

「いいだろう」

そう言つて大佐は銃を下ろした。

は？僕を客観的に観察する何者がいたならば、僕の頭からはクエスチョンマークが飛び出していたに違いない。そして僕はもう一度クエスチョンマークを飛びさせるはめになつた。は？今度は声に出しそうになつた？

「さて、おれの方は大丈夫だろ？ 一応、確認してくれ」
僕とガンドは何も言わずに、両手を上げて背中を見せた大佐をただアホのようにみつめた。

「異常はないか？」

「ええ、まあ」

呆然とした様子でガンドが応えた。

「ちょっとまつてくれ。さつきから何をしてるんだ？」
カツサード大佐は表情を変えないまま、ちらりと僕の目に向き直り、じつと僕の目を見て呆れるように顎を動かした。

「やれやれ、よくそれでここまでこれたな、新入り（ルーキー）」
「悪かつたな」
「戻ろう、とにかく異常はない」
「わかつたぞ」
歩きながら小声でガンドが話しかけてきた。
「何が？」
「大佐が調べたのはキノコだぜ、たぶん」
「なるほど」
ガンドが気付いたのも今更になつてからだ。僕は少し前からそのことに気付いていた。
まったく、カッサード大佐とは抜け目のない男だ。いや、この場合、僕とガンドの認識が甘かつたのだろう。何しろここは単なる不思議の森ではない。べらぼうに危険な悪魔どもの巣窟なのだ。
やつと田の前に扉が見えてきた。一つ一つの部屋よりも廊下や梯子のほうが巨大なのがこの地下施設の特徴だと、僕は徐々に認識していった。
「ところでカッサード大佐」
僕はふと気になることがあつたので、カッサード大佐に訊ねた。
「やつらは追つてこないのか？」
「どうだらうな。可能性が無いとは言えんが、見たところやつらの力と身体の構造での扉を開けるのは難しいだらう。内側に電子式のロックもあつた」
「あの後どうなつたんだ？」
「何も起こりん、やつらの数が増えただけだ」
起こつてゐるじゃないか。と僕は思つたが口にするのはやめておいた。この男と僕はあまりにも感覚というものがかけ離れていた。
ガンドが扉に手をかけた。医者は患者を回復させたのだろうか。

「遅かつたじゃないか」

僕は地上にいた時間がそこまで長いものだったとは思えなかつたが、地下で待つていた博士たちにとつてはかなり長い時間だつたらしい。

僕らは地上で限られた場所に滞在していただけだ。極度の緊張が僕の体内時間を急速に早めたのだろう。

「無線機は既に完成している。無論、一度この森から抜けださんと本部に連絡はできんが、ここにいる隊員同士での通信は森の中でも可能なはずだ」

机を見ると、そこには確かに8つの無線機が並べられていた。それらは全て僕が持つてきた、壊れた無線機を修理し、複製したものだということが僕には予想できた。

「ジョージは？」

僕は冷静すぎる女博士に対して、出来る限りの深刻な、真面目な表情でそう訊ねた。

ところが、博士は僕を馬鹿なやつのような目で見返した。

「そこで横になつている」

博士は奥にある机の裏側を指さした。

「大丈夫なのか？」

「やはり心配しているのか」

彼女はそう、僕を半ばからかうように笑い言つた。

「そりやあそだらう」

「レイヴンが大丈夫と言つていたんだ。大丈夫だ」

どうしてビリーモンツもあんなヤクザをそんなに信頼しているんだ。

「不思議そうだな、ビジネス」

後ろから大佐の声がした。

「医者にとつて重要なのは正義ではない。病を治せるか治せないか、それだけだ」

やれやれ、僕は肩をすっぽめ、呆れる以外の動作をすることができなかつた。

「悪く思つな、奴の言葉だ」

そう言つと大佐は、机の無線機をいじり始めた。

「気持ちはわかるぜ、ジョン」

もう一押しをしようと話しかけてきたのはガンドだった。

「医者に正義は必要だ。だが先生みたいな神業だつて必要だ。

実際、おれは先生の治療が成功するかどうかより、無線機に必要なものがあるかどうかの方が心配だつたぜ。

やれやれ。しかし確かに、無線機のことも懸案事項に含まれていたな。

僕は何も答えず、ジョージのもとに歩きだした。

疲労感

そこには床に敷かれたマットに横たわるジョージがいた。手術後にも関わらず、ジョージはスーツを着たまま眠っていた。

そして眠っているのはジョージだけではなかつた。

「そつとしておいてあげて、疲れてるのよ」

右腕を机にまかせて座っていたミユキが立ち上がりながらそういつた。彼女の表情も心なしか疲労感を僕に伝えるようなものだつた。

「何があつたんだ?」

「どういう意味?」

「ずいぶん疲れた様子じゃないか。君も疲れているようだし、やぶ医者なんて馬鹿みたいに眠つてる

「なにもないわよ。彼がずっとジョージを治療していただけ。私も力になりたかつたんだけど」

どんな手術だつたのかはわからない。だが僕達がここに帰つてくるまで、4時間も経過していなはずだ。4時間以内に終わるような手術が、そんなにも大手術だつたのだろうか?

「本当に神業よ。機械みたいに手が動くの、すごい集中力、体力、気力。ほとんど見ているだけの私が先に倒れちゃつて」

「それで、手術はうまくいったのかい?」

ふと後ろを見ると、ガンドがコムログにスーツを手渡していた。コムログはスーツを興味深そうに見つめ、ガンドと何かを話していた。

大佐の方も新しく完成した無線機を拾い上げ、何やら博士と話している。

ミユキはふと朗らかな笑顔を見せ「大丈夫」と言った。

「知らないの?先生が手術のあとで眠つたっていうことは、手術が成功したということなのよ」

「そうかい」

僕はミコキの笑顔を崩すのも嫌だったので、否定せずにそう答えた。

医者が手術後に寝るのは単なる癖だろう。失敗した手術がなかつたからそう思えるだけなのだ。結局のところそれは間違いない。スーツを着たまま寝込んでいる手術後の男は、本当に手術を受けた直後というイメージを僕に与えなかつた。おそらくスーツを着ているままだからとか、そういうことではない。仮にスーツを脱がしてたとして、ジョージの体には一切の手術跡を確認することができないだろう。

神業なのだ。とにかく。

「スーツを着てたほうが回復が早いらしいの」

聞いてもいらないのにミコキが答えた。それは僕がジョージの様子を伺つたからに違ひない。

「窮屈そうだな」

「やはりそう思うか」
気が付くとやぶ医者が両目を開けていた。両手を組んだまま座り込み、患者の方を見ると「そろそろ目を覚ます頃だな」と言った。どうしてそんなことがわかるのか僕にはわからなかつた。

医者は天才的な勘と論理で（僕にはそれがどんな論理なのか全くわからない）ジョージが目を覚ますタイミングを予告した。そしてあたかも氣絶していたほうが医者の言葉に合わせたように、はつきりと目を覚ました。

「ジョージ！」

叫んだのはミコキ・ヒレレンスだ。目を覚ましたジョージを確認するやいなや、電光石火でジョージの側に駆け寄り、地面に膝をついた。

「先生！ジョージが目を覚ましたわ！」

「わかつている。気分はどうかね？」

医者はジョージに訊ねた。ミコキはレイヴンからジョージへと視線を移した。

「よくはないですね」

精一杯の力を込めたであろうジョージの声は、やはり彼が手術直後の人間であるということをはつきりと示していた。

「それよりもみんな、すまなかつた」

「あなたのせいじゃないのよ、ジョージ。誰だつて怪我も何もしてないんだから、いいのよ」

「いや、俺の不注意だつた。だありがと、ミコキ」

そう言つとジョージは上半身を起こし、右手で首の後ろを抑えた。「痛むなら無理をするな。スーツは首まで上げておけ、今お前さんの傷を癒しているのはスーツだけだからね。首から腰までメスを入れたんだ。私としちゃあまり動いて欲しくない」

「いや、大丈夫だ、先生。だが無理はしない」

そう言つてジョージは立ち上がると、ゆっくりとした足取りで僕の方へ近づき、僕の肩に手を置いた。

「すまなかつた、ジョン。もう少しで殺してしまつといひだつたな」「覚えているのか？」

僕は驚いた、ジョージは意識がありつつ凶行に及んだのだろうか。

「難しいね。思い出せるが、あの時、意識はなかつた」

「仕方ないさ」

不思議な現象だと思うほか僕のすべきことはなかつた。憎むべき寄生キノコ、ビワガサは寄生中、ジョージの意識と行動の一切を奪い、天才外科医レイヴン・ジャックに何らかの外科的手術でひつぺがされたあと、凶行の記憶だけをジョージに残した。どういう理屈なのだろうか。一度、博士かレイヴンに訊いてみるか。

「どれぐらい動ける?」

僕の後ろから覗き込んだのは女博士だ。両手を後ろで組み、口にははつか煙草を咥えている。

「普通に行動する程度なら問題ない。スーツを着ての話だ、激しい運動は控えてもらおう」

ジョージの代わりに答えたのはレイヴン・ジャックだ。

「傷口が開きだしたりなんてすると私はまたムラムラと治したくなつちまう。面倒なんでな」

「大丈夫ですよ、先生。俺は動ける」

医者はジョージと視線を合わせるために、腰を落とした。

「いいが、本当ならお前さんには長い休養が必要だ、傷も完治しない。この先どんな戦闘があったとして、お前さんが参戦することはまかりならん」

一瞬の沈黙、女博士が医者の意見を肯定する皿を発言するまで、誰も口を開かず、真剣な瞳で、医者と患者の視線が交わり火花を散らす空間を見つめていた。

「つむ、医者の言つことは聞いておくべきだな、ジョージ」
仕方ない。という感じの表情をもろに浮かべたジョージは「わかれました」とだけ言つた。

「おー、ジョージ。目を覚ましたな」
回復しているのが当然だと呟つが如く、ほんと心配という感情
を欠いた様子のガンドが戻ってきた。

「迷惑をかけたな」

「いいことよ、仕方ないぜ」

大男は親指を立ててみせた。「それより」とガンドは呟つた。
「ちょいとまずいことになった」

頭を搔きながら「梯子が壊れてるぜ」と突然呟つたガンドの言葉
の意味が僕にはいまいちよく理解できなかつた。

「どの梯子だ?」

「地上へ出る梯子だよ」

やれやれ、どうしてこつも問題ばかり起つるのだろうか。

部屋に入つてすぐに、僕は思った。ここにある梯子は施設にある長大な梯子の中でも最も巨大なものだ。つまり、最も頑丈であるべきで、実際に最も頑丈なものなのだ。

それは僕が最初に降りてきた梯子だつた。暗闇の中、長い時間をかけて降りたあの梯子。それは今、僕の眼前で、死んだように崩れ落ちている。

「これを見ろよ」

ガンドの方を見ると、10m程先にいるガンドが崩れ落ちた梯子の先端、破損部分に指を当てていた。

僕はガンドに近づき、梯子を見た。僕はそれを見た瞬間、この巨大で頑丈な梯子が破壊された原因がわかつた。

「焼き切れてるぜ」

「あの時だな」

僕はキノコに洗脳されたジョージが持つっていたレールガンを思い出した。

ジョージはガンドに向けレールガンを構えた。あの時、レールガンは明後日の方向を撃ちぬいた。カツサード大佐がジョージを組み伏せた弾みで、弾は後ろに反れたのだ。その時だろう、大佐とジョージの遙か後方にあつたこれに、レールガンの一撃が炸裂したのだ。

「絶たれたな、退路が」

後ろから声がしたかと思うと、そこでは博士がはつかたばこに火を着けていた。

「何とかして上へ登れませんかい、博士」

僕は天井を見上げた。ガンドは言葉を続ける。

「何しろこの梯子の先の道なら俺たちが知つてゐる場所ですぜ。それなりに安全に帰れるんだ」

薄暗く、周りが多少は見渡せる程度には明るくなつたこの大部屋

だが、上を見上げると、そこに広がるのは真っ黒の天井か、光の届かない上空かのどちらかで、スーツの補助をどれだけ便りにしたところで、決して触ることのできない領域だった。

「無理だ。無線機を作ったときに機材を集めだが、浮遊機を作るのには無理があるな」

ガンドも天井を見上げた。その先にあるのはやはり忌々しい闇だけだった。

「残念な事態だが我々は進むしかない。カッサードとお前たちが戻ってきた扉でもいいが、化け物が待ち構えているらしいな。もつとも、カッサードがいるんだ、强行突破できないことはない。戦力外のレイヴンと私がいることを考慮してもな」

ハリガネ人間を見てもいいのに、大佐がいるなら大丈夫か。カッサード大佐の化け物ぶりは女博士の飛び切りに優秀な論理的思考を根本からたきつぶしたらしい。

「これをつける」

そう言って博士は金属の塊を僕とガンドに渡し、自身もそれを白衣の襟元へ取り着けた。

「原始的な無線機だ。通信は全員に向けることもできるし、個人に向けることもできる。切り替えは一種類で操作は簡単だが、ここにいる者としか通信はできない」

「つまり森の外に出ても助けは呼べない？」

僕は重要なことを訊ねた。ポリノの研究所との通信コードは頭に叩きこんである。

「わからん。なぜこの森の中か、あるいは森の周辺に近付くと通信が妨害されるのか、原因不明だからな。もしお前が無線できた最後の地点まで我々が戻れたなら、通信が回復する見込みはある、この無線機の基本構造はお前が持ってきたものと同じだからな、急遽、専用コードを持つコードを作つただけだ」

僕とガンドは操作方法をすぐに覚えることができた。シェルター内の多くの日常電子機器を作っているのは誰あるうこの女博士だ。

この無線機ほんとシンプルではないにしろ、その商品の数々は高度な操作が可能な上に、直感的な使用ができる理想的な電子機器ばかりだ。

そして博士が自由気ままに研究や実験を行える裏側に、そのような商品で得た収入があるのだ。

大企業、ファーリス・エレクトロニクスの創設者、彼女のもう一つの顔。

「戻るぞ、もう一つ扉があることは知っているな、コムログによればなかなか都合のいい出入口だそうだ」

どういう意味だらうか？都合がいい？悪くない表現だ。

「今回は全員で行く。脱出だよ」

僕達が大部屋に到着すると、そこには全員が集まっていた。ジョージは何事もなかつたように椅子に座っているし、大佐は壁に背中を預けて腕を組んでいる。そして確認したところ、全員が同じ無線機をつけている。

「どうぞ座つて、ジョン。ガンドと博士も」

ミコキが立ち上がり僕らを促したので、手近にあった椅子に僕らは腰を落とした。ガンドが座つた椅子はやや苦しそうな悲鳴をあげた。

「みなさん、これを御覧ください」

正面でコムログが何かの薄っぺらいリモコンのスイッチをいれると、映画館のようなホロスクリーンが現れた。もちろん、本物の映画館のスクリーンほど大きくはない。

僕は映画というものが好きだ。確かに最後に見た映画は推理小説を元に作られた馬鹿げたファンタジーだった。誰でも魔法を使える世界である魔法を使った殺人事件が起こり、探偵が魔法とおなじみの賢い脳みそを使って犯人を暴きだす。そんなストーリーだったと思う。

魔法。魔法か。そんなものがあるはずがない、魔法とは、科学が人間が証明できない何らかの現象につけた総称にすぎない。そうさ、僕達は納得すべき理由を必要とする生き物なんだ。魔法でも、心霊現象でもいい。理由がわからないほど怖いものはないのだから。

この世界がこんな風に変わってしまったのは魔法のせいではない。地球の生態系をここまで異様にしてしまったのも、豊かだったはずの大海を失つてしまつたのも、魔法のせいではなく、大昔から続けてきた人類の悪行が原因なのだ。

神や魔法や心霊現象やその他の解明不能なフェノメノンではない、僕らが地球を痛めつけ、傷付け、苦しめ、壊したのだ。自分で自分

の首を絞めている。

「これが私達に残された最後のルートです」

コムログの声に合わせ、ホロスクリーンは電子式であるつ銀色の扉を映しだした。その扉は今まで僕らが使つたことのある扉とは少し形状が違つていて、

「この扉はですね、おそらく、M・エレレンス、あなたが発見されたものと思われます」

「そうよ、でもその扉はまだ開けていないわ」

「はい、M・エレレンス。実はこの扉は電子ロックがかかっていて、パスワードが必要です」

「パスワードは知つてゐるのか？」

僕の隣でガンドが言つた。

「もちろんです、M・ブルー」

「その扉は電動式か？」

「そうです、E・ロマンコフ」

「なぜその扉だけ電動式で、しかもロックが掛けられている」

「なぜならこれはエレベータだからです。一度、北へと進み、中継シェルターに向かいます。その後そこにある上昇エレベータで地上へ出るという計画です」

「待つてくれ、北へ行くと帰る道が遠くなる。僕達が戻らなければいけないのは南の方角だ」

「その通りです、M・ビジネス。しかし私達はこのルートで脱出すしかありません」

「他に出口はないのか？」

「ありません、M・ビジネス、外へとつながる扉は、エレベータ、巨大はしごの部屋、そして、ハリガネ人間とやらがいた扉だけです、ハリガネ人間。コムログが僕らの決めた名称で呼ぶということは、それが彼のデータベースに存在しないということだ。」

「危険なのはわかるが、ハリガネ人間の扉から脱出したほうが北へと進むよりマシなんじゃないのか？どうせ北へ出たところで、どんな化物に出会うかわかったもんじゃない」

いつの間にかホロスクリーンはシェルターの全体構造を映し出している。たしかに「ムログが言うエレベータは北へと長く伸び、その先には離れのような部屋がポツンと存在している。

「私もそう考えます、M・ビジネス。ですが先程、M・カッサードにお聞きしたところ、外で雨が降つていたということなので何が問題なのだろうか。まさか彼の体が水でショートしてしまうとか、錆びるとか、そんなことではないだろう。そもそも、僕らが退散したときには雨は殆ど止んでいたのだ。

「おそらく、もうすぐこの地上は火の海になります」

まいつたぜ。僕は本当にそう思った。椅子に座つていなければ、僕は地面に腰を抜かしたに違いない。

「先ほど申し上げたように、雷吼樹の森がここに真上にあるのです。雷光樹は雨上がりに発火するので、残念ながら、その扉を使うと私はたちまち燃え尽きてします」

「まさか！」

僕は思わず声を荒らげた。全くの無意識だ。誰に文句を言つたとこりで、どうにもならないのはわかっている。

「そんな馬鹿な！地上には何かが燃えたあとも何もなかつた、そもそも同じ形状の樹木ばかりじやなかつたぞ」

僕は自分で思つてはいる以上に大きな声を出していることに気付いた。

「まさか、10年越しごらいで降つた雨に、運悪くぶち当たつたつてわけじやないだろ？」

僕は冗談で怒りをこまかした。だがコムログはそんな僕の心境を見透かしたように、僕に合わせて取り乱す事のないように答えた。

「いえ、その点は私にもわかりません。ただ、動物類は確かに異様な変貌を遂げているようですが、聞くところによると、植物類は強靭に、巨大になつています。植物が燃えた痕跡が見られないというのも、おそらく短期間で他の植物も再生するんでしょう。おそらく雷吼樹もその例に漏れないでしきう。かなり生命力の高い種族ですから」

「どれくらい燃え続けるんだ？」

「私が知つてはいる限り10時間ほどでしたが、現在の規模を考へると、私にも予想ができません」

「燃え尽きるまで待てないのか？」

「ダメです。M・ビジネス。時間がかかりすぎます。おそらく、雷吼樹そのものが燃え尽きて、その他の植物は燃え続けるでしょう、それに想定通りの規模の雷吼樹が存在するならば、地上一帯は文字通りの火の海、どころか、沈下したあとも猛烈な熱が残っていると思われます」

「熱が引くまで待てばいいじゃないか、北へはどれぐらい進むんだ？」

「およそ60マイル先にプロスキ・トルバチックと呼ばれた死火山があり、Hレベータはその麓にあるのです」

「そんなに遠くになるの？まだここにやり過ぎしたほうが安全じゃないかしら？」

「M・エレレンス。いえ、皆さん、話さなければならぬことがあります。先ほどH・カツサードとはお話ししたのですが、私達は、厳密に言えば私以外の、つまり生身の人間である皆さんは、一刻も早くここを脱出しなければなりません」

「なぜだ？そもそも、本当にその雷吼樹とやらが存在しているかどうかさえはつきりとはしてないぜ」

ガンドの言つとおりだ、僕らは外に出たとき様々な木々を見たが、それがその雷吼樹にあたるのかはよくわからなかつた。

「だつてよ、もしこんな植物だけの場所で火事みたいなもんが起つてみる、炎が消えるのはこの森を焼き尽くしてからだぜ」

「M・ブルー、あなたの言つとおりです、しかしもう一つの事実は雷吼樹が存在することを告げているのです」

「どういうことかしら？」

「カツサード大佐の指示でこんなデータをとつてみたのです」

ホロスクリーンはコムログの言葉に従い、その画面に棒グラフを

映しだした。左から右に行くに従つて棒グラフは徐々に短くなっている。

表示されている数字はこうだ。数字は左から22・080、22・074、22・068、21・060。そんな風に、法則を持たずして、ランダムではあるが、徐々にその数を減らしていく。そして最も右に位置する数字は19・888だった。

「これは？」

僕にはそれが何の数字かわからなかつた。

「摄氏だ」

答えたのはカッサーード大佐だった。

「摄氏？」

「申し訳ありません」

コムログははつとしたよひに言つた。

「華氏に切り替えます」

そこで僕もはつとした。華氏に切り替える必要などない。これは温度だ、おそらく、この地下施設の。

「これは私が起動してからのこの地下施設の推移をグラフ化したものです。」
覧のように、徐々にではありますが温度は下がりっぱなしです」

嫌な予感が走った。もういい、コムログ、ここから脱出しなければならない理由が、その緊急性がじわじわと僕の不安感を責め立てた。

「この地下施設の温度が下がってきてているのでは、おそらくないでしょ。もとに戻り始めているのです」

「もういいぞ、アンドロイド、それで十分だよ」

博士が立ち上がった。

「準備とこうほどのものはないな、すぐにに出発できるのなら、すぐに出よう。長居する理由はないし、こんなところに私はもたつさよならを言いたい」

「保存庫にあつたレーショնは片つ端からこのバッグに詰めた。いいな?」
「コムログ」

「もちろんです。」
・カツサード

「」
ノーと言つたところで何か意味はあるのだろうか。

僕は思い出していた。たしかに、この地下施設に潜つたとき、僕はこう思つたのだ。大地の温かみを感じた。快適な温度だった、と。そんな馬鹿な話はない、地熱？ 地球はすでに死んでいるはずだ。おそらくすでにその熱を失つてゐる。もちろんここには暖房設備などない。凍つてつく闇の世界だつたはずだ。つまり、地下にシェルターを作つたところで、人類に生き残るすべはなかつたのだ。

なるほど、これは僕の粗末な仮設に過ぎないが、ここに入つ子ひとりいない理由は、人類がそれに気付いたからではないだろうか？ だから誰もここに入らなかつたのだ。それなら、暖房設備でもつければいいだけだが。

とにかく、この地下施設の温度が僕らにとつて、現在、快適である理由。それは僕らがここに到着する以前に、地上が灼熱地獄だつたからではないだろうか？ 地上の植物の成長度からして前回雨が降つたのはそれなりに前のことだろうが（ただ、僕らはここにいる植物がどれほどの猛烈な成長力を持つてゐるのか知らないのだが）、現在の温度にして快適、さらに徐々に冷えている、ということは、以前、今よりもここがもつと熱かつたことを意味する。

つまり、放つておけばこの地下施設は火の立たぬ灼熱地獄に変貌する。

機械系やコムログが無事だということは少なくとも鉄や、コムログを形成する何らかの物質が溶け出すような温度ではないだろう。だからと言つて、僕ら生身の人間が太刀打ちできる温度かと言うと、それでもないらしい。それは博士の（脱出しよう）という判断で納得できる。きっと何か僕には難しい計算をしたに違いない。

だから僕らはすぐにエレベーターに乗つた。用意すべきものなど、保存庫に保管されていた大量のレーションが詰まつた圧縮パックを別にすれば、ほとんど存在しなかつた。

僕らはそれぞれの武器を手にエレベータに向かつた。
高速で水平移動を行う箱の世界に、僕らは足を踏み入れた。

僕はコムログの言つたレベータを鋼鉄か何かで作られた単なる無機質な箱のようなものだと想像していたが、実際にはそれは僕が想像したところのそれとは異なっていた。

高速で水平移動をしているにも関わらず、そのスペースは（空間は予想通り正方形に近かつた）快適で、何よりかなりの広さがあった。

おそらく進行方向だと思う壁には棚があり、多種多様な武器が収められていた。左から、様々なスタンナナイフ、スタンウェイップ、スタンスティック。その隣には銃類、M1903、M1ガーランドなどのライフル。カラシニコフ。これは僕も知っていた。どれもこれもアンティークで、特にガンドは目を輝かせていた。表情には出さぬものの、カツサード大佐も吟味するようにもはや伝説級の古めかしさをもつ武器たちを見つめていた。コモン・テスタス、モシン・ナガン・ドラグーン、ドラグノフ。さらにカンピピストーレやパンツァーファウストなどのグレネードまである。

逃げ延びた人類が残してくれた数少ない産物、資料。それらに載つていて、今では存在しないはずの動物、武器、書物など、とにかくそれらは僕らにとつて伝説のようなものだった。

今、僕らの目の前にあるのは、大昔の伝説なのだ。

シェルターにいる人間はみな夢を見る。今はもうなくなってしまつたもの。シェイクスピアの傑作、怪しげなモナ・リザ、エミラ特斯の輝き。美しきサラブレッド、巨大なマンモス、凶暴なサメ、空を舞う鷹。圧倒的な自然、山、海、川、そして太陽。

かつて地球はそれほどまでに美しかった。

ピースメーカー

ガンドは古い拳銃をずっと眺めている。いかにも興味深そうな瞳が僕を誘つた。

「なにをそんなに見てるんだ? 何か特別な銃なのか?」

「ああ、こいつを知っているか?」

「いや、見たことない銃だな」

実際にはその機構について多少の理解があった。使いにくそうな手動タイプのリボルバー。こんな不便な銃はどこの店に行つたって置いていない。

何という銃なのだろうか、この銃がガンドにとつてどんな価値があるのだろう。

「ピースメーカーですね」

「ムログが口を挟んだ。

「C S A A。1892年に製作された名銃です。このタイプは2043年まで出回った45口径ですね。ウインチエスター銃と並ぶ史上屈指の偉大な回転式拳銃です」

「2043年」

僕とガンドは声を揃えた。それはおそらくムログが生きていた時代ではない。その果てしなき時間の流れを想像して、僕はめまいを覚えた。

ムログの知識は底なしだ、過去の人類史をほとんど網羅している。博士がシェルターに連れて帰りたがっている理由もわかる。僕達が学べるものがあるとすれば、それは過去から以外の何者でもないのだ。

「これを見てくれ」

ガンドがガンホルダーからゆっくりと取り出したのは、驚くべきことにムログが言う伝説の銃と全く同じ姿をしていた。

「どうしたんだ、それは?」

「コムログすらも興味深そうにそれを見つめた。フレームにはE m
i on Brunoという名前が彫られている。

「先祖から代々引き継がれてきた銃だ」

「ガンドはゆっくりと話した。ひとつひとつ思い出をひねり絞る
よに。」

「誰も、名前すら知らないシロモノだった。俺の家ではこれが代々
お守りだった」

感動のあまりだろう。ガンドの目が少し潤んだように、僕には見
えた。

「長い間、家族を守ってきた銃だ。昔はちゃんと使われてたんだろうな。ばかみたいな時間が過ぎちまって、今じゃ弾が売つてねえから、本当にただのお守りになつちました」

苦笑したガンドは声を震わせながら愛しい銃をしつかりと握りし
めた。

「M・ブルー。これを」

コムログが棚から選んでガンドに差し出したのは赤い箱だった。

「これは？」

ガンドは赤い箱を受け取つた。

「45ロングコルト。。他にも互換性のある銃弾はありますが、私はこれを推奨させていただきます、M・ブルー」

ガンドはゆっくりと赤い箱を開けた。先端に銀色をまとい、金色に輝く弾丸がたんまりと眠つていた。

「毎日、手入れは欠かさねえんだ。いつか、こんな日がくればと思つてた。俺の先祖からの、俺たちの夢だつた」

ガンドは弾丸をひとつつまみ上げじつくりと見つめた。そしてゆ
っくりと歴史ある先祖の銃に装填した。

「ありがとうよ」

突然ガンドに抱きしめられたコムログは笑顔で言った。

「お役に立てて光榮です。M・ブルー」

「ジョージ。傷の具合はどう?」

「ミコキがジョージに話しかけた。

「気分は良い。手術した後だとは思えないよ。自分でも」

「無理はするな。そりやあスースのおかげだ。そのスースがお前さんの体に密着して切つたところを頑丈にしてやがるんだ」

医者は椅子に座つて煙草をふかしている。

「お前さんの上半身のほとんどのところにメスを入れたんだ。そのス

ースがなきやあ絶対に動くことはまかならん」

「だが先生がいなければ俺は死んでいた。スースもそうだが、とにかくあなたのおかげだ」

「そうですよ先生。先生がこの部隊にいてくれて本当によかつたわ
「フフ、私は金のためにやつていてるだけだ。とにかく、お前さんは
まだ安静にしておくんだ。ここにはベッドがないからな、到着する
まで、そのへんで横になつておけ。私も少し寝る。寝られる時に寝
ておかなきゃあなあ」

医者は煙草の火を消すと、並べた椅子に足を伸ばして目を閉じた。

「僕達は長い間、鋼鉄のゆりかごに揺られ続けていた。

「向こう側に着いたら我々はどうすればいい? 何がある?」

大佐が銃の手入れを終えてコムログに近づいてきた。

「向こう側のシェルターについては問題ありません。このエレベータと同じく人為的な手段を持つてしない限り、まず侵入はできないでしょう」

「上昇エレベータの出口は確保できているのか?」

「そこなのです、C・カッサーード。私はそのことについて考えていました」

「やはり塞がつてている可能性があるといつことか?」

「おいおい、それはどういうことだ、それがもし本当なら、僕達はどうすることもできない。ただ地下で死ぬのを待つだけだ。ここは馬鹿でかいハイテク棺桶と化す。」

「大規模な地殻変動があつた場合や、水生植物が巨大成長を遂げて出入り口を塞いでいた場合、脱出は不可能です」

「どれくらいの確率だ?」

「私はほとんど可能性は低いと考えています。C・カッサーード

「雷吼樹だな?」

「コムログはやや驚いたよう」に「そのとおりです。C・カッサーード」と言った。

「僕は我慢できなくなり、一人の会話に入った。

「どういふことだ?」

「聞いておられたのですか、M・ビジネス

「どうせ全員に覚悟する必要がある。構わん」「どんな覚悟だ? それは。

「泳ぎはお得意ですか? M・ビジネス」

二ユーバイカル

「コムログとカツサード大佐を前にして全員集合だ。これから、僕に泳ぎは得意かと訊いた意味を教えてくれるらしい。

「みんなに、お伝えしておかなければならぬことがあります」「やれやれ、どうせ悪い知らせだ。

「我々はこの先のシェルターで上昇エレベータに乗り移り脱出を図ります。しかし上昇エレベータですぐに地上に出られるわけではありません」

「水か」

女博士は右手でペンを弄びながら言った。

「一体どういう脳みそをしているんだろ？」「僕とは想像力の桁が違う。コムログだつて驚いている。

「そのとおりです。いえ、少し驚きました」

「ちょっと待つて、私達のほうが驚いてるわよ。水って言つのはどういうこと？何が、水なの？」

「そうだ、ミユキ。それが正しい反応だ。どうも大佐と博士、それからあの医者に親近感がわかないのは事ある事象に対しての反応が僕らのような一般人とあまりにかけ離れているからだろ？医者なんて腕を組み眠つたままだ。

「M・ミユキ。これは知らなければわからないことですが、実は我々のシェルターは水中に建設されているのです。

「何しろ非常時のためのシェルターですから、立地条件が多少不便でも、とにかく脱出に適していて、かつ地上災害の被害を受けない場所に存在する必要がありました。シンプルに言えば、裏口、と言えます」

「まさか、海なんてもんはとつぐに干上がつちまつてるぜ？俺たちが生まれるずっと前からだ。今頃はそのシェルターとやらもむき出しじ、悪けりや植物の巣になつてゐる」

ガンドの言つていることは正しい。だがこんな森がシェルターの外にあつたのだ、海がないとは言えない。可能性は〇じゃない。僕にだつてそれぐらいの想像力は蓄えられている。

「海ではありません。正確には、M・ブルー。湖です、ニユーバイカル湖。当時、世界最深クラスの湖です」

「どつちにしても干上がつちまつてんじゃねえか？」

「その可能性もあつたのでしうが。どうやらニユーバイカル湖は持ちこたえたようです。しかしM・ブルー、湖に水が残つてゐる可能性を私に教えてくれたのは、あなたのおかげといつてもいいでしょ？」

「どういうことだ？ 記憶にねえな」

ガンドは人差し指と親指で顎を挟み、首を傾けた。

「雷吼樹ですよ」

「わかんねえ」

なるほど、僕はやつとわかつた。

「M・ブルー。なぜ雷吼樹が森を焼き尽くしていなか、とおつしゃつたのはあなたですね？」

「ああ、それは覚えてるな」

「我々は元いたシェルターの地上に雷吼樹があるとしました。とすれば、雷吼樹が燃え広がらない理由も必要になります。それがなければ雷吼樹は存在しないことになるからです、この森が実際に焼かれ果てていないのであるから。

ニユーバイカルはかつてプロスキ・トルバチックが活動していた時期に流れでた溶岩の流れ、地殻変動と断層が作り出した湖で、形状は異様を極めます。いわゆる火口湖に近く、メインシェルターを囲むような形で形成されているのです

「なるほど、そいつが炎をせき止めているといふことか」

「おそらくです。M・バンディクー」

「しかしコムログ、その湖はさつきのシェルターを完全に囲つているわけではないのだろう？ ならば他の場所から火が回る可能性は高

い」

「M・バンティクー。ある仮説が、私にとつては当たり前だつたことなのですが、成り立てば、火が回るルートはたつた一つです。

この湖がニユーバイカルと呼ばれるのはかつて世界最深の湖であつたバイカル湖と様々な点での偶然の一致コイニシティンスがあつたからです。その約2000mにも及ぶ水深に立地、そして独特の三日月形です」三日月というものがどんなものか僕達にはよくわからなかつたが、コムログが何らかの合図をすると現れたホロスクリーンのお陰で理解することができた。

たしかに、湖はやや北東から南に位置し、巨大に湾曲しながらシエルターを囲んでいる。

「ご覧のとおり、ニユーバイカル湖が生きていれば、北東から南に炎の行く道はありません」

「北側と西側はガラ空きじやねえか」「北には海があります。M・ブルー」

なんだって？、何？、え？、そのような意味を持つ言葉たちが僕らの口から一斉に飛び出した。

大佐はしかめつ面をするに踏みどどまつていて、大抵のことにはどこを風が吹くかといったような感じの博士ですら、ぼくらの異口同音となつた。

「それは確かか？」

これは貴重な姿だ、博士すら少し興奮している。それもそうだろう、現在の科学者にとって、海は夢の塊だ。生物の母、そこにはどんな未知のエネルギーが存在しているのだろう。

「可能性です、E・ロマンコフ。常識的な知識として、地球の北の果てには北極海があり、凍りついた地表があつたのです」

「まだ干からびていない、最後の海か」

「そうなつている可能性もあります。何しろ、信じがたいことです
が、あの太平洋が消滅したとあつては しかし、とにかく、私に
とつて最も妥当な推理は北には海が残つているということです。あ
るいは西側のように何らかの耐火物がこの一帯を囲んでいるのかも
しません」

「そんなに大きな範囲を囲める耐火物が存在するのかい？」ヒジヨ
ー・ジ。

「はい、自然に存在します。苦灰岩や鉱石の多い岩山などがあれば
考えられます。ドロミーティのような山岳地帯がうまく形成されて
いる可能性があります」

ドロミーティという謎の単語を知っているものは僕達の中にいな
かつた。だけど僕達は誰一人それについて質問しなかつた。コムロ
グの言つことは正しいのだ、そう信じるのだ。わからないことを掘
り探れば、次から次で際限がない。

水圧

「話が逸れているな。とにかく脱出の方法だ」

カッサード大佐が言った。

そうだ、この際、どうして雷吼樹の炎が燃え広がらないのかとか、滅びた地球のどこかで奇跡が起きているかもしないということは二の次だ。まず僕らは僕達の命を繋げなくてはならない。

「そうですね。まずはそれが先決だわ。エレベータが向こう側に到着したらどうすればいいの？」

「まずは先ほど申し上げた通り、上昇エレベータへと移動します。上昇エレベータへは小さなシェルターが直通しているだけなので、なんの問題もありませんが、ここで皆さんに〇.2バレルを確保して頂きます。人数分は十分にあるはずです」

「〇.2バレルか」

ジョージが右手で後頭部を抑えた。

「まさか、泳いで岸に上がるなんてことはないわよね？」

「残念だな、ミユキ、君の推理は実に惜しい。

「申し訳ありません、M・エレレンス」

「なんてこと（ホーリー・ヘル）、悪夢だわ」

「自然の水の中を泳ぐのは初めてだ、まったく、馬鹿げていやがる」
ガンドが皮肉った。自然の水の中。その言葉に僕は何らかの、漠然とした疑問と不安を覚えた。

「仕方ねえな。詳しく教えてくれ」

「水中と言つても湖底から水面まで浮上するわけではありません。
M・ガンド。さすがにそのスースでも2000m級の水圧には耐えられないでしょうし、そもそも水の重みで我々は動けないと思います。

我々が上昇エレベータでたどり着く先は地下です。出口は対岸の岸壁、湖底から約1800mに位置していますので、我々はそこか

ら200mほどを自力で浮上しなければなりません。出口までは洞窟が続きます。洞窟をまっすぐ進むと二重ドアがありますので、私がロックを解除します。

出口から外に出る際に注意していただきたいのは、幾許か水位に変動があるかもしないという点です」

ちょっと待て、僕は頭の中でそう思った。何か引っかかる言葉があつたような気がする。

「話を止めて悪いが、ひとつ聞きたい」

「なんでしょうか？M・ビジネス」

「今、こう聞こえた気がするんだ。出口は対岸の岸壁」

「そうです。もともと、この経路は一帯を覆う湖の外側への緊急脱出通路なのです」

「じゃあこうじつことかい？今、僕らは湖の中にいる」

もしそうなら、僕は今までどれだけ自分が脳天氣だつたかということを思い知らされることになる。初めての感覚が僕を襲いそうになる。莫大な量の自然の水、湖の中に、もうすでに僕はいる。

僕はそれを想像して目眩を覚えた。想像が僕を押し潰そうとしているかのようだ。

「その通りです。我々が搭乗している水平移動エレベータは現在、ユーバイカルを突き抜けるパイプラインを移動しています」

僕、ジョージ、ミユキ、ガンド、つまりは一般人の精神に緊張という侵入者がいとも簡単に入り込んだ。僕はグローブを外して手のひらを確認した。どうしてそんなことをしたのかはわからない。それは美しくも醜くもない普通の手のひらだった。手のひらには、じつと汗が滲んでいた。

医者はまだ眠っている。

「こきなりとんでもないことを知ってしまったようだね」「ジヨーディが半分ぐらい笑いながら言った。

「笑うしかないぜ」

ガンドも瞬きを忘れていたようだ。

「申し訳ありません。伝えるのが遅くなってしまったようだ」

「仕方ないさ。君と僕らではちょっと常識が違うみたいだから」
僕は顔をひきつらせながら言った。僕は怖いのだろうか。

「だが対岸に出口があるところは幸運だな。泳いで湖を渡らなくともいいわけだ。その点は安心と言つか、まだよかつた」

「そのことなのです、M・バンディイクー。湖がまだ存在していることは私の予測ではほとんど確実なのですが、どのくらいの水量が残っているかという点は全くわかりません」

「200mの浮上では済まないかもしないこと?」

「それもあります、M・Hレレンス。しかしその逆もあります。だから、その点を十分に注意していただきたいのです。

もし水量が増えていれば我々は予想よりも多く泳がなければなりません。そしてもし水量が減つていれば我々は泳ぐのではなく、崖をよじ登らなければなりません。ロッククライミングです。さらにもし水量が減少していくことに気付かず、勢い良く出口から飛び出せば、最悪の場合は何百mも下の水面に叩きつけられてしまします。出口から脱出するとき、そのことに注意してください

「崖登りか、全くこりこりなことをやらされたるや」

全くもってガンドの言つとおりだ。

「大昔の人は強化ステッスなしで200mも浮上してたの?」

「とんでもありません、M・Hレレンス、死んでしまいます。技術的にステッスは存在していましたが、ここに用意されていたのは浮上カプセルです」

「それを使えばいいじゃないか」「僕は本当にそれを使いたかった。

「それが、どこにも見当たらないのです」

「どういうことだ?」「

「何者かに使用されたとしか思えません」

「コムログが何者か、というのだから、それが誰かということはわからないということだ。でも、僕らより先にカプセルを使ってしまつた誰かを僕は恨みたかった。」

「どのような理由かはわかりませんが、ここからの脱出で使用されたようですね。あるいは湖の向こう側に渡りたかったのかもしれません、私の記憶によると、湖の向こうにはただただ続く緩やかな山岳地帯です。」

「いまも緩やかな山岳地帯だといいわね」

「また怪物の森が続いてるかもしれんがな」

ミコキとガンドがそんな会話をしているとき、突然エレベータが僅かな振動で震えた。

「到着です。皆さん

ほとんど音も立てず、エレベータの扉がゆっくりと開き始めた。

僕らは身構えてエレベーターの扉の全開を待った。何かが飛び出してはこないだろ？何かが起こりはしないだろ？そんな不安が僕を襲う。

ようやく扉が全開すると、とにかく出口の扉に悪いことが起きていて、ここまで水が侵入しているということはないようだ。しかし極悪の生物はどうだ。まだわからない。僕らは鋼鉄の箱から、暗闇の中へと侵入する。

大佐が先頭に立ち、その後ろにサーチライトで前方を照らすガンドが続いた。大佐は銃とナイフを同時に持つ例のスタイルだ。

強力なサーチライトが最初に照らし出したのは無機質な壁だつた。そこは本当に何もない部屋で、その無機質さときたらエレベーターのほうがマシなぐらいだ。あるのはたつた一つ、もうひとつ扉だけだ、おそらくあれが上昇エレベーターだろ？

「上昇に要する時間は？」

静寂を破つて博士が言った。

「ものの数分です」

コムログは全員が部屋に入ったことを確かめると、扉の横の壁を触つた。扉は入ってきた時よりも滑らかに閉まつた。そのままコムログはもうひとつ扉の前に移動し、扉を閉めた時と同じように壁を撫でた。

「こちらです」

上昇エレベーターは音も立てずにその口を開き、何世紀も前から溜め込んでいた吐息を吐き出した。

「ふう」

ガンドが大きな溜息を吐き出した。気合を入れたつもりだろ？

「緊張するのか？」

僕は訊いてみた。僕は僕の胸の内側に何とも言えない感情が漂つ

てることに気付いた。

「緊張？まあ緊張もしてるけどな、なんだかほっとしてる。こんな穴蔵の中で死ぬのはごめんだね」

「同感だ」

その理由が僕にはわからなかつた。地下とはなんのだろう。地表には新たな危険が待ち受けているに違いない。それでも僕はとにかく外に出たかった。生まれてこのかた見たことのなかつた太陽を生命の本能が求めている。

「行こう」

大佐はエレベーターの中に入ると地表を見上げた。
「生まれ変わるような気持ちね」

ミコキがその後に続く。

そうだ、僕達は地下から這い上がり、もう一度太陽の下に生まれる。

「傷は大丈夫なのか?」

「問題ないさ」

ガンドとジヨージが踏み入った。

「やはりこれは着ねばならんか」

博士はいかにも嫌そうにスーツを抱えてエレベーターの奥に行き。その場で着替え始めた。

エレベータは大した広さではない。8人と巨大なバックパックを詰め込むと、半分の空間を失ってしまう。

「何してるんですか」

ミコキがやや固まつていった。

「着替えだよ。私もスーツを着ねばならんだろう。止めんでくれ」

「博士…」

男共は何とはなしに天井を見つめた。おかげで全員がカツサード大佐の姿勢を真似した形になった。

「放つて置こう」

僕はそう言つて後ろを向き、そのままエレベーターの中に入った。

最後に乗り込んだのはレイヴン・ジャックともちろんコムログだ。

コムログが扉を閉めるとエレベーターが作動し始め、狭い空間に緊張が走つた気がした。エレベーターはほとんど揺れを感じさせない。

「確認します。この先にあるのは洞窟です。その洞窟を抜けて湖を200m浮上すると陸地です。たどり着いた先の大地については全

くの未知です。一応ではありますが、私が知っている情報を頼れば先に広がるのはベーリング平原という名の広大な平地です。ベーリング平原を辿り、湖を迂回して南へ抜けるのがこの森から抜け出す最短のルートだと思われます」

「湖から浮上したあのルートはその都度考えよう。できれば元の場所で回収船を呼ぶ方がいい。我々にとつては空も含めて知っている情報が全くない」

博士の言い分には一理あった。今回ぼくたちがこの北の大地にこられたのも、僕の知らない、賢い連中の調査があつたからなのかもしれない。実際、僕と博士たちが辿った空のルートは全く同じだった。しかしだからと言つてわざわざ遠回りをして危険な森を探索するのもどうだろうか。

「わかりました」

「コムログ」

ジョージがバックパックを開けて中を探つた。

「これを」

それはステッツだった。生身のアンドロイドはそれを受け取つた。「ありがとうございます。私からも皆さんに渡して置かなければならぬものがあります」

コムログが壁を触ると、天井の一部が開き、中から小型の酸素ボンベが降りてきた。ただしその数は7つしかない。

「私は長時間呼吸しなくても生存可能なように製造されているので必要ありませんが」

「コムログがそこまで言つたとき//コキが遮つた。

「大丈夫よ、見て」

そう言つとミコキはステッツのつなじからつながるフードケースを開き、マスクを装着した。

「このマスクは酸素ボンベとしての機能も備えている。理論的には酸素ボンベとは別物だけね」

ジョージが言つた。

「それは安心しました」

「ゴムログがそう言うと酸素ボンベは天井に吸い込まれた。

「装着の前に正確に作動するか調べる必要がありましたので」

「ゴムログはもともと着てている簡素な服の上からスーツを着て、ミニキを真似るようマスクを装着した。

「素晴らしい快適ですね。重みもない」

「誰が作ったと思ってる」

博士がニヤリと笑ってマスクを装着し始めた。見ると大佐と医者もマスクをつけようとしている。

エレベータが少し振動した。止まつたのだと思った。

「到着です。皆さん」

僕はマスクを装着し、コイルガンがガンホルダーにしっかりと詰め込まれていることを確認した。

「洞窟はかなりの大きさです。自然の洞窟を利用したものなので、内部の構造のほとんどが不明です」

「それに加えてどんな変化を起こしているかわからないというわけだな」

「その通りです。」・ロマンコフ

「仕方ないさ」

「そろそろ行こうか。開けてくれ

カツサード大佐は僕が当然に持つていてるような感情を完全に持ち合させていなかつた。恐れというものは完全に消滅している。ただ進まなければならぬ道のりを進む。そういう覚悟が僕にも必要だ。

「参りましょう」

僕らは進む。地下の穴蔵を、光を求めて、地底。底の世界を。

水

「コムログが壁を撫でると、徐々に扉が開きだした。

「なに、これ」

ミコキが呟いた。

「コムログ！」

僕は叫んだ。これは一体何だと僕が叫ぶ前に彼は答えた。

「水です」

開いていく扉の隙間から白い煙が立ち込めてくる。それは猛烈な勢いでエレベータの内部に充満し、暗闇を作り出した。

じつとエレベータの上部を見上げると、ライトが白い煙で覆われてしまつていてことに気付いた。

水？こんなものが水なのか？たとえ毒ガスであつたとしても、ここにいる全員は既にマスクを着けているので問題はない。それでも僕は自らの鼻と口を手で塞いだ。

「大丈夫です！成分はただの水分です」

暗い。それはあの巨大梯子で感じた闇よりもさらに深い深渊の闇だつた。ただ暗いというだけで僕はパニックを起こしかけた。

僕は誰に急かされるでもなく暗視ゴーグルを起動させた。見えない。暗視ゴーグルの先に映るのは鮮明な地下の世界ではなく。闇のなかでうごめく多量の薄暗い灰色の斑点だけだった。

「なんだこれは！」

僕は暗闇の中で叫んだ！

「大佐…どうする…」

「落ち着け」

カツサード大佐の落ち着きは人間のものとは思えなかつた。

「ビジネス。暗視ゴーグルは作動しているか？」

「だめだ！全く何も見えない」

僕は博士の問いに答えた。この女の冷静さも計り知れない。

「なるほどな、赤外線モードに切り替えても無駄なようだ」

博士は冷静に言った。どうやらゴーグルを切り替えているらしい。このゴーグルは幾つかの暗視モードを搭載している。

「音波もだめだな」

今度は医者が言った。

「コムログ、これは水だと言つたな？」

「私の分析では完全に水そのものです。一体どうこいつとでしょ」。

「これは」

もしこれが本当に水なら、僕はその水圧を感じ取ることができるだろうし、体が少しは浮き上がつたりするはずだ。これは液体ではない。

「ガンド、サーチライトだ」

大佐の言葉を聞いて、ガンドはすぐにサーチライトをつけた。もつとも直接的で原始的な方法だ。

「つけますぜ」

ガンドの声が聞こえると、出し抜けに周囲が明るくなつた。

「眩しい！」

ミコキが小さな悲鳴を上げた。僕の目も眩んだ。そうだ、今度は明るすぎるのだ。視界のほとんどが過剰な光で覆われてしまつている。これでは何も見えない。

「きつてくれ！ガンド！」

「すまん！」

狭いエレベータ内でのサーチライトの強烈な光は苦痛そのものだつた。ジョージが訴えるとガンドはすぐにサーチライトを切つた。「なるほど、これは霧だな。それもとことん濃霧だ」「そんな…」

コムログの声は驚きを示していた。

「ゴーグルを水中用に切り替える」「

僕はそんなモードがあることは知らなかつた。それもそうだ、まさか水中でこのゴーグルを使う機会に出会えるとは思つていなかつたし、水の中に潜るなんてことも考えていなかつた。よくもまあ、こんな機能をつけておいてくれたものだ。

ゴーグルの内部画面に水中モードの表示が浮かんだ。それと同時に真っ暗だった視界が徐々に色づき、外部の世界を明確にしていく。そして僕は見た。エレベータの外側にある洞窟の中の奇跡を。

エレベーターの外に広がる洞窟の世界は僕が予想するよりもはるかに大きかった。そして一層目を引くのは各所にそびえる巨大な物体だった。

白くなめらかに輝く物体を見て、誰もが啞然とした。

「なんと巨大な…」

「生物かしら」

ミユキの問にはコムログが答えた。というよりコムログをおいて他にこの物体の正体を知る者はいなかつた。

「成分はこれが完全に鍾乳石であることを示しています。しかし、これほど巨大なものは史上確認されていません」

コムログと大佐がエレベーターの外に出た。それに連れて僕らも鋼鉄の床からごつごつとした岩のような地表を踏んだ。地面はひどく滑りやすかつた。

「綺麗ね」

ミユキはそう言つたが、僕にはどこか危険なものに見えた。

「しかし鍾乳石には見えませんね。こんなにも巨大で光沢のある鍾乳石は記憶にありません」

「鍾乳石っていうのはこの白い塊のことかい？」

「そうです、M・バンディクー。主に炭酸カルシウムを元に生成された洞窟生成物ですが、ちょっと私には信じられない規模です」

そう言つてコムログは洞窟の奥に目を向けた。想像を絶した巨大空間の一角に直径がゆうに20mを超している白っぽい円柱状の物体が天井からぶら下がっている。むしろそれは地面に向かって突き進んでいるように見えた。

僕はその物体を下から順に上へと眺めていった。50m以上先の空間は暗くて見えなかつた。

「いぐぞ」

博士が言った。

「案内してくれるな？」

「もちろんです。少し動搖しましたが、参りましょう」

「その時だった。」

「ビジネス！」

Gandalf が大声で叫んだ。僕には何がなんだかわからなかつた。ひ

とつ判断できたことは、僕に危機が迫つて いるということだけだ。

ガンドは僕の方に飛びかかろうとした。その右手にはナイフが握られている。

ところが、飛びかかるうとした体制でガンドは動きを止めた。その瞳は僕の後ろの空間を見つめている。僕は瞬時の判断で後ろを振り向いた。

不自然に宙に浮き、妙な動きで逃げていく生物の姿があった。

「なんだあれ」

その未知の生物は攻撃的な種族ではないようだったようで、僕は少しだけ安心した。

「おそらく魚だと思います」

魚か、資料で読んだことがある。代表的な水中生物だ。だがなぜ

水中生物が空中を浮遊しているんだ？

「なんていう魚なんだ？マグロか？サケか？うまいらしいじゃないか、魚というのは」

僕は知っている限りの魚の名前を挙げた。

「いえ、あのような魚は見たことがありません。申し訳ありません、データにないのです」

「大丈夫か？気分でも悪そうじやないか」

「大丈夫です、M・バンディクー。少々、信じられないことが多いです、気が動転しそうですが…私がアンドロイドでなければ頭痛に見舞われていたかもしれません」

「そうか、そうなのだ。ほとんど何も知らない僕達にとってこの世界は未知との遭遇だが、全てを知っているコムログからすると、常識の崩壊であり、固定概念の破滅なのだ。

「あれは攻撃してこないのか？」

博士がコムログに訊ねた。

「なにぶん魚ですから、故意に我々を攻撃してくるとは思えません。さきほどの反応を見ても臆病な性格のようですし。ただ、大型の魚類や水棲哺乳類には気を付けなければいけないかもしません」

「あれでも大丈夫なの？」

ミユキが最も巨大な鍾乳石の奥を指さしていった。

鍾乳石の奥から何百匹もの魚の群れが現れた。魚たちはまさに水中を泳ぐが如く空中を旋回し泳ぎ回っている。1匹の大きさは手のひら程度だが、群れた魚たちは一種の巨大な生物に見えた。魚の群れは僕たちに近づくことなく洞窟の奥へ消えていった。

「コムログは長い間、何も答えなかつた。

「とにかく行くしかない。武器は携えておいたほうがいい」大佐の言葉をきつかけにして僕らは歩き始めた。

少し歩いた所でコムログが口を開いた。

「申し訳ありませんでした、M・エレレンス。先程は、どうも何もかもが判断できる現象ではなかつたので」

「いいのよ」

ミユキは明るい声で言った。

「きっと私達よりあなたの方の驚きが大きいのね。あなたは何でも知つてゐるから、これがどれくらいありえないことかわかつちやうのよ」

「そうかもしません」

「心配するな、コムログ。むしろ喜ぶべきだぜ。既存の情報ではありえないことを驚くのは当然だし、そうでなきやあ発見や発明とは言えん」

「ありがと」、「えこます、D・レイヴン」

「魚は水の中にいるんでしょ」、「うへ」

「うへです。海や湖、川とにかく水のあるところにいる生物が魚です」

「でもあれは魚なんだう？」

「はい、D・レイヴン」

「難しいな、コムログ。だが現実とはそういうもんだ。水の中にいるのが魚だと叫うなら、水の中にいない魚は魚じゃないはずだ。だがあれは魚なんだう？どうかね？常識が覆った。お前さんはこれから魚という生物の定義を大きく書き換えなければならない」

「黒い白鳥ですね、D・レイヴン」

「黒い白鳥？」

「これと同じような哲学的問題があるのです、M・H・レレンス。白鳥とはそれまで真っ白な鳥のことを言ったのです。しかしある日、黒い白鳥が見つかる。遺伝子を調べても、生物的な特徴を調べても、この鳥は白鳥に間違いない。それなのに黒い。間違っているのは今までの常識か、はたまたこの黒い白鳥か。たった1羽の白鳥の登場で、世界の常識は覆つたのです」

「なんだか難しそうな話ね」

「そんなことはない。要は常識にとらわれるなってこいつた」

「それから、我々の常識は非常に脆く、未来は予測ができないといふことです」

最も大きい鍾乳石までは思つたよりも距離があつた。といつゝとは、思つたよりも時間を要したということだが、その間にも多くの魚類が僕たちの周りを泳ぎ回り、僕たちなど存在しないかのように過ぎ去つていつた。

「触つても大丈夫なのか？これは」

「特に問題はないと思います。M・ブルー」

ガンドは鍾乳石に手のひらを当てた。

「なんだこりや」

「どうしました？」

「かなり熱いな、熱を持つてる」

コムログも鍾乳石に手を触れる。

「本當ですね。妙な温かさです」

「コムログ、道が分かれてる、どちらに行けばいいんだ？」

「方角的にはあちら側ですね、M・バンディイクー」

そう言つてコムログは純粹な道なりの方向を示した。

「あちらの穴藏には何がある」

大佐は岩場に空いた大きな穴を指さした。

「申し訳ありません。データにはないようです」

「不自然だと思わんか」

コムログはじつとその穴を見つめた。

「そうですね、確かに…破壊されたあとのように見えます」

見ると、確かに穴は不自然に存在していた。まるで人工的に切り取られたその穴の周囲には瑠璃色の岩が点在していた。

「あれはラピスラズリですね。普通の岩石と混在しているのか、ここにある岩のほとんどがラピスラズリでそれが露出しているのかはわかりませんが」

「ラピスラズリか。この地下というのは資源にあふれたところらしい

いな

博士の声が嬉々としたものに変わっていく。

「博士、あそこは調査する必要はあるのか？」

大佐が博士に訊ねた。良い判断だ。

「どう思つ？」

「あんたが興味を持つのはわかるが、脱出が最優先だ、深追いはせんほうがいいだろう」

「危険そなうなら引き返すさ」

「名目上、このチームのリーダーはあんただから、そいつなら従おう、ただし危険かどうかの判断は俺がする」

「感謝する」

僕たちは渋々と洞穴に近付いた。

一刻も早く脱出をしたいが、重要な資源を見つけることも重要だ。それは死んだ地球での人類の新たなる繁栄につながるかもしない。危険かもしれない、という程度のリスクならば、繁栄のきっかけを手に入るにたるリスクではある。

僕はいろいろな想像をしてみた。

穴は妙に人工的だ、もしかすると過去の人間が新たなシェルターを作り出していたのかもしない。いや、ここにまだ生きている人間がいても、僕は大声を挙げるほど驚いたりはしない。それならそれでいい、なぜこんなことになつてているのか、コムログが機能停止していた時間の謎が解けるかもしない。そういう意味でもコムログが僕らと共に行動していることは大きい。僕たちだけでは、生存している人間とコミュニケーションがとれないかもしないのだ。何しろ過去に存在していたすべての言語を網羅しているコムログさえ、僕らとの会話にときどき苦労しているふしがある。

僕の想像はどちらかと言うとポジティブなものだった。

洞穴に近づいていくと、いつそう視界が悪くなつていく。そして空気が熱気を帯びていく。スーツの上からでもそれが感じられる。

「熱いな」

僕は人知れず呟いたつもりだった。

「なるほど、コムログの言つてた水つてのは実際は湯だな。エレベータに入つてきた白い煙は蒸気だらう。なんという湿度だ、それにしても」

レイヴン・ジャックが僕の後ろから言った。

僕は洞穴に足を踏み入れた。先に入つていた大佐、博士、ガンド、ミユキの動きが止まっている。それ以上先に進めないので、足下を見ると、鏡のようにつややかなエメラルドの池があつた。

池の水は洞窟の奥深くまで続いていて、その先は見えなかつた。

池の水は見るからに毒々しく、触る気にはなれなかつた。

おかしなことがある、これほどまでに異様な光景を目にしたにもかかわらず。全員の瞳はそれを見ていなかつた。全員が見つめているのは溶けたエメラルドのような地の底の池ではなく、上だ。崖のように切り立つた洞窟の天井。この洞穴は天井が低い。そこに存在している異様な物体に、僕らは目を奪われていた。

クリスタル

クリスタルの化物。

天井に貼り付けられたようにこちらを向く。大きな無生物がそこにいた。

体は巨大そのもので、脚や腕といった部位の関節は異様に尖っている。青白い結晶の塊のような顔。顎は鋭く尖り、口は大きく裂けている。

目にあたる部分はくぼみ、影を作り、全てを飲み込むような闇が潜んでいる。

それは、あくまで人間的なシルエットをしながら、人間ではない異質の存在として僕たちと対峙した。

時間が完全に止まっている。怪物が動き出す気配はない。死んでいるのか、そもそも生き物ではないのか、それすらもわからなかつた。

見下ろす瞳の奥の闇はなぜか、それを見上げる大佐を眺めているように見えた。

「引き返す」

誰が応えたわけでもなかつたが、誰もがそれに納得し、従つた。皆が洞穴の外に出ていくなか、僕はずつと怪物を眺めていた。これはいつたい何だ。コムログが何も言わなかつたということは、彼にもこれが何かわからないのだ。どれだけ目を凝らしても、それは微動だにしなかつた。

どんな目的で作られたのだろう。僕の思考はそんな疑問に移つていつた。

このオブジェは何のために作られたのだ、何かの象徴だろうか？あるいは宗教的な崇拜の儀式に必要なのか、なるほど、そんな雰囲気はないこともない。

宗教、軍隊。人間が産み出した、粘り強く残り続ける生きた化石。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n66860/>

朝の世界

2011年12月1日17時48分発行